

どんな要因がハラスメントを 不快にするのか

京都大学文学部 社会学研究室

2021 年度 社会学実習 報告書

太郎丸 博 編

2022 年 3 月

目次

調査の概要・データの概観・分析結果	太郎丸 博	01
第1章 権力関係とハラスメントによる不快感		19
学生視点から再考する		
セクシャル・ハラスメント	安藤 千恵	20
権力関係と行為の相互作用が		
不快度に及ぼす変化について	佐藤 葉月	30
加害者の地位が被害者の不快感に与える影響	施 君菲	36
セクハラはどうやって見出されるか		
-立場がセクハラ認知に与える影響考察-	田野はるか	42
第2章 性別・性的指向とハラスメントによる不快感		48
加害者の性的対象である性別の回答者の		
回答に与える影響について	古瀬 達也	49
同性愛者の言動はセクハラとみなされにくいのか	工田 菜央	58
加害者、被害者の性別の組み合わせによる		
セクハラ認定の違い	山根 健太郎	63
性的指向とセクハラ被害との関係性		
-大学におけるセクハラについての社会調査-	陳 曉嘉	68
セクハラにおける加害者の性別、性的指向と		
不快度の関係	宮崎 慶人	79
女性加害者のセクシュアル・ハラスメントへの		
不快感の分析	沼田 詩暖	87
第3章 私的親密度とハラスメントによる不快感		94
セクハラ認定のされやすさと場所の関係	足達 莉佳子	95
加害者と被害者の親密度が		
ハラスメントによる不快感に及ぼす影響	田中 大哉	101
当事者同士の関係性による		
セクハラ認定のされやすさの違い	奈良 美佳	107
親しさの程度がセクハラの不快感に及ぼす影響	出口 桐圭	111
セクハラ認定に関わる人間関係と		
行為場所の相互作用	横澤 翠子	117

調査票	124
単純集計表	131

調査の概要・データの概観・分析結果

太郎丸 博

1 問題: どのような要因がハラスメントを不快にするのか

セクシュアル・ハラスメント（以下セクハラと略称）が、労働者の就業環境や学生の学習環境を害する人権侵害であることは、広く知られるようになってきた。このようなセクハラを減らしていくこと、被害が小さいうちに解決することは、重要な社会的課題である。セクハラの原因として加害者のパーソナリティが指摘されることもあるが (Fast and Chen 2009), (Halper and Rios 2019)、加害者の無知や想像力の欠如が原因となることも知られている (牟田 2013)。つまり、自分の行為が相手にとってどれだけ不快なのかがわかっていない、ということがセクハラの原因となりうるのである。それゆえ、どのような行為がどの程度ひとを不快にするのか理解しておくことは、セクハラを防止する上で重要である。そのためには、優れたフィクションやノンフィクションから学ぶことも重要であろうが、この実習の授業では、ヴィネットを使った要因配置調査実験 (Auspurg and Hinz 2015) からどのような要因が被害者の不快感を高めるのか明らかにすることをめざした。

なお、以下では男性も女性も LGBTQ も被害者になりうるし、加害者にもなりうる、という前提で議論をすすめる。もちろんセクハラの場合、加害者は男性、被害者は女性である場合が圧倒的に多いが、それ以外のジェンダーの組み合わせでも被害は生じうる (Dougherty 2009) (Saguy and Rees 2021)。ただし、LGBTQ の多様性を考慮し始めると、ヴィネットが著しく煩雑になるため、今回の要因配置調査実験では、加害者が異性愛者か同性愛者かだけを分けて検討している。

2 授業と調査の概要

リサーチクエスションの選択

授業では、まず私から調査の「お題」を示した。今年度のお題は、

次のうちから一つ選んでリサーチクエスチョンとせよ

1. どのような人が「家族」と認識されるか
2. どのような人が「日本人」と認識されるか
3. どのような行為が「セクハラ」と認識されるか

というものだった。ここ数年はあらかじめ私がリサーチクエスチョンを1つに絞り込んでそれを提示してきたが、2021年度は学生に3つの候補の中から選ばせる、という方法をとった。このようなお題になったのは、単純に私が忙しすぎて十分に問いをあらかじめ絞り込みきれなかったからである。これら3つの問いは、要因配置調査実験でアプローチできそうで、なおかつ社会学的な分析になりうるもの、という条件に合致するものとして私が選んだものである。Auspurg and Hinz (2015) には不公平感の研究が要因配置調査実験の例としてよくあげられていたが、私があまり興味を持てなかったので、上記の3つになっている。

要因配置調査実験を行うことにしたのは、実験の場合、偏ったサンプルでも意味のある研究成果として認められやすいからである。実験であってもサンプルが偏っているせいで一般化出来る母集団の範囲が狭められてしまう可能性はあるが、実験は因果関係の特定法として、偏ったサンプルでも一定の評価が与えられているからである (Kohler et al. 2019)。これは低予算の調査実習で、意味のある分析結果を得る数少ない方法の一つと考えられる。

授業では上の3つのリサーチクエスチョンに関連しそうな論文をそれぞれ2本ずつ学生に読んでもらい、どのリサーチクエスチョンに取り組むべきか、ディスカッションした上で、最終的な各自の判断をのべてもらった。25人の受講生から回答が得られ、表1のような結果となった。セクハラが2/3程度の支持を得たため、セクハラの境界線が研究テーマとなった。

表1 受講生が選んだリサーチクエスチョン

	支持数	比率
家族	5	0.20
日本人	3	0.12
セクハラ	17	0.68

仮説と要因、ワーディングの決定

その後、どのような行為がセクハラとみなされやすいのか、行為の主体や被害者との関係性、場所など、さまざまな要因について、学生にブレイン・ストーミングしてもらった。さまざまな要因が提案されたが、その中から自明性や社会学的意義などを考慮して私が最終的に以下の 6 つの要因を選んだ。

1. 加害者の性別（男／女）
2. 加害者の性的嗜好（ストレート／同性愛）
3. 加害者の地位（ゼミの教授／ゼミの先輩／ゼミの友人）
4. 加害者との親しさ（親しい／あまり親しくない）
5. 場所（廊下／LINE）
6. 被害の種類（異性の好みを聞かれた／容姿をけなされた／食事の誘いを断ったら無視されるようになった）

私が特に悩んだのは、場所という要因を組み込むかどうかについてであった。オンラインか対面かの違いは学生の間でかなり関心が高かったのだが、身体接触のようなセクハラはオンラインでは発生し得ないので、被害の種類を限定されてしまうという問題があった。けっきょく調査実習なので、学生の意向をできるだけ反映するという判断をした。また、「二人っきりのときのほうが他の人が周りにいる場合よりもセクハラとみなされやすい」という仮説もあったが、これも LINE で二人っきりか、周りに人がいるか、という言い方がヴィネットを作るときに少し変なので、けっきょく採用しなかった。あとは「性的に欲求不満そうな加害者のほうがセクハラとみなされやすい」という仮説を推す意見もかなり多かったが、性的意図を推認できるほうがセクハラとみなされやすいのは当たり前だと感じたので、採用しなかった。

また、当初は「以下のような行為や状況はセクハラだと思いますか」という質問をし、「女子学生が親しい男性の教授（ストレート）から異性の好みを聞かれた」といったヴィネットを提示することを考えていたが、ある学生から「自分は不快に感じるが、セクハラかどうかはよくわからない、というようなことが結構あると思うので、答えるのが難しい。むしろ回答者自身がそういう体験をしたらどの程度不快なのか聞いたほうが回答者は回答しやすいし、正確な回答が得られるのではないか？」という提案があった。被害者の感じ方がハラスメントかどうかの判定では重要な論点になるので、この提案はたいへん説得力があったが、気になる点もあった。すなわち、学生の友人／知人に調査協力を依頼すると、回答者の半数程度は男性になると思われる

が、実際のハラスメント被害者の大半は女性とされているので、回答の半分はあまり意味がない、ということになりはしないか、という可能性を私は考えていた。しかし、被害者が女性の場合と男性の場合でどのように異なるかは検討する価値があると考えられたし、その学生が述べたように、できるだけ回答しやすいことを尋ねたほうが正確な回答が得られると考えられるので、彼女の提案を採用することになった。

調査の概要

上記のような要因やワーディングの検討のために2回プリテストを行っている。回答は受講学生たち自身にしてもらったので、厳密にはプリテストとは言えないだろうが、彼らも対象者の母集団に含まれているので、十分参考にはなった。その際に回答に要する時間もはかっているが、本調査とほぼ同じ内容で16個のヴィネットに回答してもらったが、所要時間は以下のようになった。 $23/27 = 85\%$ が5分以内で回答している。受講学生は真面目に授業に取り組んでいれば質問の内容をあらかじめおおむね予想できたはずなので、本調査で一般の回答者が要する時間はもっと長いと予想されるが、16個ぐらいまでなら尋ねても大丈夫そうだという感触をえた。

所要時間	人数
3分以下	10
4～5分	13
6～7分	2
8～9分	2
Sum	27

調査票は3種類用意し、回答者は無作為に割り当てたが、表1のように一部手違いでA票に対する回答が少しだけ少ないが、回答者が同じ確率で3つの調査票に割り当てられているという帰無仮説は棄却されない ($X^2 = 2.3, df = 2$)。

調査対象者は学生で、大学院生や研究生も含む。京都大学の学生が大半だが、他大学の学生も含む。探索的に所属大学の不快感に及ぼす影響を検討したが、有意な効果は見られなかった。2021年度に京都大学文学部の社会学実習を履修した学生に友人・知人に調査依頼するように指示した。また、私が担当する講義の受講生にも回答を依

頼した。回答は、2021/10/06 から 26 のあいだに回収された。回答者の属性の分布は表 2 のとおりである。

表 2 回答した大学生の基本属性

性別	学年	大学	調査票
女 :174	1 年生 :19	京都大 :197	A 票: 95
男 :133	2 年生 :61	同志社 :7	B 票:100
その他: 4	3 年生 :118	立命館 :7	C 票:116
	4 年生 :51	大阪大 :6	
	研究生、聴講生など:8	早稲田 :4	
	大学院生 :54	(Other): 60	
		NA's : 30	

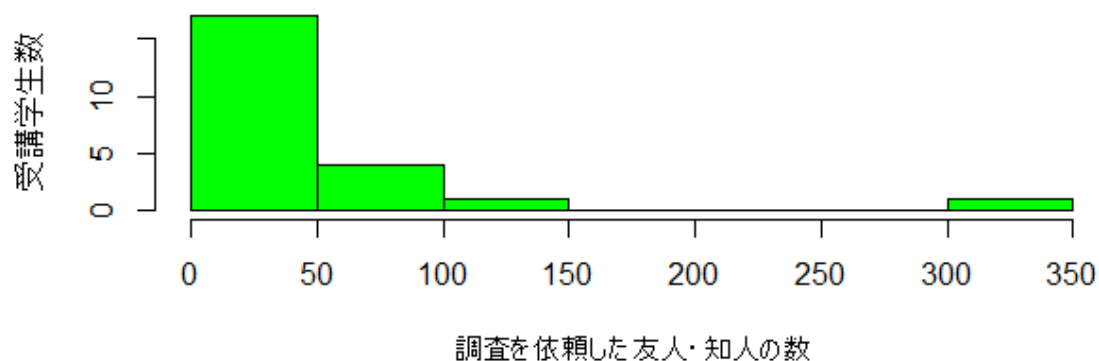


図 1: 受講学生が調査を依頼した友人・知人数のヒストグラム

SNS 等でも回答を依頼し、拡散されているので、正確な依頼数は不明だが、概算で総数 1153 人（一受講生あたり平均 50.1 人）に依頼し、有効回答数は 311 人で、回収率は 27%であった。図 1 は、受講学生数 23 を分析の単位として、依頼した友人・知人の数のヒストグラムである。大半の受講学生は 50 人以下に依頼しているが、1 人だけ 330 人に依頼している。

実験計画の概要

Google Form で、性別、学年を尋ねたあと、

あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。 ### 以下の文中の「ストレート」とは異性愛者のこと。 ###

というリード文に続いて以下の例のようなヴィネットを一つの調査票あたり 13 提示した。

- 親しいゼミの教授（男でストレート）から LINE で異性の好みについて聞かれた。
- あまり親しくないゼミの友人（女で同性愛）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた。

2 水準の要因が 4 つ、3 水準の要因が 2 つなので、理論上は $2^4 \times 3^2 = 144$ 通りの組み合わせが考えられるが、回答者の負担やサンプル・サイズを考慮して、13 ヴィネット×3種類の調査票 = 39 種類のヴィネットを選んだ。加害者の性別、地位、被害の種類とその他の変数の交互作用が推定でき、要因間の相関ができるだけゼロに近づくようにヴィネットは選んだ。要因間相関の絶対値は最大で 0.13、平均で 0.03 であった。このような実験計画の作成には、R (R Core Team 2020) の AlgDesign パッケージ (Wheeler 2019) を用いた。

従属変数である不快感には、「まったく不快でない」から「とても不快である」までの 6 つの選択肢に順次 0～5 の値を与えた。以下ではえられた回答の分布を概観した後、男女別にステップワイズ法で独立変数間の交互作用効果を探索する。2 変数間の交互作用をすべての変数間で仮定したモデルからスタートし、後退ステップワイズ法で BIC を基準にして項を減らしていく。この推定には通常の最小二乗法 (OLS) を用いるが、ステップワイズ法で選ばれたモデルに関しては、回答者をレベル 2、ヴィネットをレベル 1 とするマルチレベルモデル (制限最尤法 REML) でも推定した。計算には R の lme4 パッケージを用いた (Bates et al. 2015)。

3 分析結果

まず、39 のヴィネットに対する不快感のヒストグラムを示したのが、図 2 である。いくつか山が二つあるヴィネットもあるが、一方の山は他方の山に比べて非常に小さいので、無視しても実害ないと思われるが、分散が均一とは言い難い。これは回帰分析の際に悪影響を与えるかもしれない。

次に OLS で主効果のみのモデルと、ステップワイズ法で交互作用効果を選択したモデルの推定結果が表 3 である。さらに表 3 と同じモデルをマルチレベルモデルで推定したのが、表 5 である。なお表 4 は、マルチレベルモデルの参考情報として、切片のみのモデルを推定した結果である。

男女合わせた全体のサンプルで主効果のみを投入したモデル（全体：主）を見ると、男性よりも女性の方が平均的な不快感が高く、相手が親しくなく、友だちよりも教授でストレート、LINE のほうが不快感が高い。ハラスメントの種類は、「異性の好みを聞かれた」場合が最も不快感が低く、「食事の誘いを断ったら無視された」場合がそれに次ぎ、もっとも不快感が高いのは、「容姿をけなされた」場合であった。こういった傾向は、回答者が男性でも女性でもほぼ共通しているが、係数を男女で比較すると、女性の方が全般に絶対値が大きく、決定係数も大きい。特に加害者の性別や同性愛者かどうかといった変数は男性の場合は有意にならないので、男女の相違がきわだつ。ジェンダーの組み合わせが不快感に影響するということは当然考えられるが、女性の方が状況をリアルに想像できるので、ヴィネットの違いに男性よりも大きく反応しているという可能性もなくはない。

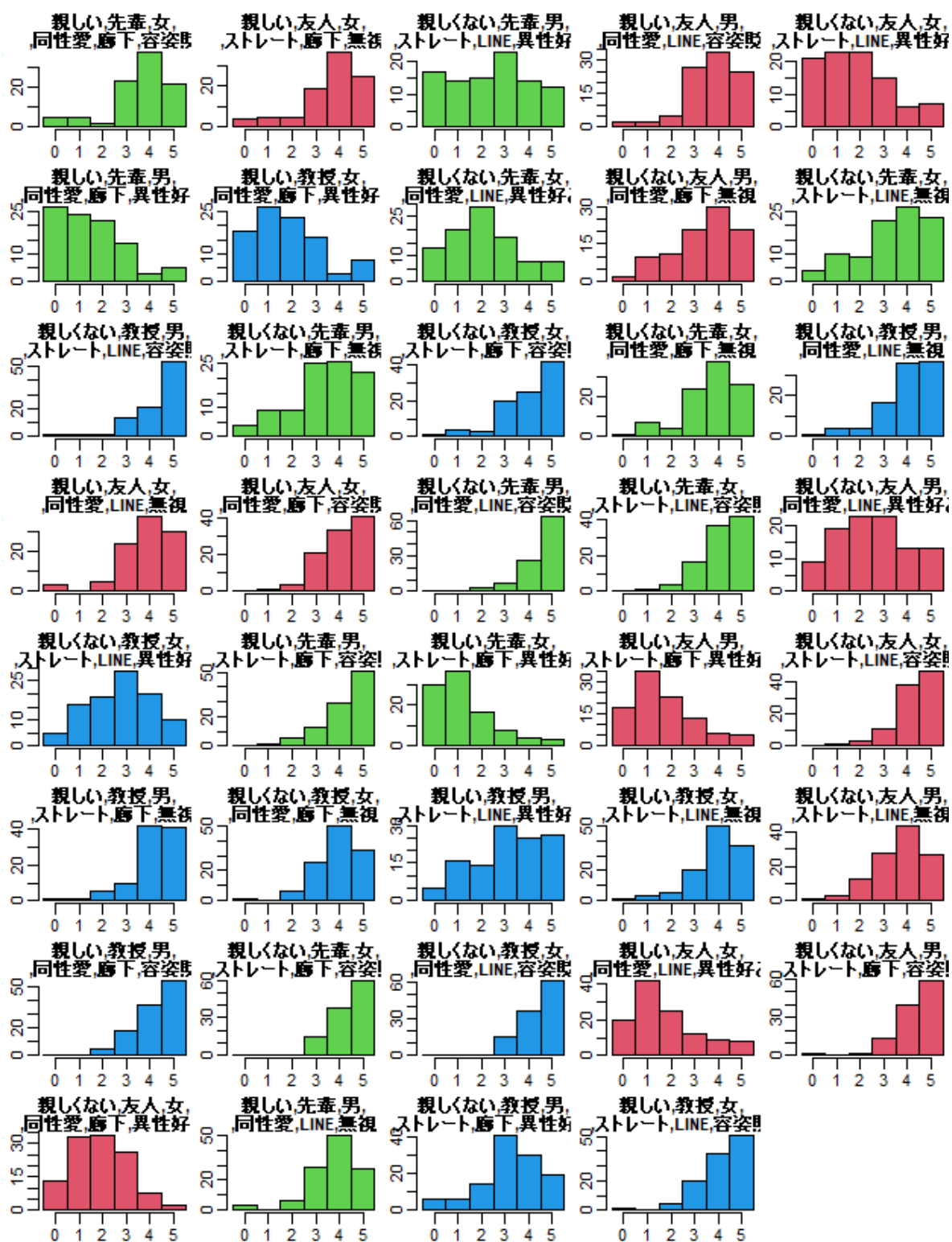


図 2 不快感のヒストグラム（ヴィネット別、色は赤が友人、緑が先輩、青が教授）

表 3 不快感の回帰分析の結果（SW はステップワイズ法で変数選択したモデル）

	全体：主	男：主	女：主	全体：SW	男：SW	女：SW
切片	1.86 *** (0.06)	1.99 *** (0.09)	1.89 *** (0.08)	1.43 *** (0.09)	1.75 *** (0.09)	1.74 *** (0.12)
回答者女：男が基準	0.19 *** (0.04)			0.04 (0.07)		
回答者性別その他	0.13 (0.17)			1.77 *** (0.30)		
親しくない	0.18 *** (0.04)	0.11 (0.06)	0.24 *** (0.05)	0.54 *** (0.07)	0.44 *** (0.11)	0.23 * (0.11)
先輩：友人が基準	0.00 (0.05)	0.05 (0.08)	-0.03 (0.06)	-0.06 (0.08)	0.08 (0.08)	-0.27 * (0.12)
教授	0.40 *** (0.05)	0.31 *** (0.08)	0.49 *** (0.06)	0.80 *** (0.08)	0.32 *** (0.08)	0.84 *** (0.12)
男加害者	0.19 *** (0.04)	0.05 (0.06)	0.30 *** (0.05)	0.51 *** (0.07)		0.47 *** (0.12)
同性愛加害者	-0.08 * (0.04)	0.04 (0.06)	-0.18 *** (0.05)			-0.40 *** (0.09)
場所：廊下	-0.17 *** (0.04)	-0.20 ** (0.06)	-0.14 ** (0.05)	-0.14 *** (0.04)		-0.47 *** (0.09)
無視：異性好みが基準	1.54 *** (0.05)	1.49 *** (0.08)	1.65 *** (0.07)	2.24 *** (0.12)	1.89 *** (0.12)	2.40 *** (0.15)
容姿を貶められた	1.99 *** (0.05)	1.87 *** (0.08)	2.14 *** (0.06)	2.41 *** (0.12)	1.99 *** (0.11)	2.66 *** (0.15)
親しくない×無視				-0.71 *** (0.10)	-0.72 *** (0.16)	-0.68 *** (0.14)
親しくない×容姿貶				-0.28 ** (0.10)	-0.24 (0.15)	-0.20 (0.12)
先輩×無視				0.04 (0.12)		0.25 (0.16)
教授×無視				-0.40 *** (0.12)		-0.93 *** (0.16)
先輩×容姿貶				0.17 (0.12)		-0.00 (0.16)
教授×容姿貶				-0.74 *** (0.12)		-1.08 *** (0.16)
男加害者×無視				-0.52 *** (0.10)		-0.71 *** (0.13)
男加害者×容姿貶				-0.43 *** (0.10)		-0.58 *** (0.12)
回答者女×無視				0.17		

	全体：主	男：主	女：主	全体：SW	男：SW	女：SW
				(0.10)		
回答者その他×無視				-2.81 ***		
				(0.42)		
回答者女×容姿貶				0.27 **		
				(0.10)		
回答者その他×容姿貶				-2.07 ***		
				(0.40)		
親しくない×同性愛						0.70 ***
						(0.14)
先輩×男加害者						0.24
						(0.14)
教授×男加害者						0.56 ***
						(0.13)
廊下×無視						0.39 **
						(0.13)
廊下×容姿貶						0.62 ***
						(0.13)
R^2	0.36	0.31	0.42	0.39	0.31	0.48
Adj. R^2	0.36	0.31	0.42	0.39	0.31	0.47
Num. obs.	3650	1597	2001	3650	1597	2001

表 4 不快感のマルチレベルモデル 1 (切片のみ)

	全体	男	女
(Intercept)	3.37 ***	3.25 ***	3.46 ***
	(0.04)	(0.07)	(0.05)
BIC	13140.44	5670.49	7306.54
Log Likelihood	-6557.92	-2824.18	-3641.87
回答数	3650	1597	2001
回答者数	281	123	154
回答者間分散	0.35	0.48	0.23
回答間分散	1.94	1.79	2.08

表 4 の回答者間分散（レベル 2 の分散）と回答間分散（レベル 1 の分散）を見ると、前者は男性の方が大きく、後者は女性の方が大きい。すなわち、女性の方が個人による回答の違いは小さいが、ヴィネットによる不快感の違いは大きい。表 5 の回答

間分散を見ると、男女差はほぼ消滅しているか、女性の方が小さいので、女性の方がやはりヴィネットの違い敏感に反応していることになる。

表 5 不快感のマルチレベルモデル（独立変数等は表 3 と同じ）

	全体：主	男：主	女：主	全体： SW	男：SW	女：SW
切片	1.85 *** (0.08)	1.96 *** (0.10)	1.89 *** (0.08)	1.39 *** (0.09)	1.74 *** (0.10)	1.72 *** (0.12)
回答者女：男が基準	0.19 * (0.08)			0.04 (0.09)		
回答者性別その他	0.13 (0.34)			1.79 *** (0.40)		
親しくない	0.21 *** (0.04)	0.16 ** (0.05)	0.26 *** (0.05)	0.57 *** (0.06)	0.48 *** (0.09)	0.27 ** (0.10)
先輩：友人が基準	0.04 (0.04)	0.09 (0.06)	0.01 (0.06)	0.06 (0.08)	0.11 (0.06)	-0.19 (0.11)
教授	0.39 *** (0.04)	0.32 *** (0.07)	0.47 *** (0.06)	0.81 *** (0.07)	0.33 *** (0.06)	0.82 *** (0.11)
男加害者	0.19 *** (0.04)	0.05 (0.05)	0.29 *** (0.05)	0.49 *** (0.06)		0.46 *** (0.10)
同性愛加害者	-0.08 * (0.04)	0.04 (0.05)	-0.18 *** (0.05)			-0.38 *** (0.08)
場所：廊下	-0.15 *** (0.04)	-0.18 *** (0.05)	-0.13 ** (0.05)	-0.13 *** (0.03)		-0.48 *** (0.08)
無視：異性好みが基準	1.52 *** (0.04)	1.47 *** (0.06)	1.64 *** (0.06)	2.29 *** (0.10)	1.86 *** (0.10)	2.39 *** (0.13)
容姿を貶められた	1.96 *** (0.04)	1.84 *** (0.06)	2.11 *** (0.06)	2.42 *** (0.10)	1.97 *** (0.09)	2.70 *** (0.14)
親しくない×無視				-0.70 *** (0.09)	-0.69 *** (0.13)	-0.68 *** (0.12)
親しくない×容姿貶				-0.31 *** (0.08)	-0.25 * (0.12)	-0.24 * (0.11)
先輩×無視				-0.09 (0.11)		0.16 (0.14)
教授×無視				-0.51 *** (0.10)		-0.94 *** (0.15)
先輩×容姿貶				0.04 (0.10)		-0.05 (0.14)
教授×容姿貶				-0.72 *** (0.10)		-1.10 *** (0.14)
男加害者×無視				-0.50 *** (0.09)		-0.71 *** (0.11)
男加害者×容姿貶				-0.39 *** (0.08)		-0.57 *** (0.11)
回答者女×無視				0.17 * (0.09)		
回答者その他×無視				-2.81 *** (0.36)		
回答者女×容姿貶				0.27 ***		

	全体：主	男：主	女：主	全体： SW	男：SW	女：SW
回答者その他×容姿貶				(0.08) -2.08 *** (0.35)		
親しくない×同性愛						0.64 *** (0.13)
先輩×男加害者						0.24 (0.12)
教授×男加害者						0.56 *** (0.12)
廊下×無視						0.48 *** (0.12)
廊下×容姿貶						0.58 *** (0.12)
BIC	11336.44	4984.31	6169.43	11195.43	4954.80	6062.42
Log Likelihood	-5614.91	-	-	-5499.29	-	-
		2451.59	3042.91		2440.52	2939.99
回答数	3650	1597	2001	3650	1597	2001
回答者数	281	123	154	281	123	154
回答者間分散	0.37	0.51	0.26	0.37	0.51	0.26
回答間分散	1.11	1.07	1.08	1.03	1.05	0.96

表 3 と表 5 で推定した交互作用効果を図示したのが、図 3～図 8 である。これらの図はモデルからの予測値ではなく、単純にグループ別に平均値を計算したものである。このデータの場合、要因間の相関がほぼゼロなので、モデルからの予測値も単純なグループ別平均値もほぼ同じ値になるので、わかりやすい単純な平均を図示している。まず、図 3 をみると、異性の好みを聞かれた場合、相手が親しくない場合のほうが不快感が高くなりやすいが、食事の誘いを断った後無視される場合は、むしろ親しい相手であるほうが平均不快感が高い。

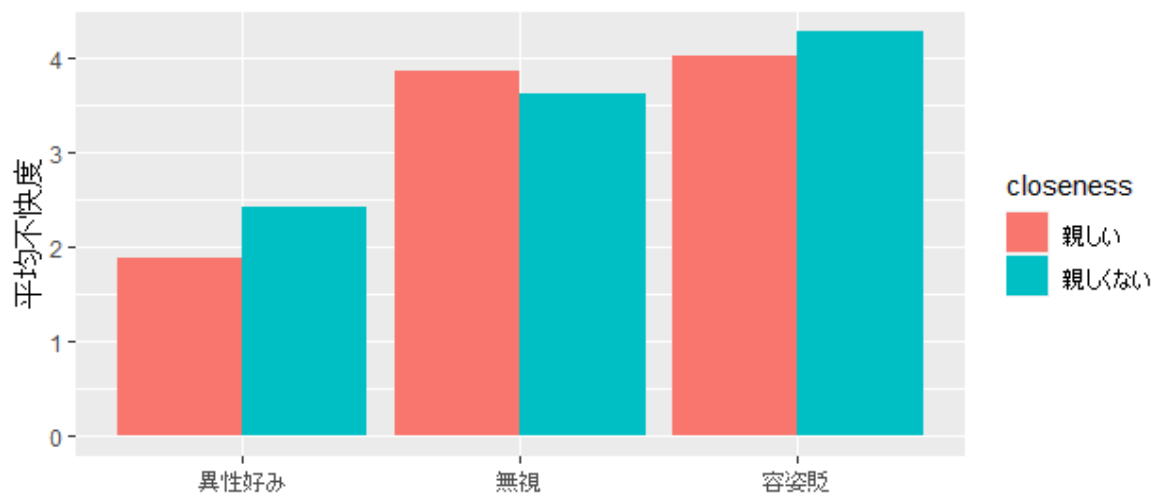


図 3 平均不快度（被害の種類、親しさ別）

図 4 を見ると、おおむね加害者が教授であると平均不快度が上がる傾向があるのがわかるが、女性が回答者＝被害者の場合は教授から異性の好みを聞かれると特に平均不快度が高いことがわかる（男性のサンプルでは加害者の身分と被害の種類の交互作用効果はモデルの BIC を改善していないため、モデルから削除されている）。

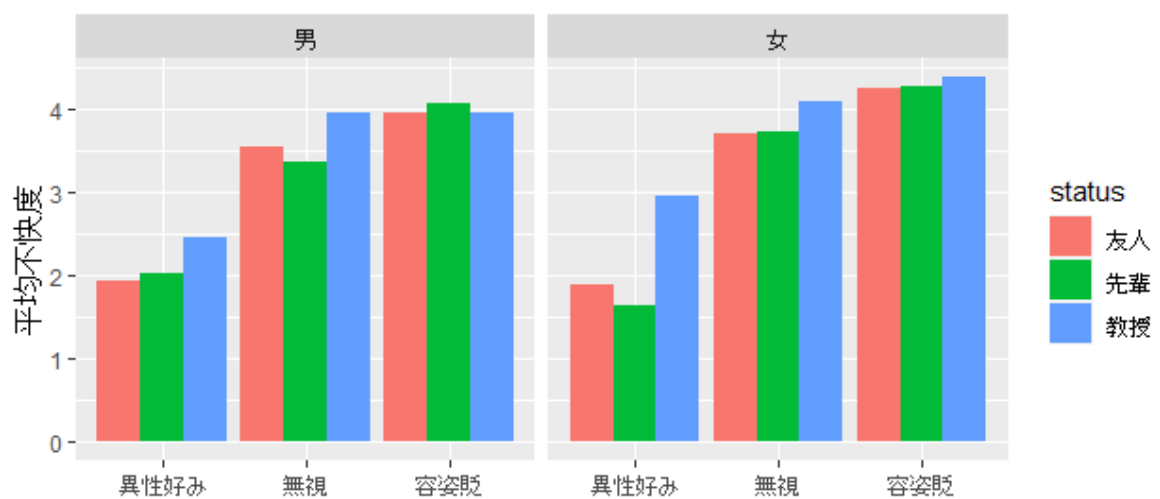


図 4 平均不快度（回答者性別、身分、被害種類別）

図5は、被害の種類による不快感の違いが、性別によって異なることを示しているが、性別で「その他」を選んだ人は、「異性の好み」を尋ねられたときの不快感が顕著に高い。ジェンダー・アイデンティティについて「男」とも「女」とも言いにくい人であれば、性的な嗜好についても説明が簡単ではないということかもしれない。表2で示したように性別が「その他」の人は4人しかいないので、参考程度の情報でしかないが、表3と表5で示したように、この「その他」の効果はすべて統計的に有意である。

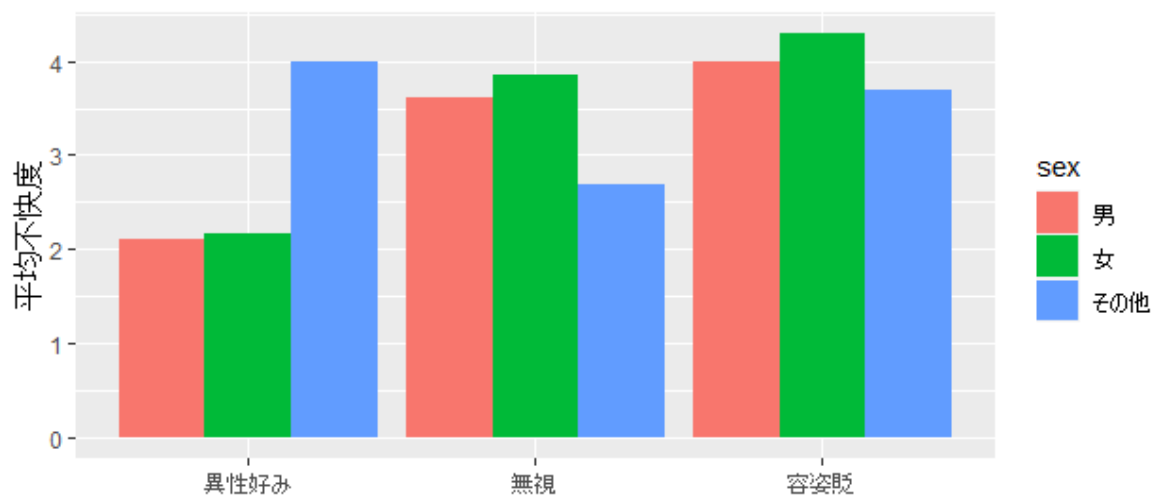


図5 平均不快感（回答者性別、被害の種類別）

図6を見ると、男性は相手がストレートでも同性愛でもあまり不快感に違いはないが、女性の場合は同性愛のほうが不快感が低く、特に親しい相手である場合にそうであることがわかる。

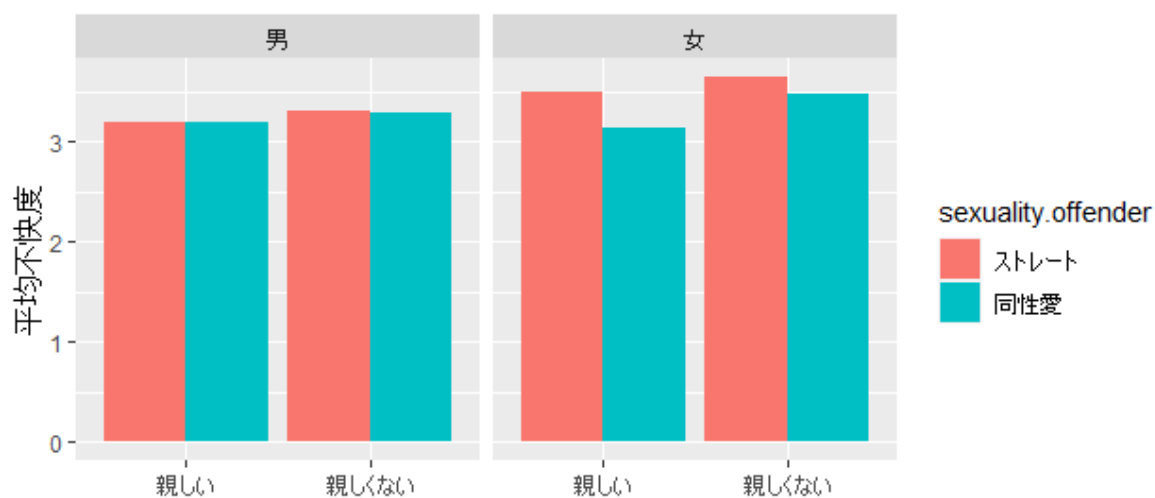


図 6 平均不快感（回答者性別、親しさ、同性愛かどうか別）

図 7 を見ると、回答者が男性の場合、加害者の性別による平均不快感の違いはほとんどないが、女性が回答者の場合、加害者が男のほうが不快感が高く、相手が教授であると特に不快感が高くなっている。

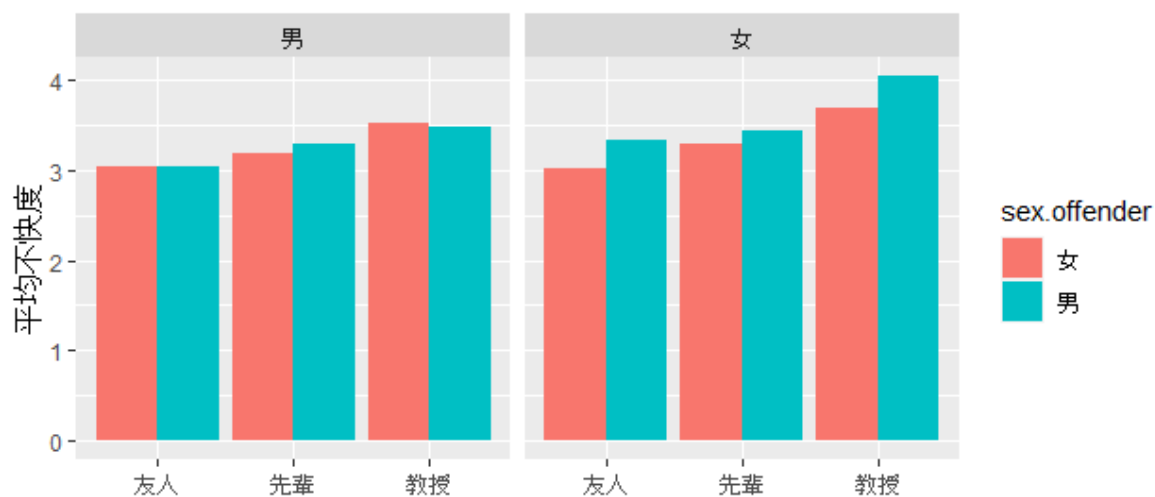


図 7 平均不快感（回答者性別、加害者身分、加害者性別別）

最後に図 8 をみると、男性の場合は廊下での被害に対する不快感がほぼ一様に下がる傾向があるが、女性の場合はそのような傾向は異性の好みを聞かれた場合だけであ

って、無視されたり、容姿を貶められた場合、廊下であっても LINE なみに平均不快度が高い。

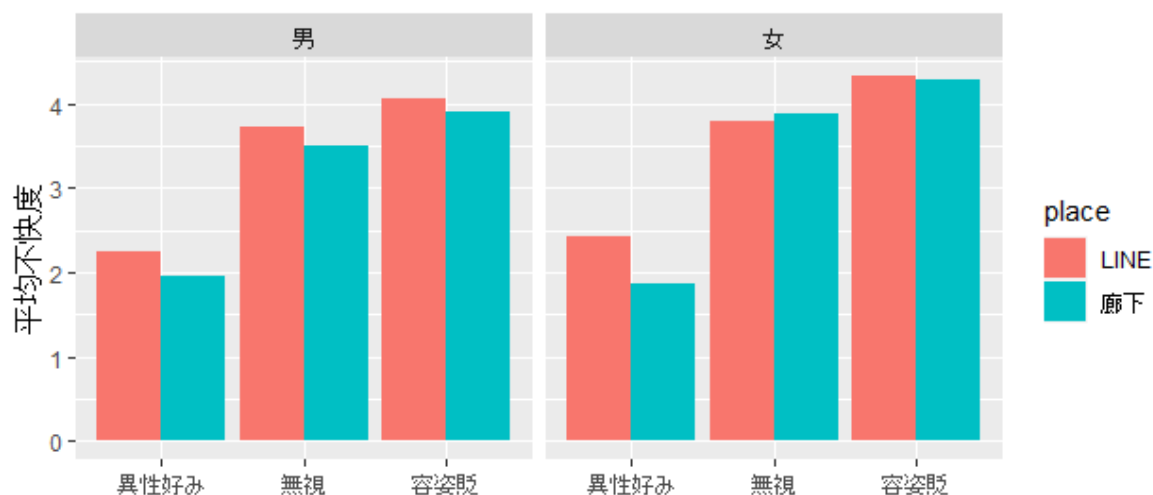


図 8 平均不快度（回答者性別、場所、被害の種類別）

4 議論

実質的な議論は学生たちの書いた章に譲るが、最後に要因配置調査実験のやり方についての反省点をいくつか列挙しておく。

1. 加害者の身分で「友人」という水準を設定したが、「同級生」としたほうが、学年の上下関係がはっきりしてよかったかもしれない。学年が上の友人や下の友人もいるかもしれないからである。また、今回の分析結果では加害者が「友人」でも「先輩」でもほとんど不快感に差はなかったが、「友人」よりも権力があるが、「教授」ほどではない立場を水準として設定してみても良いと思う。例えば、回答者を学部生に限定して「大学院生」にするとか、ティーチングアシスタントとかも良いと思う。今回は、あまりこういう身分の人を知らない回答者がいるのではないかと危惧してこれらの身分については調べなかったが、検討を要する点であろう。
2. 分析結果からわかるように、かなり複雑な交互作用効果が観察されている。今回は BIC を基準にしてモデルを選択したが、AIC にすればもっとたくさんの交互作用効果がモデルに残っただろう。今回の実験計画ではこれ以上複雑な交互作用効果を十分に検討することは不可能であるが、調べて見る価値はあるだろう。調査票の種類を増やせば、ヴィネットの種類を増やすことは可能であり、もっと高次の交互作用効果も推定できるようになるはずである。
3. 今回の調査では回答者の規範意識などは尋ねていないが、そういった不快感の表明に影響しそうな要因を検討することも、今後の課題であろう。つらい目に

あっても「つらい」と表明できない人は少なくない。感情にかんする規範の影響は、元来のリサーチクエスチョンからははずれるものだが、統制変数として考慮に値するように思う。

4. 被害の種類を今回は3つ用意したが、「容姿をけなされる」のように特に不快感の高いものは、要因による差が出にくいように感じた（図3，図4，図5，図8を見よ）。もう少し、不快感に個人差が出るような微妙な被害のほうが、さまざまな要因の効果は見やすいかもしれない。ただし、さまざまな被害の不快感の差を知ることこの調査の目的なので、一概に微妙な被害のほうが良いとも言いきれないが。

文献

- Auspurg, Katrin and Hinz, Thomas 2015. *Factorial survey experiments* 1st ed., Thousand Oaks: SAGE (Quantitative Applications in the Social Sciences).
- Bates, Douglas, Mächler, Martin, Bolker, Ben and Walker, Steve 2015. Fitting linear mixed-effects models using lme4. *Journal of Statistical Software* 67 : 1–48. doi: [10.18637/jss.v067.i01](https://doi.org/10.18637/jss.v067.i01)
- Dougherty, Debbie S. 2009. Sexual harassment. In *21st century communication: A reference handbook*. William F. Eadie, edited by. Thousand Oaks: Sage.
- Fast, Nathanael J. and Chen, Serena 2009. When the boss feels inadequate: Power, incompetence, and aggression. *Psychological Science* 20 : 1406–13. doi: [10.1111/j.1467-9280.2009.02452.x](https://doi.org/10.1111/j.1467-9280.2009.02452.x)
- Halper, Leah R. and Rios, Kimberly 2019. Feeling powerful but incompetent: Fear of negative evaluation predicts men’s sexual harassment of subordinates. *Sex Roles* 80 : 247–61.
- Kohler, Ulrich, Kreuter, Frauke and Stuart, Elizabeth A. 2019. Nonprobability sampling and causal analysis. *Annual Review of Statistics and Its Application* 6 : 149–72. doi: [10.1146/annurev-statistics-030718-104951](https://doi.org/10.1146/annurev-statistics-030718-104951)
- 牟田和恵 2013. 『部長，その恋愛はセクハラです!』，集英社.
- R Core Team 2020. *R: A language and environment for statistical computing*, Vienna, Austria: R Foundation for Statistical Computing.
- Saguy, Abigail C. and Rees, Mallory E. 2021. Gender, power, and harassment: Sociology in the #MeToo era. *Annual Review of Sociology* 47 : 417–35. doi: [10.1146/annurev-soc-090320-031147](https://doi.org/10.1146/annurev-soc-090320-031147)
- Wheeler, Bob 2019. *AlgDesign: Algorithmic experimental design*, R package version 1.2.0.

第 1 章

権力関係とハラスメントによる不快感

学生の視点から再考するセクシャル・ハラスメント

安藤 千恵

1. はじめに

1-1. 問題

1989 年にセクシャル・ハラスメントを争点とした民事裁判が日本で初めて起こされて以降「セクシャル・ハラスメント」という言葉は急速に世の中に広まることとなり、その年の新語・流行語大賞の新語部門金賞を受賞することとなった。当時においては「セクハラ」という言葉ばかりが拡散し、本来の概念は世間に浸透していなかったものの、人々がセクハラ行為を“問題”として意識するようになったという意味では大きな意義がある。その後の 30 年間でセクハラの社会的な扱われ方は大きく変化してきており、現在では重大な人権侵害の一つであるという認識がされるようになってきた。セクシャル・ハラスメントは、職場や労働の場で権力関係を背景に起きると定義されるが、日常で起きる性暴力や性被害、性的な発言や身体接触など幅広い文脈で用いられることも多い（佐々木 2018）。また、当初は女性に対する差別的な発言や行為を主としてセクシャル・ハラスメントとしていたが、現在では男女双方に対する性差別的な扱いを示すという考え方が広がっており、何をもってセクシャル・ハラスメントとみなすかについての基準は漸次的に変化し、曖昧なものとなっている。

そこで本研究では、学生を対象としたアンケート調査をもとに、こういった場合に相手からの行為を不快と感じるのかを明らかにし、その条件を分析する。それにより、セクシャル・ハラスメントになり得る条件を考察し、時間の流れによって変化するセクシャル・ハラスメントの概念を若者の認識から再考することを目的とする。

1-2 仮説

セクシャル・ハラスメントの厚生労働省による定義には“権力関係を背景に”とあり、また学生の場合「教員は学生に対して権力を有しているので、学生に対する性的行為は、同じ行為が学生によってなされる場合よりも、敵対的環境を生み出す可能性が強い」（辻 2009）ため、相手との権力関係や組織における立場を考慮する必要がある。また、近年コミュニケーションツールが多様化しているという背景から、どのよ

うな手段で行為が行われたのかということも着目に値する。例えばテキストベースのコミュニケーションの場合、対面と比較して表情や言葉のイントネーションといった非言語コミュニケーションが制限されるため伝達内容にずれが生じる可能性がある。以上を踏まえ、次のような仮説を検証する。

仮説 1 加害者の社会的地位が、被害者よりも高くなるほど不快感が強い

仮説 2 テキストを媒体としたセクハラ行為の方が、対面よりも不快感が強い

仮説 3 セクハラ行為を行う媒体よりも、立場の違いの方が不快感に与える影響が大きい

2. 方法

2-1. データ

本研究では 2021 年 10 月に京都大学の学部生および院生、および少数のその他の大学の学生を対象に実施されたアンケート調査「セクハラ調査 A」「セクハラ調査 B」「セクハラ調査 C」のデータを用いており、サンプルサイズは 314 であった。

質問項目は、性別、学年、大学といった基本属性の他、以下（1）～（6）の項目の要素を組み合わせた内容の質問文であった。

- （1）加害者の性別（男性/女性/その他）
- （2）加害者との親しさ（親しい/あまり親しくない）
- （3）セクハラ行為の内容（被害者が夕食の誘いを断ったら無視する/容姿を貶す/異性の好みを聞く）
- （4）セクハラを受けた状況（対面/LINE でのやりとり）
- （5）加害者との関係性（教授/先輩/同級生）
- （6）加害者の性的指向（ストレート/同性愛者）

具体的には「親しいゼミの先輩（女で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた」といったものであり、各質問に対して「とても不快である」「不快である」「どちらかといえば不快」「どちらかといえば不快ではない」「不快ではない」「まったく不快ではない」の 6 段階で回答してもらった。

2-2. データの処理

データ分析をするために、次の3つの作業を行なった。

(1) 不快度の数値化

各質問に対する選択肢において、「とても不快である」を5、「まったく不快ではない」を0として不快度を6段階で数値化した（表1）。

表1 不快度の数値化

とても不快である	5
不快である	4
どちらかといえば不快	3
どちらかといえば不快ではない	2
不快ではない	1
まったく不快ではない	0

(2) 変数の設定

回答者の基本的な属性を示す5つの変数と、セクハラに関する項目についての変数をそれぞれ以下の表2のように設定した。

表2 変数名とその意味と要素

変数名	変数の意味	変数の要素
questionnaire	回答者が回答した質問票	A/B/C
id	回答者の個人 id	(略)
sex	回答者の性別	男/女/その他
gunmen	回答者の学年	(略)
university	回答者の所属する大学	(略)
sex. offender	加害者の性別	男/女
closeness	加害者との親密度	親しい/あまり親しくない
damage	セクハラの内容	無視/容姿/異性（注1）
location	セクハラが行われる形態	廊下/LINE（注2）
relationship	加害者との関係	教授/先輩/同級生
sexuality	加害者の性的指向	ストレート/同性愛

（注1）それぞれ「夕食に誘われたが断ると無視されるようになった」、「容姿を貶された」、「異性の好みについて聞かれた」を表す。

(注2)それぞれ「廊下で立ち話をしているときに(対面)」、「LINEで(テキスト媒体)」行われたことを表す。

(3) ロングフォーマットへの変換

3つの調査票A、B、Cを結合し、平均値の比較を容易にするためにデータの形式をワイドフォーマットからロングフォーマットへと変換した。

2-3. 分析の手順

本研究では加害者との権力関係とセクハラ行為を行う手段に着目するため、独立変数を「加害者との関係」、「セクハラが行われる形態」「セクハラの内容」とし、従属変数を「不快感」とした。従属変数に「セクハラの内容」を加えたのはセクハラの種類によっては、権力関係や行為の形態の要素と合わさることで予想と異なる結果となる可能性もあると考えたからである。それぞれの場合において不快感がどのような値を取るのかを、平均値の比較によって調べた。また、回帰分析を行い、交互作用効果の有意性を調べた。

3. 結果

3-1. 不快感の平均値の差

「加害者との関係」、「セクハラが行われる形態」「セクハラの内容」ごとの不快感の平均値をそれぞれ次の図1、図2、図3に示した。図1、図2、図3における青いエラーバーは95%信頼区間を示している。また、nはそれぞれの要素を含む質問項目の数を示している。

図1をみると、教授、先輩、同級生の順で平均不快感が高く、有意な差があると言える。平均不快感はそれぞれ約3.70、約3.28、約3.11となっており、特に加害者が教授のときには突出して不快感が高くなっている。

図2によれば、LINE上で行われたセクハラ行為の平均不快感は約3.43、廊下で立ち話をしているときに行われた行為の平均不快感は約3.30であった。95%信頼区間は少し重なる程度であり、有意な差があると言える。

図3をみると、「異性の好みを聞かれる」の平均不快感は約2.16と低く、他の二つに関しては「容姿を貶される」「無視される」の順に不快感が高くなっていた。

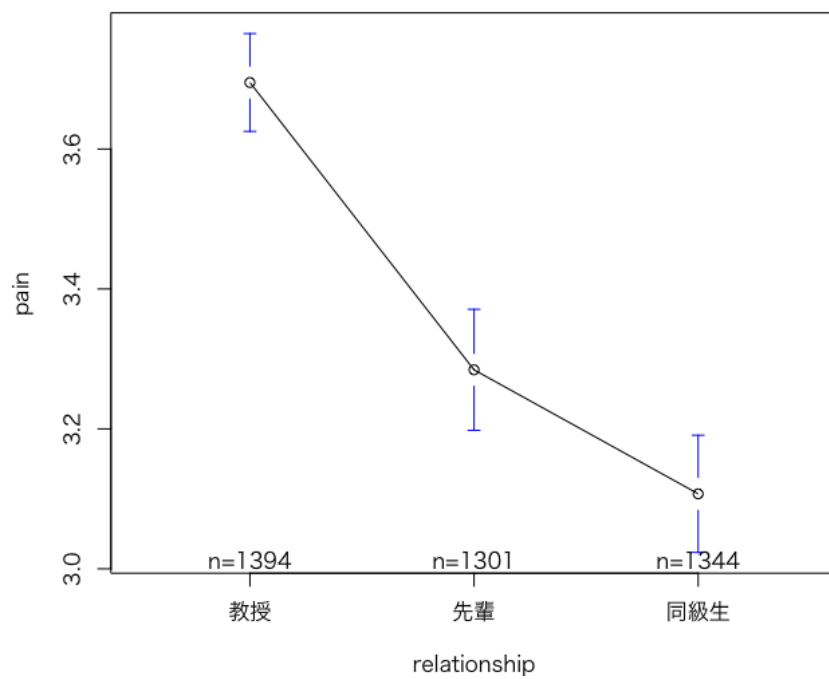


図1 不快度の平均値（加害者との関係別）

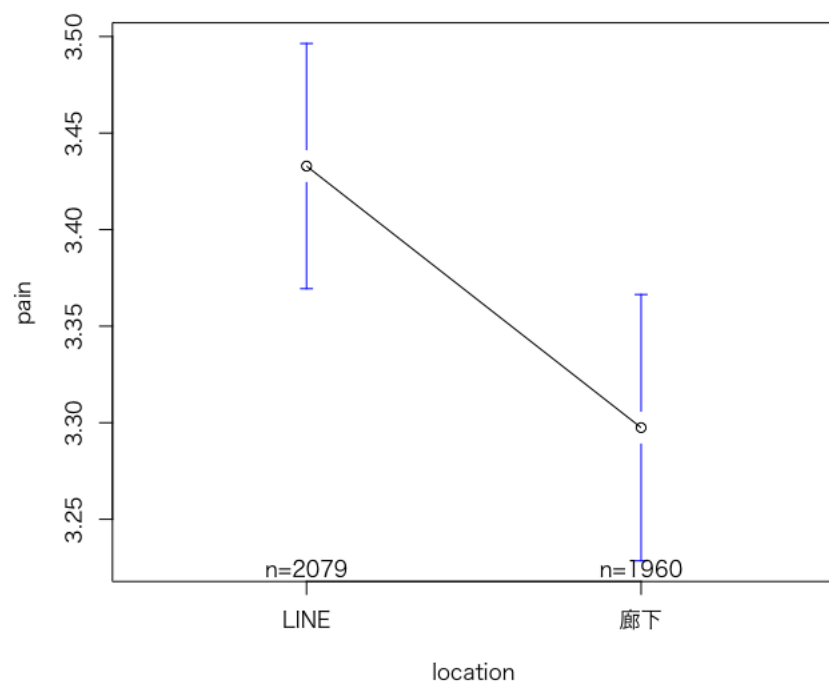


図2 不快度の平均値（セクハラ行為の形態別）

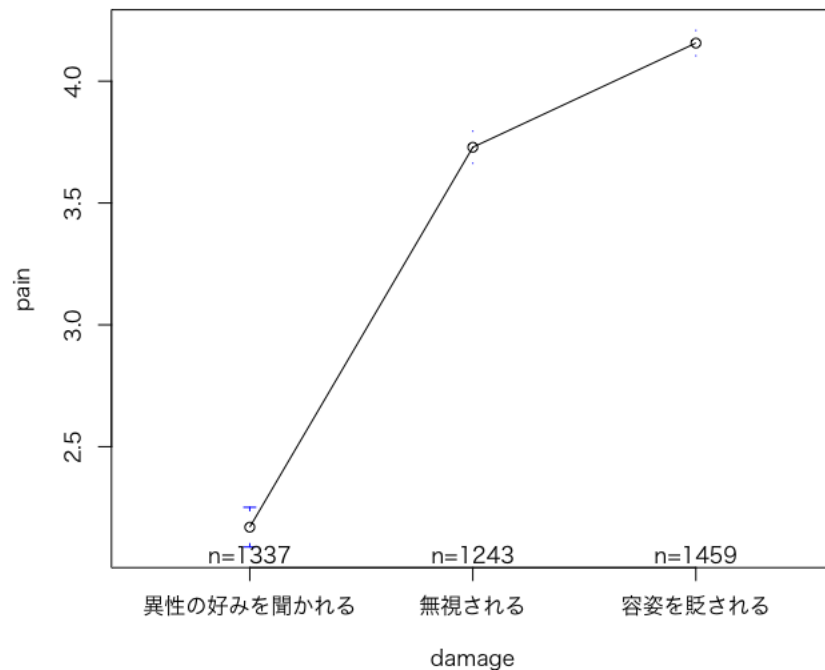


図3 不快感の平均値（セクハラの内容別）

3-2. 不快感の回帰分析

不快感に関する回帰分析を行ない、「セクハラの内容」と「加害者との関係性」との間の主効果・交互作用効果のモデルを示したものが表3であり、「セクハラの内容」と「セクハラが行われる形態」との間の主効果・交互作用効果のモデルを示したのが表4となっている。それぞれ主効果が Model 1、交互作用効果が Model 2 に示されている。

表3に関して、交互作用効果は有意となり、調整済み決定係数もわずかに大きくなった。「容姿を貶される」の場合は、0.07 加害者が先輩の方が同級生の場合よりも不快感が高かったが、「無視される」「異性の好みを聞く」場合は同級生の方が先輩の場合よりもそれぞれ 0.07、0.1 不快感が高かった。

表4に関して、交互作用効果は有意となり、調整済み決定係数は変わらなかった。交互作用効果を解釈してみると、セクハラ行為が「無視される」、「容姿を貶される」であった場合 LINE と廊下の不快感の差は 0.1 以下であったのに対し、「異性の好みを聞く」であった場合は LINE の方が廊下よりも不快感が 0.42 大きく、比較的差が開いた。

表 3 不快感に関する回帰分析 1

	Model 1	Model 2
(Intercept)	2.46 *** (0.04)	2.77 *** (0.06)
damage 無視される	1.55 *** (0.05)	1.22 *** (0.08)
damage 容姿を貶される	1.97 *** (0.05)	1.42 *** (0.08)
relationship 先輩	-0.43 *** (0.05)	-0.94 *** (0.09)
relationship 同級生	-0.42 *** (0.05)	-0.84 *** (0.08)
damage 無視される:relationship 先輩		0.50 *** (0.12)
damage 容姿を貶される:relationship 先輩		0.92 *** (0.11)
damage 無視される:relationship 同級生		0.47 *** (0.12)
damage 容姿を貶される:relationship 同級生		0.75 *** (0.11)
R ²	0.34	0.35
Adj. R ²	0.34	0.35
Num. obs.	4039	4039

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

表 4 不快感に関する回帰分析 2

	Model 1	Model 2
(Intercept)	2.26 *** (0.04)	2.36 *** (0.05)
location 廊下	-0.19 *** (0.04)	-0.42 *** (0.07)
damage 無視される	1.56 *** (0.05)	1.40 *** (0.07)
damage 容姿を貶される	1.99 *** (0.05)	1.84 *** (0.07)
location 廊下: damage 無視される		0.35 *** (0.10)
location 廊下: damage 容姿を貶される		0.33 *** (0.09)
R ²	0.33	0.33
Adj. R ²	0.33	0.33
Num. obs.	4039	4039

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

4. 議論

4-1. 全体のまとめ・考察

本研究では、権力関係を背景にしているというセクシャル・ハラスメントの本質的な特徴と、同じ行為でも伝える媒体によって受け手の感じ方が違うという想定から、3つの仮説「①加害者の社会的地位が、被害者よりも高くなるほど不快感が強い」、「②テキストを媒体としたセクハラ行為の方が、対面よりも不快感が強い」、「③セクハラ行為を行う形態よりも、立場の違いの方が不快感に与える影響が大きい」を立てた。そして学生を対象にしたアンケート調査のデータを用いて、様々な行為に対する不快感の平均値の比較、回帰分析をすることによって仮説を検証した。

「加害者との関係」ごとの不快感の平均値を比較した結果、教授、先輩、同級生の順で不快感が高くなっていたことから仮説1は支持された。教授の場合が突出して不快感が高かったのは、大学という組織内において教授は学生に対して大きな権力を有しているため、同級生と先輩の間における力関係による差よりも大きな違いが現れたのだと考

えられる。また、「セクハラが行われる形態」ごとの不快度の平均値を比較した結果、LINE でのやりとりの方が廊下（対面）でのやりとりよりも不快度が高かったため仮説 2 は支持されたと言える。これは、LINE では非言語コミュニケーションが制限されるということと、LINE が比較的親しい間で用いるコミュニケーションツールであり教授から LINE で連絡が来るということに対して回答者が違和感を感じたという理由も考えられる。加害者が教授の場合と同級生の場合との不快度の平均値の差は 0.59、教授と先輩との差は 0.42 であったのに対し、LINE と廊下との不快度の平均値の差は 0.13 にすぎなかったことから、「加害者との関係」の方が「セクハラが行われる形態」よりも不快度に及ぼす影響が大きいと言える。よって仮説 3 は支持された。この結果は、セクシャル・ハラスメントが本質的に権力関係を背景にしているということから想像に難くないものであったが、セクハラ行為の手段としてより多くの条件を想定してみるとまた異なる結果が得られるかもしれない。

回帰分析の結果からは、行為の内容によっては先輩と同級生の不快度の大きさが逆転することもあることがわかった。ただいずれも差は小さかったため、今回の調査においては加害者が先輩の場合と同級生の場合とではあまり不快度に大きな違いはなかったとも言える。また「異性の好みを聞く」という行為に関して、他の行為と比較して LINE と廊下とでの差が大きく出たのは、他の二つがテキスト媒体であろうと対面であろうと不快感を強く抱くような内容であったため、あまり不快感の強くない「異性の好みを聞く」において伝達手段による差が出やすかったからだと考えられる。

4-2. 本研究の意義と課題

セクシャル・ハラスメントはその時々での社会のトレンドによってその意味が変化しており、古い枠組みによる影響の小さい若者の観点からセクシャル・ハラスメントを再考している点に本研究の意義がある。興味深かった点としては、セクハラ行為の内容によっては加害者が「先輩」「後輩」であろうと不快度にさほど差が見られなかった点であり、今後の研究においてより多くのセクハラ行為の種類を検討してみることでさらなる知見が得られる可能性がある。また、セクハラ行為を行う形態に関して本研究では「廊下で立ち話しているときに」、「LINE で」という二つを想定していたが、二人きりなのか、周囲に人が多くいる状況なのかによっても不快度が変わってくることが考えられる。そのため、人数や場所といったより詳しい情報を加えた条件を設定することも今

後の研究において求められると考える。

文献

佐々木恵理, 2018, 「セクハラをめぐる言説を再考する: ことばの歪みの源泉をたどる」
『ことば』 39:17-35.

辻秀典, 2009, 「アメリカ合衆国教育省公民権局(学校におけるセクハラ・ガイダンス改訂版)」『安田女子大学紀要』 37:91-109.

権力関係と行為の相互作用が 不快感に及ぼす変化について

佐藤 葉月

1. 初めに

1. 1 背景

昨今では、#MeToo 運動が海外で盛んに行われるなど、ジェンダー平等の気運の高まりを受けてか、セクシャルハラスメント（以下、セクハラ）に対する人々の問題意識は高まってきているように思う。厚生労働省が自らのホームページで「セクハラに関してまとめたページ」を展開しており、職場のセクハラについて「「職場」において行われる「労働者」の意に反する「性的な言動」により、労働者が労働条件について不利益を受けたり、就業環境が害されること」と定義されている。しかし、「性的」とは一体どのような発言までを指すのか、こういった定義は曖昧であり、グレーゾーンが広い。そのため、当事者（被害者）の感じ方が重要とされるセクハラにおいて、一般にどのように感じられるのか、明らかにするために本調査をするに至った。

1. 2 本研究の問い

上記の「セクハラに関してまとめたページ」でも上司から部下に対するセクハラ为例が示されていたように、一般的にセクハラは権力関係がある中で起こると考えられている。そこで、どのような行為になると、被害者と加害者の権力的関係値が、被害者のセクハラ認定に影響してくるのかを調べていきたい。

1. 3 本研究の意義

職場や学校などセクハラが起りやすい場において、セクハラを未然に防ぐためのガイドラインや、セクハラが起こった時の相談室などが設置されるようになってきている。しかし、1. 1 でも述べたように厚生労働省が定めるセクハラの定義においても、その定義は曖昧で、いまだセクハラの見分け方は非常に困難であり、加害者を増やさないようにすることは困難、また被害者が自分が受けた行為をセクハラだと認識し

て相談機関を使うことへのハードルが高いのではないだろうか。そのため、本研究を行うことで人々のセクハラと認識される行動とされない行動の間の線引きをよりはっきりさせることの手助けになるのではと考える。

1. 4 仮説

加害者から被害者に対する権力関係の大きさは、平均不快度の低さに影響を及ぼすが、この関係はどのような行為に対しても保存されるわけではないと予想する。よって、以下の仮説を立てる。

「被害者に対する行為項目（以下、行為）によって、加害者が教授・先輩・友人である場合の平均不快度の順位は変化する」

2. 方法

Q4「回答中で答えにくかった点や感想があれば自由に書いてください」の質問項目については削除したデータを使用している。各設問に対して回答者には、不快度を「1 とても不快である」「2 不快である」「3 どちらかといえば不快」「4 どちらかといえば不快ではない」「5 不快ではない」「6 まったく不快ではない」の六段階で答えてもらったが、分析の際は順に5, 4, 3, 2, 1, 0と数値化して扱った。

3. 結果

計算結果を図や表にまとめ、そのポイントを解説
被害者の加害者との関係（以下、関係）と行為の平均不快度を表す図が以下である。

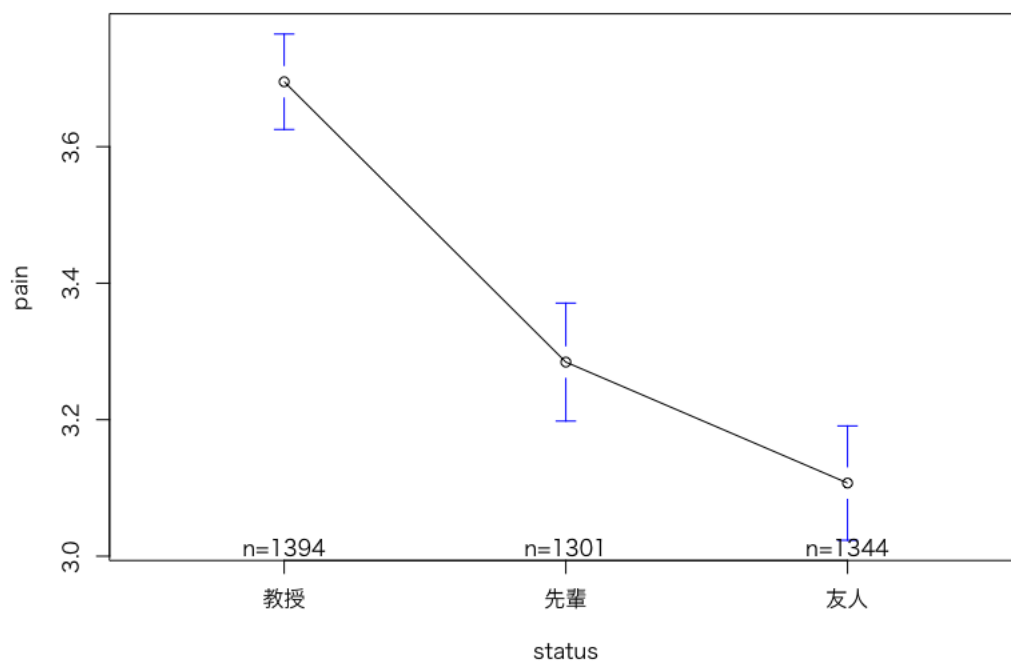


図1 加害者が教授、先輩、同級生の場合

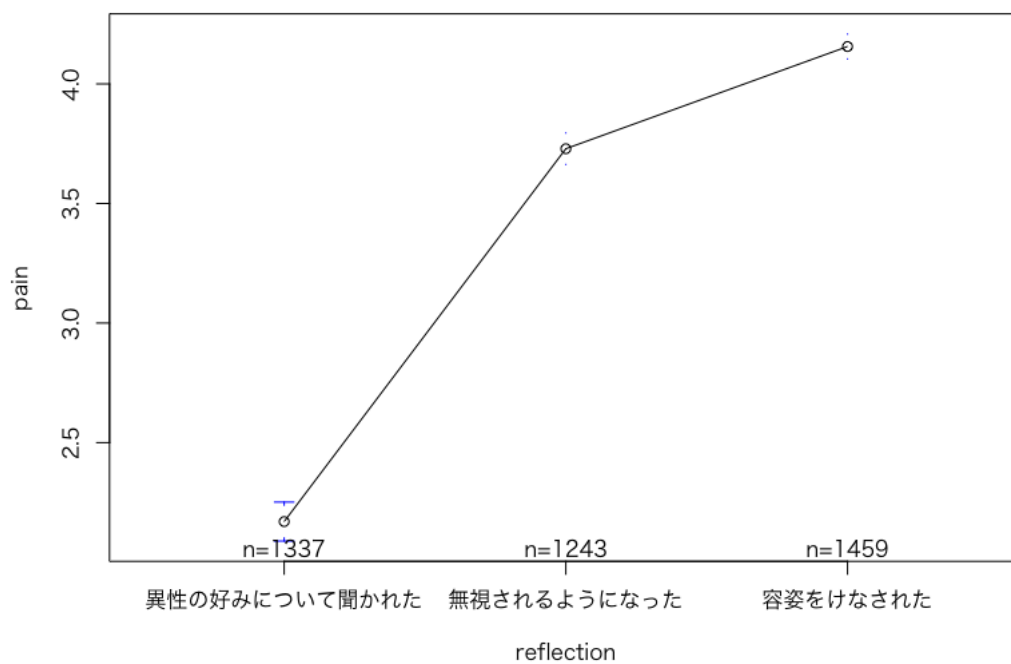


図2 無視された場合と容姿をけなされた場合と異性の好みを聞かれた場合

これらより、行為のみで見る平均不快感は、「容姿をけなされた」「夕食に誘われたが断ると無視されるようになった」「異性の好みについて聞かれた」という順で高い

方、関係のみでみる不快度の平均値は、教授・先輩・友人の順で高いことがわかる。

続いて、関係と行為の間に交互作用効果が働いていると仮定したモデルの係数の推定を行った。以下がその結果である。

表 1 関係と行為の交互作用効果の推定

Model 1	
(Intercept)	2.76 *** (0.06)
status 先輩	-0.94 *** (0.09)
status 友人	-0.82 *** (0.08)
reflection 無視されるようになった	1.24 *** (0.09)
reflection 容姿をけなされた	1.42 *** (0.08)
status 先輩:reflection 無視されるようになった	0.49 *** (0.13)
status 友人:reflection 無視されるようになった	0.44 *** (0.12)
status 先輩:reflection 容姿をけなされた	0.92 *** (0.12)
status 友人:reflection 容姿をけなされた	0.74 *** (0.12)
R ²	0.35
Adj. R ²	0.35
Num. obs.	3650
*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05	

表 1 より関係と行為の交互作用効果は有意になった。「無視されるようになった」 / 「異性の好みについて聞かれた」場合、教授・友達（教授との差=0.38/0.82）・先輩（友達との差=0.07/0.12）の順に不快度が高かった。「容姿をけなされた」場合、友人・教授（友人との差=0.52）・先輩（教授との差=0.02）の順に平均不快度が高かった。

4. 考察

京都大学に通う大学生と大学院生を対象に、さまざまな要因の関係に注目し、不快だと感じる程度の調査を行った。今回は、関係と行為の間の交互作用効果に着目して分析を行った。

まず、仮説がどの程度指示されたのかについて考えていきたい。一般的には、権力関係の強さから、相手との関係のみでみた平均不快度のように教授・先輩・友人の順にセクハラは起こりやすいと考えられている。しかし、「夕食の誘いを断ると無視」と「異性の好みを聞かれる」という行為に関しては、先輩と友人の順位が逆転し、「容姿をけなされた」場合においては最も平均不快度が高いのは友人と、一般的な考えとは異なり、権力関係が強く結ばれているかどうか、セクハラが起こりやすさに単純に結びつくのではなく、被害者が加害者から受けた行為も関係するということが明らかになった。つまり、仮説は支持されたといえよう。しかし、「異性の好みを聞かれる」ことに関しては、最も平均不快度が高い教授でも、その数値は 2.76 と、他の 2 つの選択肢の数値と比べ以上に低く、「どちらかといえば不快」を下回る結果であったことは興味深い。一方で、この行為項目は、最も下位の順位と差が開いたものでもある。このことから、教授といったような強い権力を持つような立場のものは、「異性の好みを聞く」といった軽い話題のものでも、恋愛に関する話題を持ち出すことは、立場が下のものに対して不快度を与えやすいと改めて自覚した方が良いのではないだろうか。また、「容姿をけなされる」ということに関して、友人が最も大きな不快度を与えるとすることも意外な結果であったといえよう。これは、被害者との関係の親密さが関係していると思われ、加害者との「親しさ」の度合いについても平均不快度の変化に影響するのかどうか調べる必要があるだろう。しかし、今回の調査は、不明瞭なセクハラ境界線をより明確にしていくということの一助にはなったのではないだろうか。

レポートの内容を要約し、最初にたてた仮説がどの程度支持されたのか、意外な結果や面白い結果などがあれば、それらについてふれ、そのような分析結果が得られた背景や理由について考察する。最後に今後の課題やこの研究の意義をもう一度繰り返して終わり。

<参考文献>

厚生労働省, 2021, 『セクハラに関してまとめたページ』, (2022 年 1 月 16 日取得,

<https://kokoro.mhlw.go.jp/sexual-harassment/>)

馮雪，2021，「職場でのセクハラの判断基準及び使用者責任について：中・日・米の裁判例と比較して」『北大法政ジャーナル』28：117-153.

加害者の地位が被害者の不快感に与える影響

施 君菲

1. 導入

近年、いわゆる #me-too 運動に代表されるように、性犯罪やセクシャル・ハラスメントの問題が社会的に注目されている。

従来、セクハラ問題について、被害者の職業（小俣、2013）や被害者非難（柴田ら、2019）など被害者を中心に研究してきた。また、セクハラ防止（牟田、2015）についての研究も蓄積されてきた。しかし、被害者の主観的意識を中心に、加害者の特徴と被害者の主観的な意識との相互作用を中心とする研究は管見の限り、あまり見られない。

柴田ら（2019）によればセクハラは、セクハラ事例の多くが地位の高い加害者と相対的に地位の低い被害者の間に起こるものである。しかし、セクハラ及びセクハラの程度を定義したとき、また、社会に対して告発するかどうかと決断する時は、被害者の主観的な意識によって大きく左右されている。ネットにおけるフェミニズム運動家らも「女性が不快だと感じたら、それはセクハラである」というスローガンまで唱えたように、被害者の主観的な意識がセクハラを定義する時はとても大事である。そのため、「セクハラは、セクハラ事例の多くが地位の高い加害者と相対的に地位の低い被害者の間に起こるものである。」と安易に結論を下することより、なぜこのようなパターンのセクハラが多いかという認識を持つようになったのかと問うことがより大切である。即ち、被害者の主観的意識を中心に、加害者の特徴と被害者の主観的な意識との相互作用を研究することは重要な課題だと言える。

そこで本研究は、構築主義の視点をセクハラ研究に取り入れ、加害者の地位と被害者の主観的な不快感との間にどのような関係があるかを探索的に検討する。

2. 方法

2-1. データ

本研究が用いるデータは京都大学の学部生と大学院生を対象に実施したヴィネット調査「セクハラ調査」である。本研究の説明変数は「questionnaire」、「id」、「sex」、「gakunen」、

「university」という五つの変数ある。「questionnaire」という説明変数をさらに分解すると、「closeness」、「status」、「sex.offender」、「sexuality」、「place」、「type」という6つの質問項目がある。従属変数は被害者の不快感で、不快感を「pain」と表示される。

2-2. データの処理

まずは、説明変数の処理方法について説明する。それぞれの意味と処理方法は表1の通りである。

表1 説明変数の意味と処理方法

説明変数	意味	処理方法
questionnaire	質問項目	A/B/Cに分ける
id	回答者の個人id	
sex	回答者の性別	男/女
gakunen	回答者の学年	
university	回答者の大学	

そしては、「questionnaire」という変数を具体的に説明する。「questionnaire」に含まれる変数と変数の意味は表2の通りである。

表2 「questionnaire」の内容

内包変数	変数の意味	変数の尺度
closeness	加害者との親密度	親しい/親しくない
status	加害者の地位	友人/先輩/教授
sex.offender	加害者の性別	男/女
sexuality	加害者の性指向	ストレート/同性愛
place	セクハラされる場所	廊下/LINE
type	セクハラの種類	容姿を貶す/無視される/異性の好みを問われる

最後は従属変数の処理方法を説明する。従属変数の尺度と処理方法は表3の通りである。

表 3 従属変数の尺度と処理方法（数値化）

従属変数の尺度	処理方法（数値化）
とても不快である	5
不快である	4
どちらかといえば不快	3
どちらかといえば不快でない	2
不快ではない	1
まったく不快でない	0

従属変数を数値化された後の分布図は表 4 のとおりである。

表 4 従属変数を数値化された後の分布図

Value	Pain					
	0	1	2	3	4	5
1 とても不快である	0	0	0	0	0	1152
2 不快である	0	0	0	0	1087	0
3 どちらかといえば不快	0	0	0	764	0	0
4 どちらかといえば不快でない	0	0	408	0	0	0
5 不快でない	0	384	0	0	0	0
6 まったく不快でない	244	0	0	0	0	0

2-3. 仮説

本研究は、加害者の地位と被害者の不快感との間にどのような関係があるかを探索的に検討するため、仮説は以下である。仮説を提起する理論枠組みとしては、構築主義である。Joel Best（Best[2008] 2017）によれば、報道機関であるマスメディアは「専門家」や「当事者」などと並び、社会問題化の早い段階での重要なアクターである。セクハラという社会問題について、どのような加害者が報道されたら、社会において炎上しやすいのか。答えとしては政治家、教授など社会的地位の高く、さらに社会的期待の高い職業である。マスメディアに報道されたからこそ、世間に相応のイメージが形成されるようになった。そのため、教授など社会的地位の相対的に高い階層はスティグマされやすい可能性も考えられる。上記の原因で、本研究は以下のような仮説を立て検討する。

仮説 1：教授と調査対象（京大学生）との間に、社会的地位の格差が一番大きいため、教授が加害者の場合、被害者の不快感が一番高い。

仮説 2：教授と調査対象（京大学生）との間に、社会的地位の格差が一番小さいため、友人が加害者の場合、被害者の不快感が一番低い。

仮説 3：調査対象（京大学生）との間に、先輩より友人の方が、調査対象と社会的地位の格差が相対的に小さいため、友人より先輩が加害者の場合、被害者の不快感がより高い。

3. 結果

3-1：平均値の比較結果

加害者の地位による被害者の不快感についての平均値の比較は図 2 のとおりである。図 1 によれば、教授が加害者の場合、被害者の不快感が一番高いということがわかった。また、友人が加害者の場合、被害者の不快感が一番低いという結果も示された。

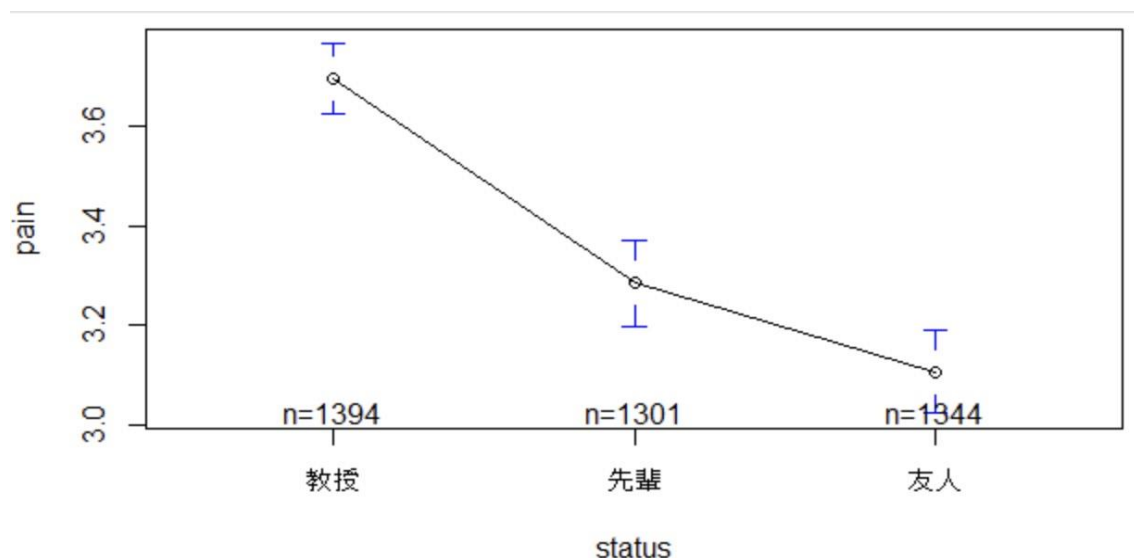


図 1 平均値の比較結果

3-2：単回帰分析の結果

上記の平均比較の結果が本当に有意かどうかはさらに単回帰分析によって検証する。

単回帰分析の結果は表5のとおりである。

表5 単回帰分析の結果

Model 1	
(Intercept)	3.692*** (0.042)
Status 先輩	-0.398*** (0.061)
Status 友人	-0.584*** (0.060)
R ²	0.026
Adj. R ²	0.026
Num. obs.	3650

モデル1は教授を基準にしたモデルである。また、結果は全て0.1%水準で有意であるため、統計的に有意だと言える。

単回帰分析の結果によれば、教授という社会的地位が被害者の主観的不快感と正の相関があるという結果がわかる。その一方、先輩と友人という社会的地位が被害者の主観的不快感と負の相関があるという結果も出された。さらに先輩と友人を比較すると、先輩が加害者である場合は、不快感が3.294あがるのに対して友人が加害者である場合は、不快感が3.081あがる。そのため、先輩より友人が加害者の場合、不快感が相対的に低いということも言えるだろう。

4. 考察

本研究は、京都大学の学部生と大学院生を対象に実施したヴィネット調査「セクハラ調査」データ及び単回帰分析という手法を用いて、加害者の地位と被害者の主観的な不快感との間にどのような関係があるかを探索的に検討してみた。調査結果としては、全ての仮説が検証できた。教授という社会的地位が被害者の主観的不快感と正の相関があるという結果がわかる。その一方、先輩と友人という社会的地位が被害者の主観的不快感と負の相関がある。また、先輩より友人が加害者の場合、不快感が相対的に低いということも明らかにした。

上記の調査結果に基づいて、教授や先輩など社会的地位が相対的に高い人が加害者である場合、被害者の不快感が高くなるため、告発に至りやすいというメカニズムが考え

られる。しかし、なぜ教授や先輩など社会的地位が相対的に高い人が加害者である場合、被害者の不快感が高くなるか。また、教授や先輩など社会的地位が相対的に高い人が加害者である場合、被害者の不快感が高くなるという事実とマスメディアとの間にどのような関係があるかはデータ制限のため、本研究は検討できなかった。それは今後の課題として、社会問題の構築という視点から考察すべきである。

参考文献

赤川学，2012，『社会問題の社会学』弘文堂.

牟田和恵，2015，「スポーツ界のセクハラ防止と組織の責任—防止ガイドラインの作成と履行」『社会学評論』13：181-182.

柴田侑秀・中谷内一也，2019，「セクハラ加害者の地位が被害者非難に与える影響」『日本心理学会大会発表論文集』83：426.

小俣謙二，2013，「性犯罪被害者に対する第三者の非難と心理的被害の過小評価に影響を及ぼす要因：被害者の社会的尊敬度と暴力的性に対する女性の願望に関する誤解」『社会学評論』29(1)：1-10.

セクハラはどうやって見出されるか

－立場がセクハラの認知に与える影響考察－

田野はるか

1. Introduction：問題の所在

セクハラ問題が人々に認識されるようになったのは、そう昔のことではない。牟田和恵（2004）によると、きっかけとなったのは1989年の福岡裁判である。これは初めてセクハラを争点とした裁判であり、同じ年には「セクハラ」という言葉が流行語大賞を受賞するまでの反響であった。93年には当時の労働省がセクシャル・ハラスメント防止のためのガイドラインを示し、1999年には法制度上の規制対象になった（牟田，2004：29-31）。牟田が述べるように、セクハラという問題は、その問題意識が持ち上がってから法律による規制の対象となるまで、非常に迅速であった。しかし、その迅速さが故に、セクハラの定義が曖昧なまま制度化が進んでしまっているという問題が生じている（牟田，2004：29-31）。

誰しもが「これはセクハラである」と主張することができるような言動、「こういうことがセクハラである」と言える、分かる人の数が少ないからこそ、制度化され取り締まりの対象となった後も、セクハラが減ることがないのではないだろうか。本レポートでは、このような考えに基づき、「どういった行為がセクハラと捉えられやすいのか」「個人差はどういったところに生じるのか」を質問紙調査から分析し、セクハラ理解の一助としたい。

2. Method

2.1 課題設定

厚生労働省は、セクハラの内容を次の二つのタイプに分けている。1つ目は、「職務上の地位を利用して性的な関係を強要し、それを拒否した人に対し減給、降格などの不利益を負わせる行為」である対価型セクシュアル・ハラスメント（法務省，2010：4）。2つ目は、「性的な関係は要求しないものの、職場内での性的な言動に

より働く人たちを不快にさせ、職場環境を損なう行為」である環境型セクシュアル・ハラスメント（法務省，2010：4）。質問紙調査では、1.「こういったタイプのセクハラであるか（対価型か環境型か）」というセクハラの内容に関する項目の他に、2.「こういった関係性の相手からセクハラを受けたか」、3.「こういった状況でセクハラを受けたか（対面かそうでないか）」、4.「こういった立場の相手からセクハラを受けたか」、5.「加害者の性別はどうであるか」、6.「加害者の性的指向はどうであるか」といった項目、計6つの項目を質問に入れ込み、それぞれの項目が回答者に与える不快感にこういった違いをもたらすのかを検証しようとした。

6つの項目の内容を具体的に述べると、

1：セクハラの内容が「夕食に誘われたので断ったところ、無視されるようになった」（対価型）か「異性の好みについて聞かれた」（環境型、中身に言及するもの）か「容姿をけなされた」か（環境型、外見に言及するもの）。

2：加害者が「親しい相手」か「あまり親しくない相手」か。

3：セクハラを受けた場所、状況が「廊下で立ち話をしている時に（対面）」か「LINEで（対面でない）」か。

4：加害者が「教授（圧倒的に立場が上）」か「先輩（少し立場が上）」か「ゼミの友人（同じ立場）」か。

5：加害者が「男性」か「女性」か。

6：加害者が「ストレート」か「同性愛者」か。

セクハラの内容以外の項目は、調査者である京都大学水曜4限の社会学実習受講者（筆者も含む）らが相談し、セクハラへの認識に違いを与えようとした項目である。

筆者は4番目の項目に着目し、「加害者の立場が高いほど、つまり教授、先輩、ゼミの友人の順に不快感をおぼえやすい」という仮説を立てた。厚生労働省のセクハラの実態調査にもある通り、セクハラは「職務上の地位を利用して」行われることが多い。

BIGLOBEがスマートフォンを使用する20~50代の男女800人に対して行った調査によると、セクハラをしてきた相手として圧倒的に多いのが「上司・先輩」、その次に多いのが「取引先、お客様」であった。これは、見方を変えると、立場を利用して行われるセクハラの方がそれと認識されやすい、不快感をおぼえやすいということなのではないだろうか。それが、筆者が仮説をこのように設定した理由である。

2.2 調査方法

2.1で述べた6つの項目を組み合わせでできた39の質問を3つ（調査A 13問、調査B 13問、調査C 13問）に分け、調査者が各々、対象となる大学生に配布した。回答者は314人で女性の割合が多かった。各質問に対して「1 とても不快である」「2 不快である」「3 どちらかといえば不快」「4 どちらかといえば不快ではない」「5 不快ではない」「6 まったく不快ではない」の6段階で評価してもらい、番号を分析に用いた。小さい数字を選ぶほど、不快度が大きい。質問文に含まれる加害者の立場が「教授」「先輩」「友人」のどれであるかで、不快度がどうなるか、まずその平均値を3者で比較した。

3. Results

上記の結果を示したものが、図1である。

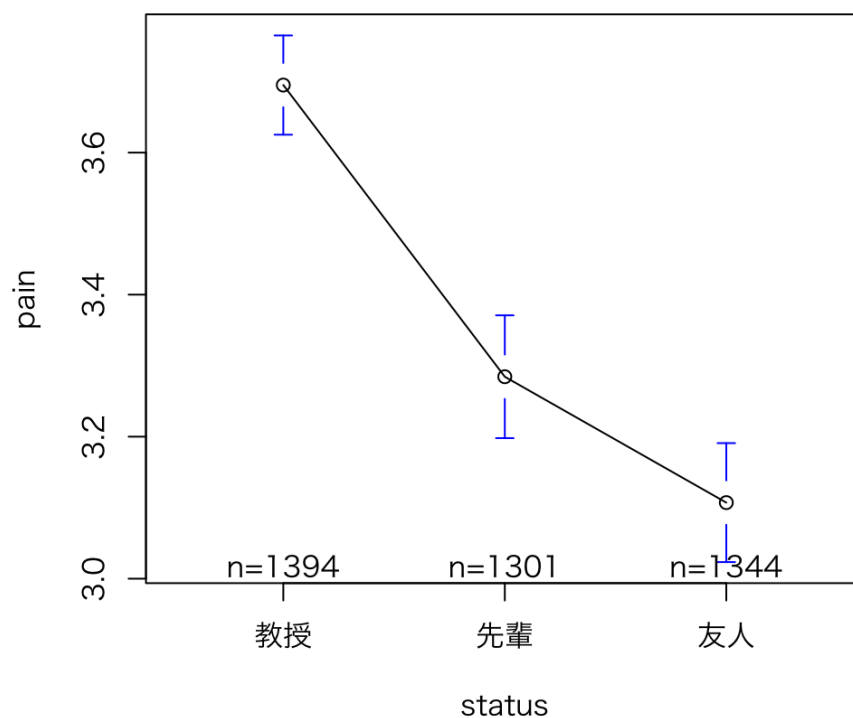


図1 加害者の立場による「不快度」平均値比較
(丸い点は平均値、青いひげは平均値の95%信頼区間である。)

以上から、加害者が「教授」「先輩」「友人」、どの立場であるかに応じて、回答

者がおぼえる不快感に有意な差があることがわかった（信頼区間が重なっていない）。ただ、回答者の感想の中に「先輩後輩の関係が希薄であるため、答えづらい、イメージしづらいところがある」というものがあり、イメージしづらいことは、不快感にそのまま反映されるのではないかと感じた。

次に、こういったタイプのセクハラか（「夕食に誘われたので断ったところ、無視されるようになった」（対価型）、「異性の好みについて聞かれた」（環境型、中身に言及するもの）、「容姿をけなされた」（環境型、外見に言及するもの））、セクハラの内容と加害者の立場との間にどのような相関関係があるのか、その交互作用効果を検定した。以下は結果である（図2）

Model 1	
(Intercept)	2.58 *** (0.18)
closeness親しくない	0.21 *** (0.04)
sex女	0.09 (0.17)
sex男	-0.15 (0.17)
type.harassment無視	1.24 *** (0.08)
type.harassment容姿	1.43 *** (0.08)
status先輩	-0.92 *** (0.09)
status友人	-0.83 *** (0.08)
sex.offender男	0.18 *** (0.04)

type.harassment無視:status先輩	0.43 ***
	(0.12)
type.harassment容姿:status先輩	0.93 ***
	(0.11)
type.harassment無視:status友人	0.45 ***
	(0.12)
type.harassment容姿:status友人	0.72 ***
	(0.11)

R ²	0.37
Adj. R ²	0.36
Num. obs.	4039

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

図2 セクハラタイプと加害者の立場の間の交互作用効果検定

(セクハラ内容が「異性の好みについて聞かれた」、加害者の立場が「教授」のときを基準として、他の要因の不快感が何ポイント高いかを比べた)

すると、セクハラのタイプと加害者の立場との間に交互作用効果が見られることが分かった。「夕食を断ったところ無視されるようになった」というセクハラタイプ、つまり対価型セクシュアル・ハラスメントでは、加害者が先輩よりも友人の方がやや不快感が高いにもかかわらず、「容姿をけなされた」というセクハラタイプ、つまり外見に言及するような環境型セクシュアル・ハラスメントでは、加害者が先輩の方が友人より不快感が高かった。また、全体として正の値をとったため、「異性の好みについて聞かれた」(環境型、中身に言及するもの)は、セクハラ加害者の立場がどうであるにかかわらず、回答者が不快感を覚えにくいことがわかった。

4. Discussion

本レポートの仮定である「加害者の立場が高いほど、つまり教授、先輩、ゼミの友人の順に不快感をおぼえやすい」は確かに正しいことが結果から示された。ただ、加

被害者の立場と対価型セクシュアル・ハラスメント/（外見に言及するような）環境型セクシュアル・ハラスメントとの間に交互作用効果が見られたのは新たな発見であった。それは、今回設定したセクハラの内容によるものと考えられる。先輩から「無視される」ことは、先ほど触れた「先輩と後輩との関係性が希薄」な場合、あまり支障がないと思われる。親しき仲にも礼儀ありとはよく言われるが、「容姿をけなされる」という礼儀を欠いた否定的評価は、親しい間柄の方が許容できるのではないか、ということが示唆される。だからこそ、あまり親しくない先輩や教授から容姿をけなされることは、不快に思ってしまう度合いが高い。テストの過去問を先輩から手に入れて試験を頑張る人の多い学部や学部専門のサークルに入っている人が多い学部など、先輩と後輩の関係性が濃いと思われる理系、特に医学部の学生に多く質問紙調査を実施した場合、結果も変わってくるのではないかとということが予想された。

今回行った質問紙調査では、「問題文の状況が想定しにくい」といった回答が多く見られた。例えば「親しくない」関係であるのに、「異性の好みを聞かれる」という状況に直面することがそもそもあり得ないと思われると、どう回答したら良いのか回答者を困らせることになってしまう。また、「容姿をけなされる」にしても、どういった状況でそれが行われたのかを想定するのは個人差が存在するし、不快感をおぼえる度合いが個人によって違ってくるのは当然のことだと思われる。状況のイメージのしにくさはデータにブレを与えてしまう要因であるため、今後の調査においては、より誰もが想定しやすいような問題文作り、問題文の改良をすることが望まれる。

参考文献

- 牟田和恵, 2004, 「「縮減」される意味と問題: セクシュアル・ハラスメントと法・制度」『フォーラム現代社会学』3: 29-41.
- 法務省, 2010, 『企業における人権研修シリーズ セクシュアル・ハラスメント』, (2022年1月11日取得<https://www.moj.go.jp/jinkennet/asahikawa/sekuhara.pdf>).

第 2 章

性別・性的指向とハラスメントによる不快感

加害者の性的対象である性別の回答者の 回答に与える影響について

古瀬 達也

1. はじめに

セクシュアル・ハラスメント（以下、セクハラと略）は平成9年の男女雇用機会均等法改正時に初めて法に規定され、その後平成18年の同法改正時には男性労働者に対するものも含め事業主は雇用管理上必要な措置を講ずることを義務付けられた。現在、事業主には職場におけるセクハラを防止するために厚生労働大臣の指針により10項目の実行すべきことが定められており、そのうちの一つに「相談（苦情を含む）に応じ、適切に対応するために必要な体制の整備」がある。それによれば企業はその規模・従業員数に関わらず、被害を相談できる窓口を設置することが求められており、そして現在多くの企業がそれを設置しつつある。

以上によると、現在は従業員がセクハラ被害を相談できる状況が整ってきていると言えることができる。そこで、私は次に我々が考えるべきは、被害者に相談をためらわせる要因を取り除くことであると考えます。せっかく設置した相談窓口も、被害者の利用があって初めて意味を持つからだ。

牟田和恵は女性がセクハラを受けたときに「セクハラだ。やめてほしい」と言えない理由について、講演会で以下のように説明している。

それから、自意識過剰と思われたくないというのもあると思うんですね。部長が書類を私に渡すときに、手をぐっと握った。「これって、手を握ってきてるわけ？」と思ってびっくりするけど、そこで「やめてください」なんて言ったら、「なんだよ。そんなことするわけないだろう」と。本当は手を握っているんだけど、そこではねのけたりしたら、「そんなことするわけないだろう」と返ってくるかもしれない。これは痴漢でよくあることなんですよ。痴漢に触られて、なかなか「やめてください」なんて言えないんだけど、勇気を出して言えたとしても、痴漢が一番よく

やる逆襲は「お前みたいなブス、触るわけないだろう！」と言うわけです。「自分が触られるなんて自意識過剰だ。このブス」と、そういうふうになのしるんですね。だから、「これって本当に触っているのか。性的誘いをかけられているのか。でも考え過ぎよね」。もしそれでノーと言って、「そんなことないよ」「あんたにそんな誘いかけるわけじゃない」「なんという自意識過剰なのか」と思われるのも嫌だから、だからノーと言わない。(牟田 2015: 98-99)

この葛藤を要約すると、被害者は「セクハラをする＝好意を向けている/誘っている/性的な目で見ています」であるということが社会的に前提とされていると考え、「セクハラを受けている」と告白することで「自分は性的にみられている/誘われている/好意をもたれている」と告白しているように、自意識過剰であるかのように思われてしまうことを懸念しているということである。牟田の言うこの葛藤があるのであれば、これは被害を相談する際にも女性の中で起こりうると考えられ、相談をためらう障壁となりうるものであり、対策の必要がある。

さて、牟田はセクハラの実例の質的研究などで著名な学者であり、彼女が「こういう理由もある」というように言う根拠は彼女の調査の経験からきているのだと思われる。しかし、これが実際に起こっているかどうかを示す証拠や論文、データは私の調べる限り見つからなかった。そこで私は、この葛藤についての情報を集めるため、まず上の前提が実際どの程度共有されているのかを本論文で確かめる。具体的には、「性的に誘われている（性的に見られている/好意をもたれている）可能性があるほうが、言動をセクハラと認定しやすいのではないか」という仮説をたて、それを「他者が何かの言動をしたとき、その人の性的あるいは恋愛の対象である性別が自分に当てはまる場合のほうが、当該言動をセクハラと感じやすいのではないか」という問いとして検証した。相手の性的対象となる性別に自分の性別が一致していることがセクハラ判定に有意な影響を及ぼすとわかれば、それを必要条件として持つ「行為が「性的に見る/誘う/好意を持つ」ものである」こともセクハラ判定に同じ影響を及ぼすであろうと考えられるからである。

2. 方法

「【男 or 女】で【同性愛者 or ストレート】のAがBをした」というかたちでAの言

動を表した質問文について、Aの言動が不快だと思うかどうかを6段階（とても不快である、不快である、どちらかといえば不快、どちらかといえば不快ではない、不快ではない、まったく不快ではない）で尋ね、不快度が強い順に、5点、4点、3点、2点、1点、0点と点数を付けた。

質問文をAの性的（恋愛の）対象が男か女かによって二つに分け（「女でストレート」「男で同性愛者」の場合は男、「男でストレート」「女で同性愛者」の場合は女）、Aの性的（恋愛の）対象が回答者の性別と一致している質問文における点数の平均値と、一致していない質問文における点数の平均値を比較した。またこの作業をするにあたって、回答者の性別が「その他」であるような回答は除いた。また以下においてAのことを加害者というように表記する。厳密に言うと今回の質問文においてAを加害者と呼ぶことは不適切だが、以下の文章のわかりやすさのため、これを使用する。

3. 結果

不快度と「加害者の性的対象と回答者の性別が一致しているか」に関連があるかどうかを調べるため、「加害者の性的対象と回答者の性別が一致しているか」べつに「不快度」の平均値を計算した。その結果をそれぞれエラーバーにして示したものが図1である。以下すべての図表においてエラーバーは95%信用区間を表している。

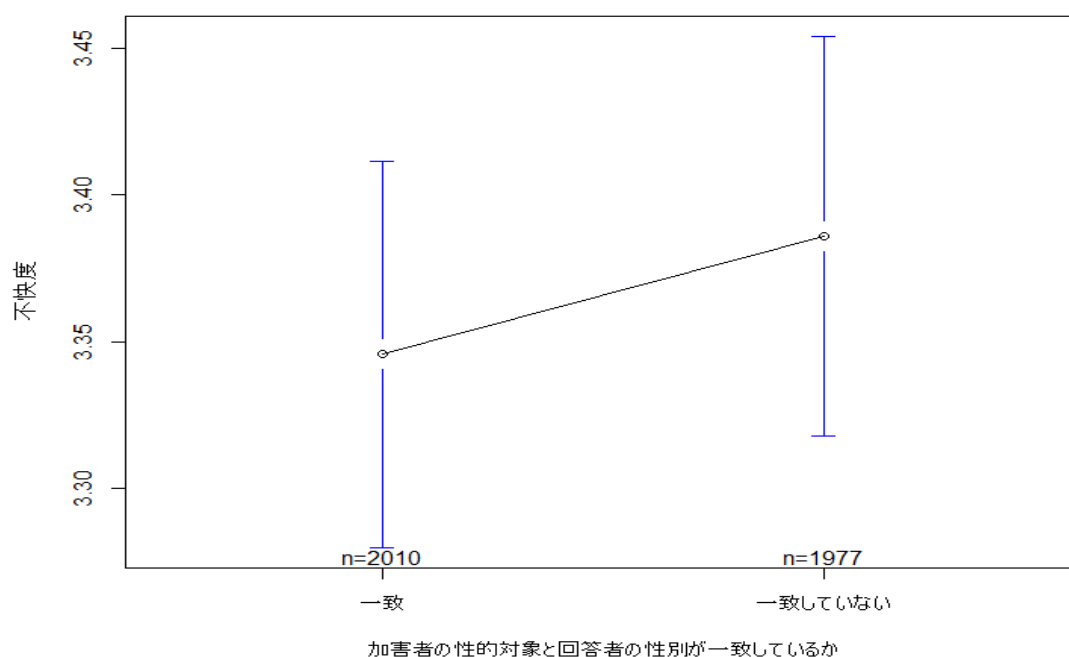


図1 加害者の性的対象と回答者の性別の一致・不一致別の不快度の平均値の比較

加害者の性的対象と回答者の性別が一致している場合の不快度の平均値は3.345771、一致していない場合の平均値は3.385938である。数値や図からもわかるように、平均値に有意な差はないと考える。t検定を行っても（平均値を求めるベクトルの長さが異なるという理由で平均値同士の間に対応がない場合のt検定を行った）、t値-0.83371、p値0.4045と、p値が5%以上のため、二つの平均値の間に有意な差は認められなかった。

そこで次に、回答者の性別が男であるか女であるかに分け、同様に不快度の平均値の比較を行った。それが以下の図2、図3である。

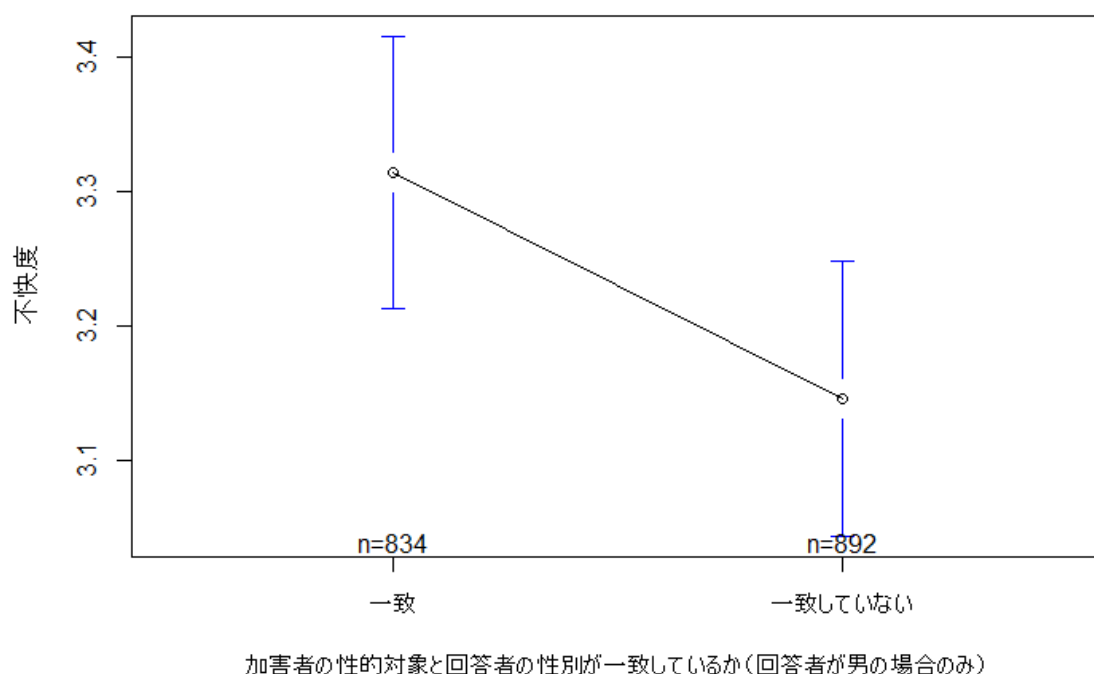


図2 加害者の性的対象と回答者の性別の一致・不一致別の不快度の平均値のプロット

回答者男であるものに限ると、加害者の性的対象と回答者の性別が一致している場合の不快度の平均値は3.314149、一致していない場合の平均値は3.145740である。数値や図2から平均値には「一致しているときの平均値>一致していない時の平均値」であるような明らかな差がみられた。また、t検定を行っても、t値2.3027、p値0.02142と、p値が5%未満であり、平均値の間には有意な差があると考えられる。

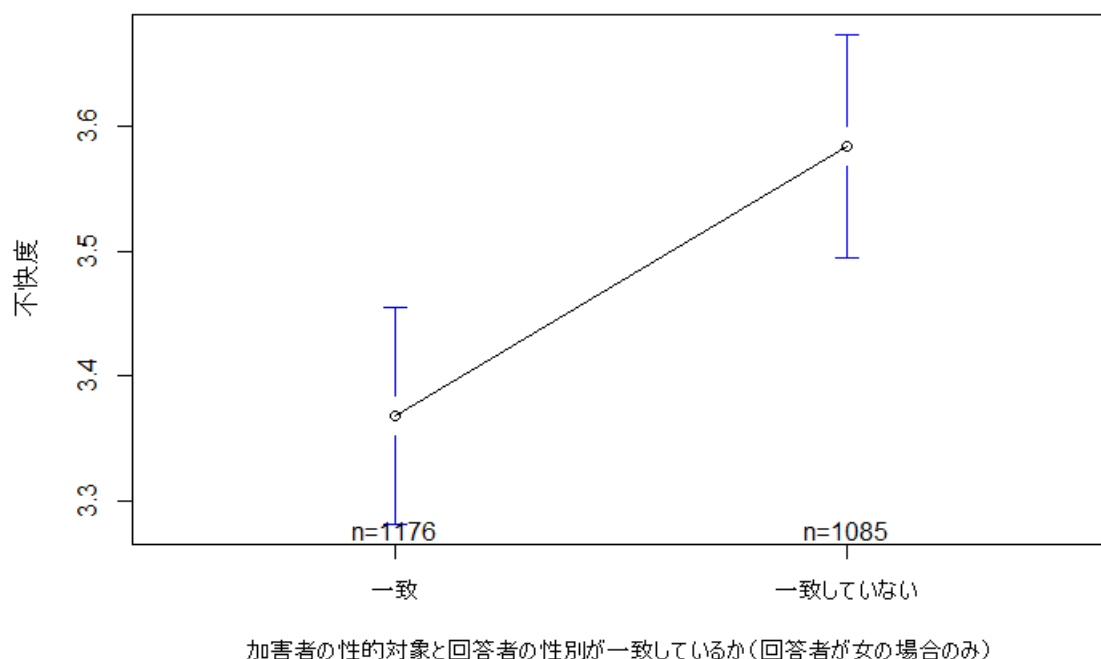


図3 加害者の性的対象と回答者の性別の一致・不一致別の不快度の平均値のプロット

回答者が女のときに限ると、加害者の性的対象と回答者の性別が一致している場合の不快度の平均値は 3.368197、一致していない場合の平均値は 3.583410 である。数値や図から平均値には「一致しているときの平均値<一致していない時の平均値」であるような明らかな差がみられた。また、t 検定を行っても、t 値-3.3925、p 値 0.0007046 と、p 値が 5%未満であり、平均値の間には有意な差があると考えられる。

以上の結果から、男性について「他者が何かの言動をしたとき、その人の性的あるいは恋愛の対象である性別が自分に当てはまる場合のほうが、当該言動をセクハラと感じやすい」という仮説は支持され、女性についてはその仮説の逆の傾向がみられた。これについて詳しく見るため、加害者の性的対象と回答者の性別の一致・不一致をさらに 2 種類に分け（回答者が男である場合は、一致するのは加害者が「男で同性愛者」か「女でストレート」の 2 種類、異なるのは「男でストレート」か「女で同性愛者」の 2 種類）、同様に不快度の平均値の比較を行った。それが以下の図 4、図 5 である。横軸の「一致（男でストレート）」というような表記は、「回答者の性別と加害者の性的対象となる性別が一致している+加害者は男でストレート」ということを表している。他も同様。

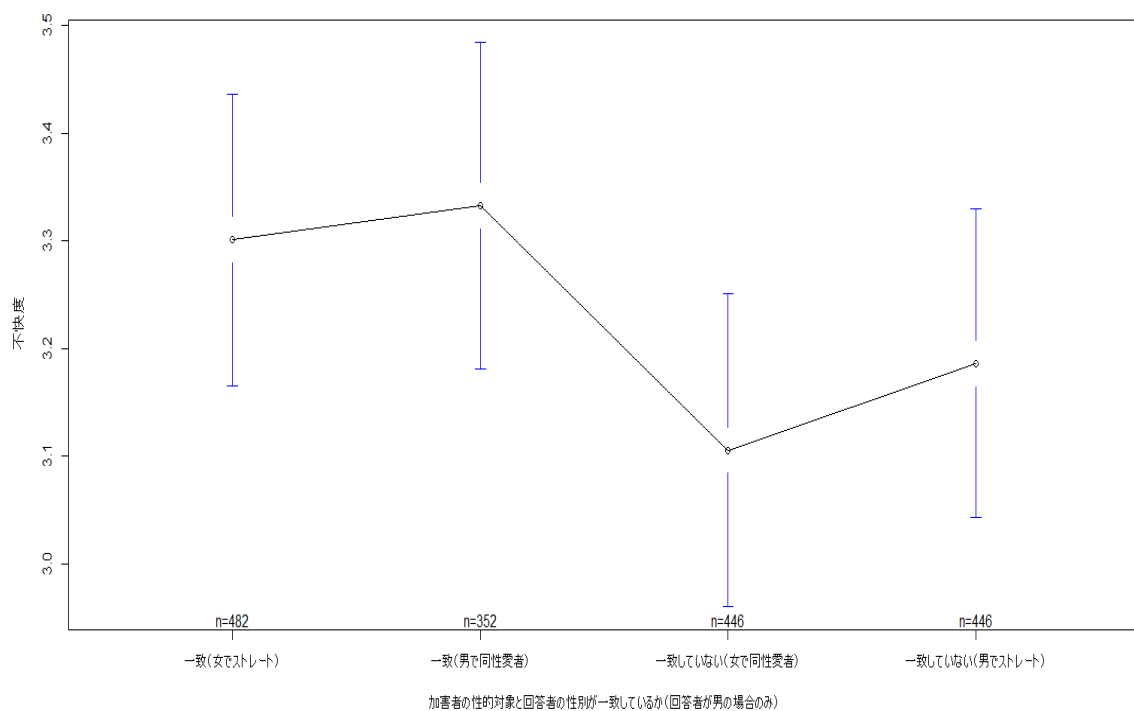


図4 加害者の性的対象と回答者の性別の一致・不一致別の不快度の平均値のプロット

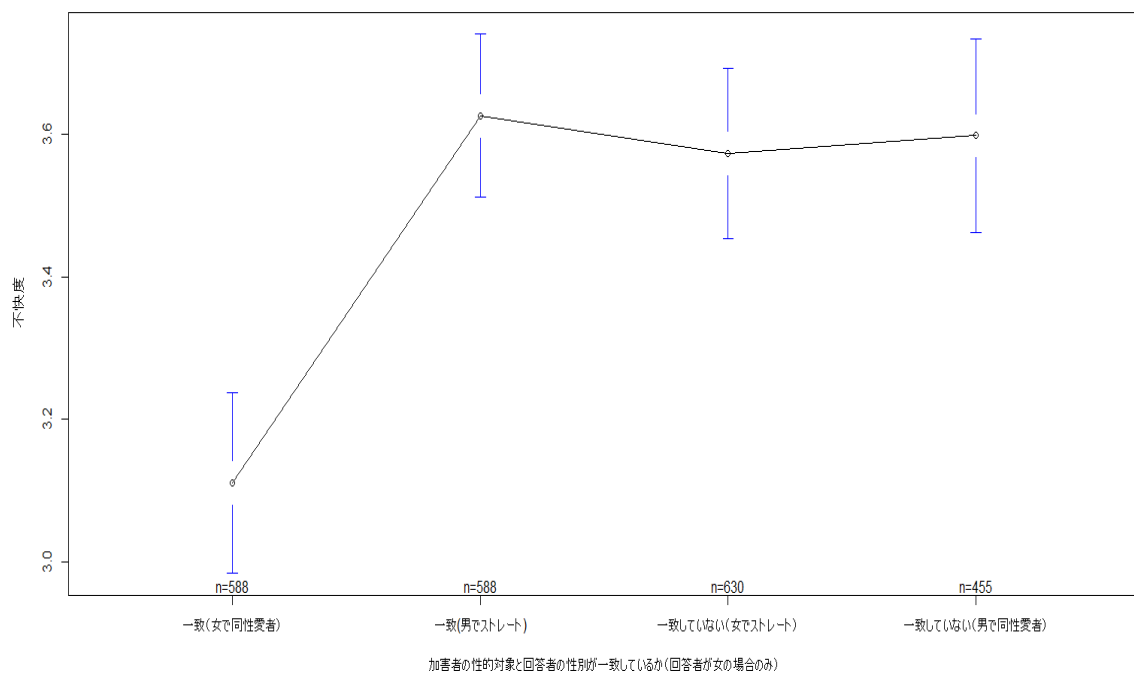


図5 加害者の性的対象と回答者の性別の一致・不一致別の不快度の平均値のプロット

図 4 より、男性について、加害者が「男で同性愛者」「女でストレート」のどちらである場合でも、加害者が「男でストレート」「女で同性愛者」である場合よりも不快感の平均値が高く、上で見た「他者が何かの言動をしたとき、その人の性的あるいは恋愛の対象である性別が自分に当てはまる場合のほうが、当該言動をセクハラと感じやすい」という傾向がこちらでも見られる。

一方、その仮説の逆の傾向がみられた女性については、図 5 より「男でストレート」「女でストレート」「男で同性愛者」の言動の不快感の平均値が高く同じくらいであり、加害者が「女で同性愛者」であるときの不快感が一つだけ相対的にかなり低くなっている。このことから、女性については「他者が何かの言動をしたとき、その人の性的あるいは恋愛の対象である性別が自分に当てはまらない場合のほうが、当該言動をセクハラと感じやすい」という（男性と逆の）傾向があるというよりは、基本的に不快感の平均値は男性より高くあるのだが、加害者が「女で同性愛者」である場合の不快感の平均値が相対的にかなり低いせいで、「一致」と「一致しない」と大きく二つにわけて比べたときには、前者の不快感の平均値が低くなっているだけだというように考えられる。

4. 考察

本レポートは、「セクハラを訴えることで自意識過剰と思われてしまうかもしれない」という葛藤についての情報を増やすため、その前提となる「セクハラ＝好意を向けられている/誘われている/性的にみられている」という同一視がどのくらい共有されているのか調べるのが目的であった。

本研究の分析によると、男性においては、自分が他者の性的（恋愛の）対象の性別であるかどうかはその人の言動をセクハラと認定するかどうかに影響を与えているということが明らかになった。具体的には自分が相手の性的（恋愛の）対象であるとき、男性は（そうでない場合よりも）相手の言動を不快に感じやすいという傾向がみられた。一方女性については、自分の性別と加害者の性的対象の性別が一致していないほうが言動を不快に感じやすいという傾向がみられた。しかし、その結果は「女で同性愛者」の人の言動が相対的にかなり低い不快感で評価される傾向にあることから生じたものであると考えられ、女性について自分が他者の性的（恋愛の）対象の性別であるかどうかはその人の言動をセクハラと認定するかどうかに影響を与えているとは言えなかった。

以上によると、男性についてのみ「加害者の性的対象が自分の性別と一致している」

場合に言動を不快に感じやすいという傾向がみられ、それを必要条件として持つ「性的に誘われている（性的に見られている/好意をもたれている）可能性がある」こともまた同様に不快さを感じさせやすいという傾向をもつと考えられる。

一方、今回の調査では、回答者にセクハラについての調査であると伝えてあるものの、不快さの度合いを評価してもらう形になっており、「不快度の平均値が高い」からといって「セクハラとみなされやすい」というように簡単につなげることはできない。今回みられた傾向をセクハラに結びつけるためには、回答者が「セクハラ」だと見なして不快に思ったのか、それとも他の理由で（例えば親しい人から無視されたら単純に不服だという理由で）不快だと思ったのか細かく調査する必要がある、そのような調査が今後期待される。

また今回は必要条件が「不快度の平均値を高くする」という特性を持っているから、「性的に誘われている（性的に見られている/好意をもたれている）可能性がある」こともまた同様に不快さを感じさせやすいというように推論をした。しかし、常識的に考えると、「男の私を性的に誘ってくる女がいる」というところから、「女のストレートの人の言動に私を性的に見ているニュアンスを感じてしまう」というように、上の推論と異なる因果関係が現実にはあると考えられる。このあたりの混乱に対処するためにも、「セクハラと「性的に誘われている（性的に見られている/好意をもたれている）」」の結び付きについて、必要条件からの推論ではなく、より直接的に「性的対象に見ていることが明らかな言動」と「性的な内容ではあるが自分を性的対象としては見ていなさそうな言動」でセクハラと判定する人の割合はどのように変わるかなどの調査をする必要があると考える。

それら課題を踏まえ、さらなる調査を行うことで、セクハラについてさらなる情報を集め、セクハラ相談の障害と抵抗感をなくすための活動につなげていくことが求められている。

参考文献

厚生労働省, 2015, 『職場のハラスメント対策はあなたの義務です!!』, (2022年1月19日取得,
https://www.mhlw.go.jp/general/seido/koyou/danjokintou/dl/120120_01.pdf).

———, 2019, 『あかるい職場応援団』, (2022 年 1 月 19 日取得,

<https://www.no-harassment.mhlw.go.jp/foundation/statistics>).

牟田和恵, 2015, 「その言動はセクハラです！: 男性はなぜ気づかないのか」『女性学講演会』 18(2):67-101.

同性愛者の言動はセクハラとみなされにくいのか

工田 菜央

1. はじめに

(1) 背景

現代では個人のセクシュアリティを利用していやがらせをする、固定化した偏見を持つなどは良くないといった風潮がある。それにはセクハラという言葉の広まりや女性の社会進出、性的マイノリティの認知の広まりが関係していると予想できる。1989年に提訴された福岡裁判をきっかけに「セクハラ」という単語は急速に普及、流行語になったのち定着した(牟田 2016)。セクハラ被害に声を上げた2017年ごろからの#MeToo運動も記憶に新しい。また、2018年10月に全国20～59歳の個人60,000名を対象におこなわれた性的少数者＝セクシュアル・マイノリティに関する調査では、「LGBT」という言葉の浸透率は68.5%であった(電通 2019)。さらに、性的マイノリティに対する大学生の意識と態度を2016年から2018年にかけて調査した研究によれば、同性愛者を嫌悪する要素は減少傾向にあり、性的マイノリティに対する偏見や好奇のまなざしは解消の方向に進んでいると考えられる(須長ほか 2020)。

一方で、性的マイノリティ当事者や性的マイノリティの人々が身近にいる人はまだ少ない。実際、上述した2018年10月に全国20～59歳の個人60,000名を対象におこなわれた性的少数者＝セクシュアル・マイノリティに関する調査では、LGBT層に該当する人は8.9%である(電通 2019)。そのため、性的マイノリティでない人々にとって、性的マイノリティの実像はうまくイメージできないと考えられる。現在も特にテレビ番組などでの「オネエタレント」の人気はみられ、彼ら／彼女らのキャラクターや描かれ方は「毒舌」「辛辣」「道化キャラ」「ファッショナブル」など限定されていることが多い。実像を知らないためにそうしたメディアによって固定化されたイメージをそのまま持ち、偏見を捨てようとはしているものの、多くの人にとって性的マイノリティのイメージは未だ固定化していると捉えることもできる。

(2) 問いと仮説

本レポートの目的は、セクハラになりうる場面というセクシュアリティへの意識が向
きやすい場面において、同性愛者の言動はセクハラとみなされにくいのかをデータ分析
を通じて評価することである。前述のように、社会的な風潮により性的マイノリティに
関する嫌悪は減りつつも、性的マイノリティが恋愛やセクシュアリティについてどう考
えているのか実像をうまくイメージできていないとすれば、性的マイノリティの言動は
よりポジティブに捉えられる傾向があるのではないだろうか。

(3) 問いに取り組む意義

前述した仮説が調査結果により支持されれば、社会的に受け入れるべきとされている
が実際にイメージできないものについては、不快感を与える基準が高くなると可能性が
あるといえる。セクハラ境界をあいまいにするのが「想像のできなさ」だと考えられ
るだけでなく、セクハラ以外の類似のハラスメント問題に対しても「想像のできなさ」
という要素が絡んでくるのではないかと示唆できる。

2. 分析

(1) 質問項目

A,B,Cの3パターンを作成し、Google Formのリンクを回答者に送付した。質問文の詳
細は本レポート末尾に添付している。

(2) データ加工方法

「とても不快である」に5,「不快である」に4,「どちらかといえば不快」に3,「ど
ちらかといえば不快ではない」に2,「不快ではない」に1,「まったく不快ではない」
に0といった数値を与えた。次に質問において加害者が同性愛者である場合とストレ
ートである場合に分け、平均値の比較を行った。その後、加害者のセクシュアリティと回
答者の性別がそれぞれ不快感に与える影響について回帰分析を行った。

3. 結果

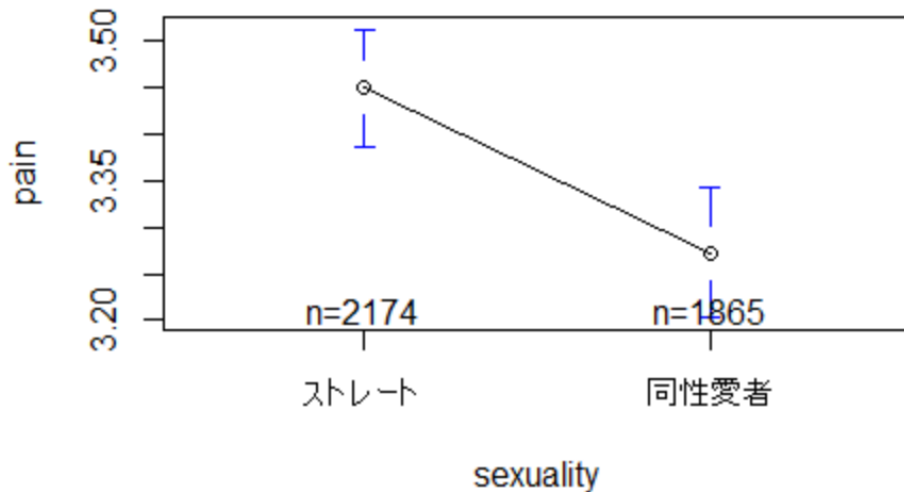


図1 加害者のセクシュアリティと不快感 (pain) の平均値

ストレートよりも同性愛者が与える不快感の平均値の方が約 0.15 ポイント低かった。しかし、回答者の性別の割合によって左右されているという可能性もある。例えば、女性の回答者は加害者が「男でストレート」「女で同性愛者」の場合に不快感がより高くなり、「男で同性愛者」「女でストレート」の場合に不快感がより低くなる。反対に、男性の回答者は加害者が「男で同性愛者」「女でストレート」の場合に不快感がより高くなり、「男でストレート」「女で同性愛者」の場合に不快感がより低くなるとも考えられる。その場合、不快感を高めているのは「自分が相手の性的対象者であるか」であり、「ストレートか同性愛者か」ではない。これを検証するため、加害者のセクシュアリティと回答者の性別が不快感に与える影響について、交互作用効果を測定する回帰分析を行った。

表 1 加害者のセクシュアリティと回答者の性別の回帰分析結果

	Model 1	Model 2
(Intercept)	3.56 *** (0.21)	3.64 *** (0.29)
sexuality同性愛者		-0.18 *** (0.05)
res.sex回答者・女		-0.01 (0.21)
res.sex回答者・男		-0.25 (0.21)
sexuality同性愛者:res.sex回答者・女		0.08 (0.42)
sexuality同性愛者:res.sex回答者・男		0.31 (0.43)
R ²	0.01	0.01
Adj. R ²	0.01	0.01
Num. obs.	4039	4039

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

表 1 の Model1 は主効果のみを測定した結果、Model2 は交互作用効果を測定した結果である。Model2 では回答者の性別がその他で、加害者がストレートの場合と比較した結果が示されている。主効果のみの場合と交互作用効果の測定した場合の調整済み決定係数に変化はなく、交互作用効果はみられないと言える。よって不快度を高めているのは回答者の性別に関係なく「ストレートか同性愛者か」であり、同性愛者の言動はストレートに比べセクハラとみなされづらいと考えられる。

4. 考察

本レポートでは「社会的な風潮により性的マイノリティに関する嫌悪は減りつつも、性的マイノリティが恋愛やセクシュアリティについてどう考えているのか実像をうまくイメージできていないとすれば、性的マイノリティの言動はよりポジティブに捉えられる傾向がある」という仮説を立て、同性愛者の言動はセクハラとみなされにくいのかを評価するべくデータ分析をおこなった。

分析の結果、加害者がストレートの場合よりも同性愛者の場合のほうがセクハラとみなされにくいと言えた。自分ではよくわからないが社会的な風潮により否定できないものに対し、ポジティブな姿勢を示すという仮説もある程度支持される可能性がある。

しかし、今回のアンケートの回答者のほとんどは大学生であり、性的マイノリティやジェンダーに関する教育を受けた者が多いとも考えられる。一般社会でこの調査を行った場合はまた違った結果が得られるかもしれない。ただ、本レポートによりセクハラ的境界をあいまいにするのが「想像のできなさ」である可能性があるとし唆できたため、セクハラに関する別の調査やセクハラ以外の類似のハラスメント問題に対してもこのような観点で分析する意義があると考えられる。

〈参考文献〉

- 株式会社電通, 2019, 『電通ダイバーシティ・ラボが「LGBT 調査 2018」を実施』, (2022 年 1 月取得, <https://www.dentsu.co.jp/news/release/2019/0110-009728.html>).
- 牟田和恵, 2016, 「セクハラ問題から見るジェンダー平等への道:問題化の歴史を振り返って」『法社会学』2016(82):111-122.
- 須長史生・小倉浩・正木啓子・倉田知光・堀川浩之, 2020, 「性的マイノリティに対する大学生の意識と態度:第3報—3 年間のアンケート調査のまとめと提言—」『昭和学会雑誌』80(5):396-421.

加害者、被害者の性別の組み合わせによる セクハラ認定の違い

山根 健太郎

1. はじめに

1.1 研究の背景と意義

近年「〇〇ハラ」という言葉がよく用いられる。代表的なものとして、パワハラやモラハラ、アカハラなどがあり、このようなハラスメントに関する略称は多岐に渡っている。そして、その元祖とも言える言葉がセクハラ、セクシュアル・ハラスメントである。セクハラとは相手の意に反する性的言動のことを指す。こうしたセクハラ被害を告発する #Me Too 運動が世界的に展開されているように、国内外問わずセクハラに対する関心が高まり、議論が活発になっている。しかし、様々な事例がある中で、どの事例をセクハラとして認定するか、その基準は様々である。柴田侑秀・中谷内一也（2019）は、セクハラは地位の高い加害者と相対的に地位の低い被害者との間に起こるものだと指摘している。また、柴田・中谷（2019）は、加害者の地位が高い場合、被害者の主張は大きさではなく、かつ被害者の落ち度も指摘されない傾向があると主張している。これは、加害者の地位が高いケースにおいて、被害者の主張が尊重される傾向にある、つまり、セクハラとして認定されやすい傾向にあると言えよう。また、馮雪（2021）は、日本のセクハラ問題について、法律や判例を参照し、「双方の地位・関係・身分、当時及び事件前後の状況、被害者の心理状態などの事件の全貌の考量及び被害者の同意の有無に基づき、判断されている」（馮 2021：146）と指摘している。したがって、日本の裁判所がセクハラを認定する上で、加害者と被害者の関係性だけでなく、その場の状況や被害者の心理状態など、様々な要素を考慮して総合的に判断していると言える。

1.2 仮説

前節より、セクハラ事例は多岐に渡り、その認定には様々な条件が総合的に考慮されていると言える。また、裁判所の認定する基準だけでなく、人々が各事例をセクハラとして認定するかどうかの基準は様々にあると言える。そこで、本研究では、加害者と

被害者の性別に着目して仮説を立て、その違いによってセクハラとしての認定のされやすさに違いが生じるか検証する。仮説は以下の通りである。

仮説 1：同性間より異性間の事例の方がセクハラとして認定されやすい

仮説 2：異性間の事例において、加害者が女性であるより男性である事例の方がセクハラとして認定されやすい

仮説 3：異性間の事例において、被害者が男性であるより女性である事例の方がセクハラとして認定されやすい

2. 分析方法

まず、回答者の性別を男性、女性に分類し、被害者の性別として想定する。次に、調査票の質問文における加害者の性別について男性と女性に分類する。そして、第一に、加害者と被害者が異性である事例と同性である事例に分類し、それぞれの不快度の平均値を比較する。第二に、加害者について男性と女性の2つに分類、被害者について男性と女性の2つに分類し、それぞれの不快度の平均値を比較する。第三に、「加害者→被害者」として、「女性→女性」「女性→男性」「男性→女性」「男性→男性」の4つに事例を分類し、それぞれの不快度の平均値を比較する。また、平均値の差の検定には Welch の t 検定を用いる。

3. 結果

3.1 異性間、同性間の比較

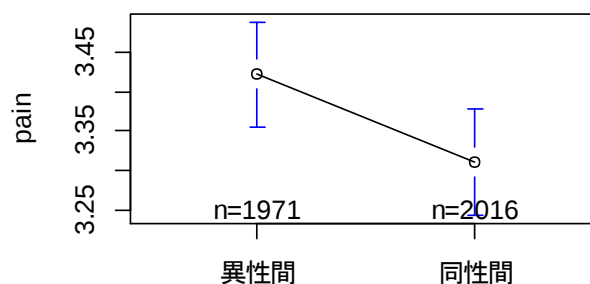


図 1 異性間、同性間の事例における不快度

図1は、異性間、同性間の2つに事例を分類し、それぞれの不快度の平均値を比較したものである。その結果、同性間の事例と比較して、異性間の事例の不快度の方が高いと言える。また、平均値の差の検定の結果は「 t 値=2.3189、 p 値=0.02045」であった。すなわち、5%水準の有意差があると言える。

3.2 加害者、被害者の性別の比較

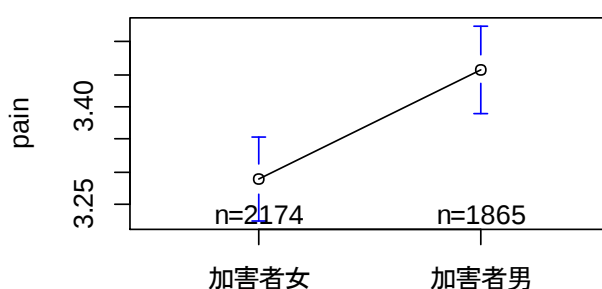


図2 加害者の性別による不快度

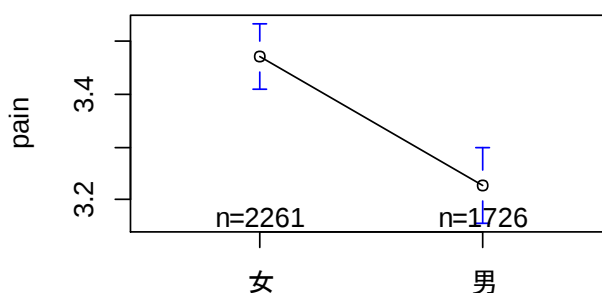


図3 被害者の性別による不快度

図2、図3は加害者、被害者の性別によって事例を2つずつに分類し、それぞれの不快度の平均値を比較したものである。なお、図3において、男女間の違いを比較するために被害者(回答者)の性別としてその他と回答されたものを省略している。その結果、加害者が女性の事例と比較して男性の事例の不快度が、被害者が男性の事例と比較して女性の事例の不快度が高いと言える。また、平均値の差の検定の結果について、加害者の男女間の結果は「 t 値=3.5397、 p 値=0.0004051」であり、被害者の男女間の結果は「 t 値=-5.0377、 p 値=0.0000004937」であった。すなわち、ともに0.1%水準で有意差があると言える。

3.3 加害者、被害者の性別の組み合わせの比較

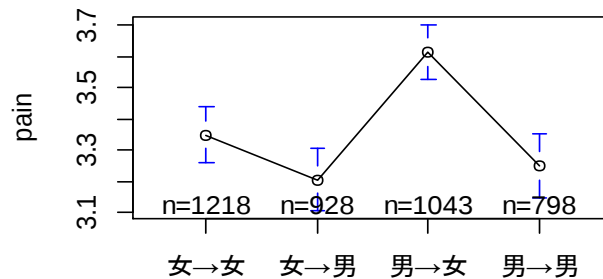


図4 加害者、被害者の性別の組み合わせによる不快感

図4は、加害者、被害者の性別の組み合わせごとに事例を4つに分類し、それぞれの不快感の平均値を比較したものである。その結果、「男性→女性」「女性→女性」の順に不快感が大きく、「女性→男性」「男性→男性」の事例の不快感が低いと言える。特に、「男性→女性」の事例が他の3つの事例と比較して、不快感が高いと言える。また、平均値の差の検定の結果について、「男性→女性」と「女性→女性」の結果は「t値=4.1809、p値=0.00003014」、「女性→女性」と「男性→男性」の結果は「t値=1.4266、p値=0.1539」、「女性→女性」と「女性→男性」の結果は「t値=2.1157、p値=0.03449」であった。すなわち、「男性→女性」と「女性→女性」には0.1%水準の有意差、「女性→女性」と「女性→男性」には5%水準の有意差があり、「女性→女性」と「男性→男性」には有意差がないと言える。

4. 議論

前節より、セクハラの実例について、不快感が高いほどセクハラとみなされやすいと考えると、以下の結論が導ける。第一に、同性間の事例に比べて異性間の事例の不快感が高く、セクハラとみなされやすいと言える。第二に、加害者が女性の事例に比べて男性の事例が、被害者が男性の事例に比べて女性の事例の不快感が高く、セクハラとみなされやすいと言える。第三に、まず、加害者が男性、被害者が女性の事例が最も不快感が高く、セクハラとみなされやすいと言える。また、加害者が男性、被害者が女性の事例に次いで、加害者、被害者ともに女性の事例、加害者が女性で被害者が男性の事例の順に不快感が低下し、セクハラとみなされにくくなると言える。この結果は3つの仮説

を支持するものだと言える。しかし、異性間である加害者が女性、被害者が男性の事例と比較して、同性間である加害者、被害者ともに女性の事例の不快感の平均値が高いことから、異性間の事例より同性間であっても被害者が女性である事例の方がセクハラとみなされやすいと言える。

以上より、人々がセクハラだと認定する基準について、加害者と被害者の性別とその組み合わせによって違いが生じると言える。今後は、加害者と被害者の社会的地位の違いやその場の状況など、他の要素が人々のセクハラだと認定する基準にどのような影響を及ぼすか、検証していきたい。

参考文献

- 柴田侑秀・中谷内一也，2019，「セクハラ加害者の地位が被害者非難に与える影響」『日本心理学会大会発表論文集』83：426.
- 馮雪，2021，「職場でのセクハラの判断基準及び使用者責任について—中・日・米の裁判例と比較して」『北大法政ジャーナル』28：117-153.

性的指向とセクハラ被害との関係性

—大学におけるセクハラについての社会調査—

陳 暁嘉

1. 研究背景

1.1 キャンパスの現状：アカハラ・セクハラ多発

まず、内田（2017：301）により、アカデミック・ハラスメントは、研究・教育に関わる優位な力関係のもとで行われる理不尽な行為と定義されており、大学教員が指導院生に対して指導するときのアカハラやセクハラは比較的可視化されやすく、人目もある。次に、パワハラとは、同じ職場で働く者に対して職務上の地位や人間関係などの職場内の優位性を背景に業務の適正な範囲を超えて精神的苦痛を与える、または職場環境を悪化させる行為というふうに厚労省では定義されており、国立大学法人の運営費交付金や私大の人件費削減の中で、アカハラ、パワハラ、セクハラなどの被害に悩み、任期を全うできずに職場を失うと、将来の研究生活への夢や希望、意欲を打ち碎かれる人が少なからずいるという状況がある（内田 2017：302）。確かにパワハラ、セクハラ、アカハラが多発する大学において、どこが不備でこの大学はこんなにもハラスメントが多発しているのかを推測するために、ハラスメント防止ガイドラインに基づいた比較研究、そしてインタビューによる具体的な事例研究はすでにされてきたが、主に教員から若手研究者などのように上下関係のある事例を中心とされているので、学生・院生の間での状況は十分に把握しているとはいえない。

また、性別という課題に関わったジェンダー・ギャップという概念は今まで多く言及されてきたが、それについての研究も主に男女差から出発し、例えば政治参加に対する影響（武田 2010:323）などを注目している。同性愛者あるいは性的少数者の状況は実際には長い間排除されていると考えられる。

1.2 大学におけるホモソーシャルな構造

坂無（2007：19）は、ハラスメントと大学研究室の構造の関係を北海道大学の大学院生へのインタビュー調査から考える。大学研究室の構造には固定メンバーが長時間す

ごす閉鎖的な特徴があり、上下の関係としては研究室の権力がトップの教員に集中している。またジェンダーの関係として、ホモソーシャルな構造がみられる。具体的には、女性に対して(1)男性から女性への性的なジョーク、(2)少数派である女性が男性院生の友人を作りにくい状況、(3)研究が女性には向いてないという偏見、(4)少数者である女性は会話の選択を強いられるという4点があり、同性愛に対しては同性愛ジョークがある。一方で、研究室では少数である女性院生の抵抗の戦略をみることもできた。

1.3 問い・研究目的・意義

上記のような閉鎖的でホモソーシャルな構造が大学研究室にできやすいようであるが、権力が集中する教員、また院生においても男性が多い。そこでは教員や多数派である男性院生に都合の良いように研究室の慣習がつくられ、下位で少数の女性院生が不利益を強いられることが多い。インタビューと『学生生活実態調査からは「普通」の研究室にもハラスメントの潜在例は多く、大学の対応システムにのらない例も多い。また閉鎖的で教員の権力が強い、ホモソーシャルな構造のもとで、ハラスメントは温存される可能性が高いと考えられる。しかし、性別だけではなく性的指向についての考察はまだされていない。確かに坂無（2007：19）によれば、大学の研究室においては異性愛主義が強調され、男性による特定のホモソーシャル的な構造が存在する。しかし、この結論は他の大学においても普遍的に適用されるかどうかはまだ検証されていない。また、異性愛者と同性愛者あるいは男性と女性、それら二元対立的に、それぞれ比較することだけでは、実態を把握するには必ず十分とは言えない。例えば、同じ言動であっても、加害者の性的指向により、被害者にとってセクハラの種類や被害感も異なる可能性があるだろう。そこで本稿は、今回の大学における調査によって取得されたデータを用い、性的指向をはじめとする各要因の影響や要因間の交互作用を量的分析を行い、より明確にキャンパスにおけるセクハラに対する人々の認識などを把握しようとする。

法・制度デザインがより完備になれるために、キャンパスにおいてどのような言動がセクハラとみなされるか、どのような要因が影響を与えているか、その実態を把握した上で、法・制度をどこに向けて改善すればいいか、その具体的な方向性を示すことが本研究の意義である。

1.4 仮説デザイン

前節の疑問を念頭においたら、本稿の仮説を以下とする。

Q1：地位が自分より高ければ高いほど、相手の言動がセクハラとみなされやすい。

Q2：ストレイトな人より、相手が同性愛者の方がセクハラとみなされにくい。

Q3：相手が女性の場合より、男性の方がセクハラとみなされやすい。

Q4：男性の場合より、女性でストレイトな相手のハラスメントから不快感を感じやすい。

Q5：地位が自分より高い相手の場合、ストレイトな人のハラスメントから不快感を感じやすい。

2. 研究方法

本章においては、調査の質問項目やデータ取得後の分析方法について簡潔に述べる。

2.1 質問項目の作成。

前章の仮説に基づいて質問項目を以下の通り作る。(実際の調査において、他の変数も質問文案に含まれたが、本稿の分析は以下の変数を中心として行う)

表 1 質問項目の作成

	被害者の性別	加害者の性別	社会的地位	ストレイト／同性愛者
ヴィネット 1	男	男	教授	ストレイト
ヴィネット 2	女	男	教授	同性愛者
ヴィネット 3	女	女	教授	ストレイト
ヴィネット 4	男	男	先輩	同性愛者
ヴィネット 5	女	男	先輩	ストレイト

ヴィネッ ト 6	女	女	先輩	同性愛者
ヴィネッ ト 7	男	男	友人	ストレイト
ヴィネッ ト 8	女	男	友人	同性愛者
ヴィネッ ト 9	女	女	友人	ストレイト

2.2 分析方法

まず、表 2 のようにロングフォーマットへの変換を行う。分析のために、「pain」を数値化するために、「とても不快である」に 5、「不快である」に 4、「どちらかといえば不快」に 3、「どちらかといえば不快ではない」に 2、「不快ではない」に 1、「まったく不快ではない」に 0 とした数値を与えた。

表 2 ロングフォーマット変換

		value					
	pain	0	1	2	3	4	5
1	とても不快である	0	0	0	0	0	1152
2	不快である	0	0	0	0	1087	0
3	どちらかといえば不快	0	0	0	764	0	0
4	どちらかといえば不快ではない	0	0	408	0	0	0
5	不快ではない	0	384	0	0	0	0
6	まったく不快ではない	244	0	0	0	0	0

次に、平均値の比較や単回帰分析により、相手の性別（変数名：sex.offender）・性的指向（変数名：sexual）・社会的地位（変数名：statu, 先輩と友人と教授）の影響を分析する。最後は、前述の多変数の重回帰分析を行い、交互作用効果の検証。具体的な分

析結果は次章で解説する。

3 分析結果

3.1 平均値の比較

まず、平均値の比較や単回帰分析を通じて仮説 1、2、3 をそれぞれ検証してみたら、結果は以下の図表のように示される。

図 1 によれば、相手の地位によって回答者の不快感は「教授」>「先輩」>「友人」である。それに、表 3 の数値が示すように、教授より先輩からハラスメントを受けると 0.411 不快感が顕著に下がり、友人からハラスメントを受けると 0.588 不快感が顕著に下がるが、相関係数が 0.027 しかないので、必ず相手の社会的地位と不快感との関係が強いとは言い切れない。

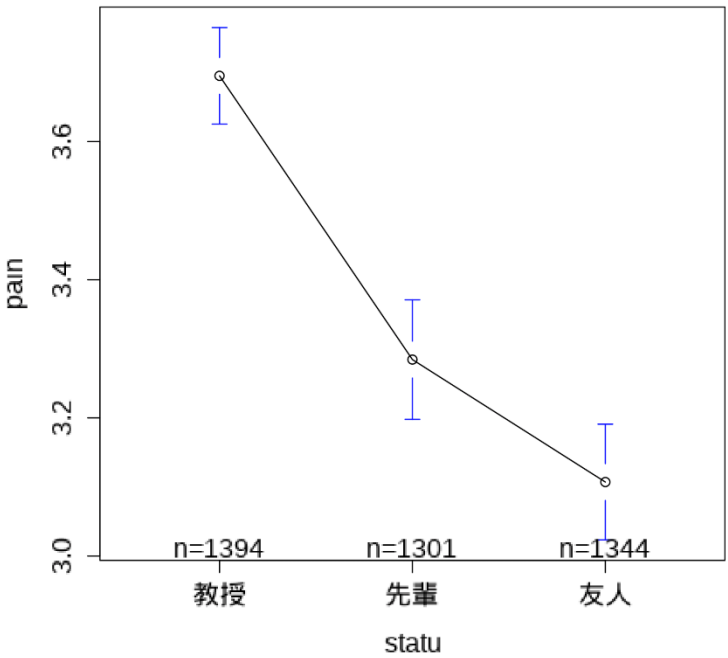


図 1 平均値の比較（仮説 1）

表 3 単回帰分析の結果（仮説 1）

Model 1	
(Intercept)	3.695 ***
	(0.040)

statu 先輩	-0.411 *** (0.058)
statu 友人	-0.588 *** (0.057)
R ²	0.027
Adj. R ²	0.026
Num. obs.	4039

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

図 2 によれば、相手の性的指向によって回答者の不快感は「ストレイト」 > 「同性愛者」である。確かに、表 4 の数値が示すように、同性愛者よりストレイトな相手からハラスメントを受けると 0.176 不快感が顕著に上がり、ストレイトな人より、相手が同性愛者の方がセクハラとみなされにくいのが、相関係数が 0.003 しかないのも、相手の性的指向と不快感との間にはかなり弱い相関しか読み取れない。

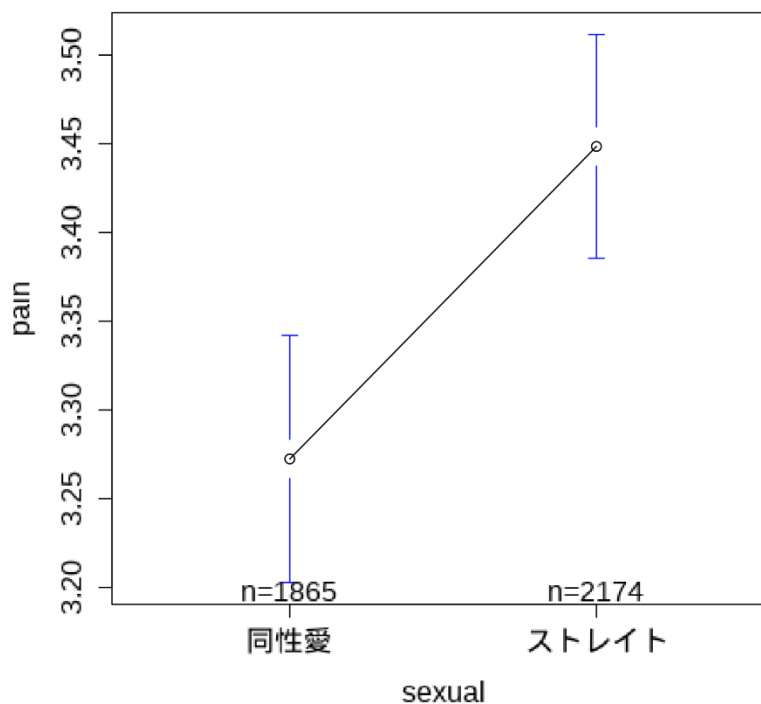


図 2 平均値の比較（仮説 2）

表 4 単回帰分析の結果（仮説 2）

	Model 1
(Intercept)	3.272 *** (0.035)
sexual ストレイト	0.176 *** (0.048)
R ²	0.003
Adj. R ²	0.003
Num. obs.	4039

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

図 3 によれば、相手の性別によって回答者の不快感は「男」 > 「女」である。そして、表 5 の数値が示したように、男性より女性の相手からハラスメントを受けると 0.169 不快感が顕著に下がる。つまり、女性より、相手が男性の方がセクハラとみなされやすい。しかし、相関係数が 0.003 しかないので、相手の性別と不快感との間には弱い相関しか示されていない。

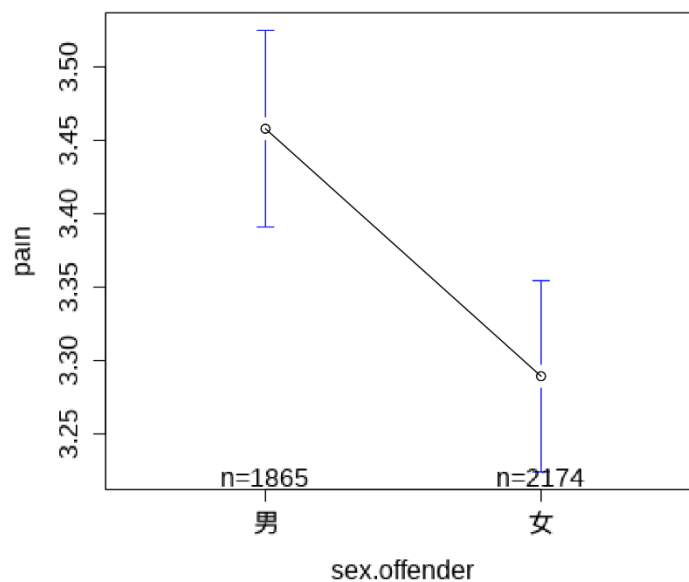


図 3 平均値の比較（仮説 3）

表 5 単回帰分析の結果（仮説 3）

	Model 1
(Intercept)	3.458 *** (0.035)
sex.offender 女	-0.169 *** (0.048)
R ²	0.003
Adj. R ²	0.003
Num. obs.	4039
*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05	

3.2 交互作用効果の検証

二つ以上の変数に交互作用効果がある場合、それを見落とす可能性がある。そこで回帰分析を行う。回帰分析しても誤差の推定はやはり不正確だが、交互作用効果の推定はできる。①相手の性別と性的指向との交互作用効果、または②相手の地位と性的指向との交互作用効果を仮定した上で、一つのモデルを推定するために、重回帰分析を行う。その結果は、表 6 のように、①相手の性別と性的指向の交互作用効果は有意である。相手が男性の場合、ストレイトな人からハラスメントを受けると 0.266 不快感が下がるが、相手が女性の場合は、 $-0.266 + 0.380 = 0.114$ 不快感が上がる。つまり女性でストレイトな人からハラスメントを受ける場合、不快感を強く感じるということだが、調整後相関係数が 0.034 しかないので、この結果を母集団に一般化する時にはより精密な分析をしなければならない。また、②相手の性的指向と社会的地位の交互作用効果は有意である。相手が教授の場合、ストレイトな人からハラスメントを受けると 0.266 不快感が下がるが、友人でストレイトな人の場合は、 $-0.266 + 0.320 = 0.054$ 不快感が上がる。つまり友人でストレイトな人からハラスメントを受ける場合、不快感を強く感じるということだが、調整後相関係数が 0.034 しかなく、先輩でストレイトの場合においては有意な結果が示されていないため、この結果この結果を母集団に一般化することはできないと考えられる。

表 6 交互作用効果の検証

	Model 1
(Intercept)	3.931 *** (0.080)
statu 先輩	-0.499 *** (0.093)
statu 友人	-0.737 *** (0.089)
sex.offender 女	-0.359 *** (0.073)
sexual ストレイト	-0.266 ** (0.102)
sex.offender 女:sexual ストレイト	0.380 *** (0.100)
statu 先輩:sexual ストレイト	0.144 (0.123)
statu 友人:sexual ストレイト	0.320 ** (0.121)
R ²	0.036
Adj. R ²	0.034
Num. obs.	3650

*** $p < 0.001$; ** $p < 0.01$; * $p < 0.05$

4. 考察

前章の分析結果によれば、最初にたてた仮説 1（地位が自分より高ければ高いほど、相手の言動がセクハラとみなされやすい）、仮説 2（ストレイトな人より、相手が同性愛者の方がセクハラとみなされにくい）、仮説 3（相手が女性の場合より、男性の

方がセクハラとみなされやすい) が支持されたが、すべて弱い相関しか示されていない。それらを解釈すれば、なぜ先輩や友人より、教授からハラスメントを受ける場合、不快感を強く感じるか？それは相手の社会的地位が高ければ高いほど、その人の道徳観・人間性への期待も自然に高くなり、同じ言動であってもセクハラとみなされやすくなるのであると考えられる。なぜ同性愛者よりストレイトな人からハラスメントを受ける場合、不快感を強く感じるかという点、伝統的な道徳観やジェンダー観においてはすでに男女それぞれの役割が規定され、男女間には適切な距離を取らなければならないのが当然であると思われてきたのに対して、同性愛者のジェンダー役割はより曖昧であるために、ストレイトな人より、彼らの場合における線引きは明確ではないのであろう。そして、類似な理由からも仮説 3 の検証結果を解釈できる。伝統的なジェンダー意識において、女性より男性の方が強勢でハラスメント的な行動をしやすく、今までネットで炎上されたセクハラに関わる事件にも加害者が男性の場合が多いという感じが共有された結果、相手が女性の場合より、男性の方がセクハラとみなされやすい。ただし、これはあくまでも一つの解釈であり、今後は他の原因をさらに探求する必要があるであろう。

そして、交互作用効果の検証を通じて仮説 4 (男性の場合より、女性でストレイトな相手のハラスメントから不快感を感じやすい) は支持されたが、仮説 5 (地位が自分より高い相手の場合、ストレイトな人のハラスメントから不快感を感じやすい) は支持されなかった。一つの理由としては、女性の同性愛者 (レズビアン) より、男性の同性愛者 (ゲイ) の人々がマスメディアや生活の現場に急進的な言動をすることが多く見られ、彼らに対する批判もより強いと感じられるので、全体的に、ゲイよりレズビアンの人々の言動がスムーズに受容されているかもしれない。つまり、男性が性的指向を問わずに全体的にセクハラをしやすくとみなされる傾向がある一方、人々の認識の中には、女性グループにおけるストレイトと同性愛者との間の区別がより大きく思われており、同性愛者の女性とストレイトな女性の言動に対する反応も男性の場合より差があり、男性の場合より、女性でストレイトな相手のハラスメントから不快感を感じやすいのであるかもしれない。

本研究は、従来の研究より「性別」だけを要因として行われたセクハラの実態分析を補足するために、「性的指向」を一つの要因としてセクハラについての分析に投入し、その影響を多方面から接近することを試みた。基本的には有意な関連が示されたが、強い

相関ではないと考えられる。今後はサンプルを拡大してデータを取得してからさらに精緻な分析を行う必要があるであろう。また、横断研究であり、時間的变化は観測できなかったのもので、今後の慎重な検証が期待される。

参考文献

- 高橋知音・内田伸子・金子雅臣・大塚雄作, 2017, 「いま大学で何が起きている
か：ハラスメントの起きる可能性を知る」『教育心理学年報』2017(56): 299-314.
- 武田祐佳, 2010, 「政治参加におけるジェンダー・ギャップ：JGSS-2003による資源・政治的関与要因の検討」『日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集』10(7): 323-335.
- 坂無淳, 2007, 「大学研究室とハラスメント：閉鎖性とホモソーシャルティ」『現代社会学研究』20: 19-36.

セクハラにおける加害者の性別、性的指向と 不快感の関係

宮崎 慶人

1. はじめに

1-1. 問題の背景

セクシュアル・ハラスメント（以下「セクハラ」という）は、重大な人権問題であるが、セクハラという概念が法的な議論の蓄積が不十分なままに急速に普及したために、「何をセクシュアル・ハラスメント、セクハラと捉えるかには、混乱がみられる」（牟田 2004: 30-31）状態にある。セクハラの防止や実際にセクハラが発生した後の対応を的確に行うためには、どのような行為がセクハラに該当し、どのような行為がセクハラとは言えないのかということが明らかになっていることが要請されるが、現状ではその線引きは曖昧なものとなっているのである。

そこで、本稿では要因配置調査実験により得られたデータをもとに、セクハラとなりうる言動について、それを不快に感じやすい（つまり、セクハラと見なされやすい）のはどのような場合であるのかという点について、とくに被害者と加害者の性別および加害者の性的指向に着目して分析していく。

1.2. 本稿における仮説

ある言動がセクハラと見なされる可能性があるのは、当然ながら、その言動に性的なニュアンスが含まれている時である。このことを踏まえると、被害者が、自らが性的な対象として見られていると強く感じているときに、セクハラ行為をより不快に感じるという仮説が考えられる。すると、被害者と加害者が同性であるより異性であるほうがより不快に感じる想定できる。

さらに、本調査の質問項目では加害者の性的指向についても言及されているため、加害者と被害者が同性であるか否かによって場合分けをして、それぞれの場合において、加害者が同性愛者であるときと異性愛者であるときの平均不快感の差を議論することもできる。つまり、加害者と被害者が同性であれば、加害者が同性愛者であるほうがセ

クハラはより不快に感じられると考えることができ、同様にその逆も想定される。また、和田実（1996）は、男性よりも女性の方が同性愛者を社会的に容認し、同性愛者をポジティブにイメージしていることや、男性は男性同性愛者と心理的に距離を置いているということを指摘している。つまり、男性は女性と比べて、とくに男性の同性愛者をより強く忌避しているということになり、加害者と被害者がともに男性であった場合に、加害者が同性愛者であるときの不快感が顕著に高くなることも予想される。

ここまでの議論をまとめると、被害者が、自らが性的な対象として見られていると感じている時に、より不快に感じやすいという仮説から、より具体的な水準の仮説として、以下の4つの仮説を想定することができる。

- ・ 加害者と被害者が同性であるときよりも、異性であるときのほうが、セクハラ行為をより不快に感じやすい
- ・ 加害者と被害者が異性であるならば、加害者が異性愛者であるほうが、セクハラ行為をより不快に感じやすい
- ・ 加害者と被害者が同性であるならば、加害者が同性愛者であるほうが、セクハラ行為をより不快に感じやすい
- ・ とくに、加害者と被害者がともに男性であるときは、加害者が同性愛者であるほうが、セクハラ行為をより不快に感じやすい

以上について、平均不快感の差の検定を通じて確認し、被害者が加害者の性的対象になっているとより強く感じるときに不快感が高まるという仮説について検討していく。

2. 分析の方法

本調査では、各質問項目において様々な状況におけるセクハラ行為を具体的に提示し、それぞれに対して回答者自身がその被害を受けた時にどの程度不快に感じるかを6点尺度で尋ねている。分析に際しては、「とても不快である=5」「不快である=4」「どちらかといえば不快=3」「どちらかといえば不快ではない=2」「不快ではない=1」「まったく不快ではない=0」となるように数値を与えた不快感を用いる。

また、分析にあたって加害者の属性を示す変数を作成した。たとえば「性別」変数は、「男」と「女」の2つの尺度からなる変数である。前者をとるのは各質問項目において「男」という語が含まれる場合、すなわち男性が加害者となる質問項目の場合であり、後者をとるのは各質問項目において「女」という語が含まれる場合である。以下に作成した変数の全てを示すが、他の変数も同様に作成している。

- ・ 「性別」変数：「男」「女」の2尺度
- ・ 「性的指向」変数：「同性愛者」「ストレート」の2尺度
- ・ 「同性」変数¹：「同性」「異性」の2尺度

以上で示した変数に関して平均不快感の差の検定を行って結果を解釈した。つまり、「性別」変数が「男」のときの平均不快感と「女」のときの平均不快感の差を検定し、たとえば「男」のほうが有意に平均不快感が高いならば、同様のセクハラ行為でも、加害者の性別が男性であるほうがより不快に感じると考えるといった要領である。

なお、回答者の性別について、本調査では「男性」「女性」「その他」の3択で尋ねたが、性別で「その他」を選択した2名の回答は、本稿の意図に照らして除外した。

3. 結果

図1は、質問項目中の加害者と回答者（すなわち被害者）が同性であるか異性であるかに分けて平均不快感を示した図である。エラーバーは95%信頼区間の範囲を示しており、加害者と被害者が異性であるほうが平均不快感は高いが、同性であるときと異性であるときの間で、有意な差があるとまではいえない。

図2と図3は、それぞれ被害者が男性の場合、女性の場合に限定して、加害者の性別と平均不快感の関係を示した図である。男性被害者の場合には、加害者の性別と平均不快感はあまり関係しないことがわかるが、図3より女性被害者は、加害者が女性であるときよりも男性であるときの方の平均不快感が有意に高いといえる。

¹ この変数に関しては回答者の性別も参照し、回答者が男性で「性別」変数も「男」、もしくは回答者が女性で「性別」変数も「女」のときに「同性」を、それ以外ならば「異性」をとるように定めた。

図4と図5は、それぞれ加害者と被害者が異性の場合、同性の場合に限定して、加害者の性的指向と平均不快感の関係を示した図である。加害者と被害者が異性の場合、加害者がストレートであるほうが平均不快感は高いが、95%水準で有意差があるとはいえない。また、加害者と被害者が同性の場合、仮説段階では加害者が同性愛者であるほうが平均不快感は高くなることが予想されたが、図5からは、むしろ加害者がストレートであるほうが平均不快感は有意に高いことが確認できる。

また、仮説では加害者と被害者がともに男性である場合に、加害者が同性愛者であるほうが顕著に不快感は高くなると予想したが、図6を見ると加害者が同性愛者であるほうが平均不快感は高くなっているものの、有意差は生じていない。

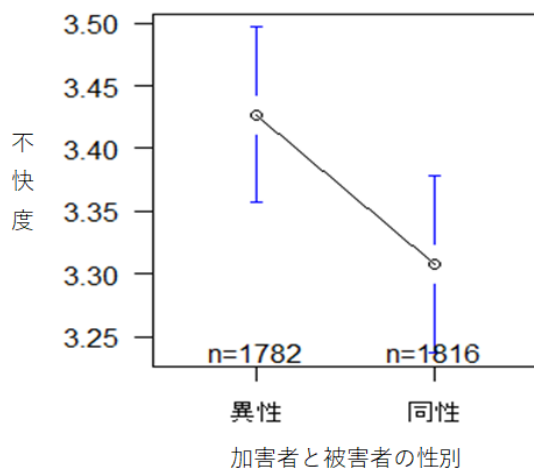


図1 加害者と被害者の異性/同性別の平均不快感 (95%信頼区間)

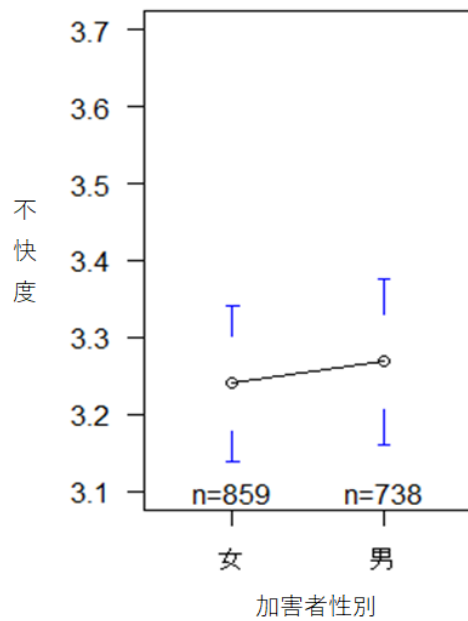


図 2 男性被害者の加害者男女別にみた平均不快度（95%信頼区間）

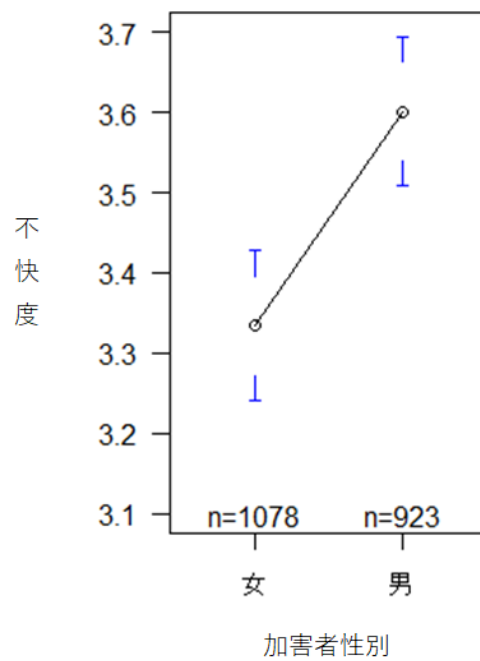


図 3 女性被害者の加害者男女別にみた平均不快度（95%信頼区間）

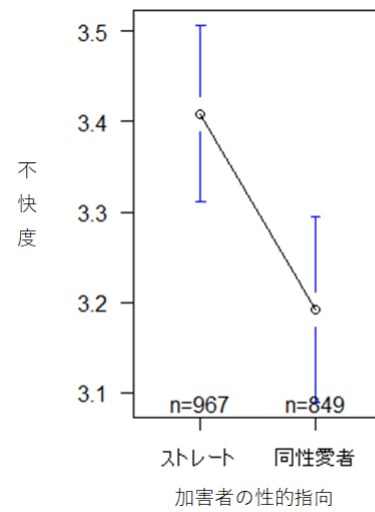
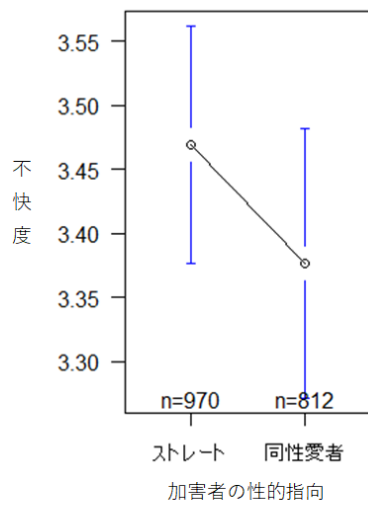


図4 被害者と加害者が異性の場合の性的指向別にみた不快度 図5 被害者と加害者が同性の場合の性的指向別にみた不快度

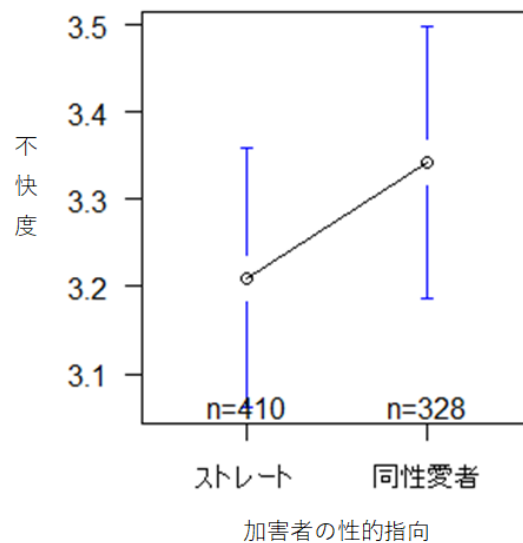


図6 加害者・被害者とも男性の場合の、性的指向別にみた不快度

4. 考察

本稿では、被害者が、自らが性的な対象として見られていると強く感じているときに、セクハラ行為をより不快に感じるという想定のもとに立てられた4点の仮説を平均不快度の差の検定を通じて検討してきた。平均不快度の差の検定では、女性がセクハラ行為を受ける場合に限り、加害者が被害者と異性であるほうが不快度は高くなるという仮

説が成り立ったが、ほとんどの場合において仮説を立証するに至る有意な差は見られなかった。このことから考えると、被害者が、自らが性的な対象として見られていると強く感じるときにセクハラ行為をより不快に感じるという仮説を用いることは適切ではないといえる。女性が被害者となるときには加害者が異性であるほうが不快度が高いという点についても、「一般的に加害者が男性であるほうがより不快に感じる」といったような他の要因を想定するほうが、より妥当かもしれない。

また、特筆すべき分析結果として、加害者と被害者が同性である場合には、仮説に反して加害者が同性愛者であるほうがむしろ不快度は低いという結果が出た。加害者と被害者が異性である場合も、有意差こそないものの加害者が同性愛者であるほうが平均不快度はわずかに低く、これらのことは「社会的望ましさ」が影響した可能性を否定できない。すなわち、人格検査などにおいてはその質問項目が「社会的に望ましいか望ましくないか」という観点から価値づけられやすく、しかも、被験者はこの観点から項目に対する反応を行なう傾向をもつ」（肥田野 1971: 340）という問題が指摘されるが、本調査においても、同性愛者を差別してはならないといった規範意識が回答結果を歪曲している可能性が考えられる。実際に、品川由佳・兒玉憲一(2005)は、男性臨床心理士に対する質問紙調査の結果から、クライアントが男性の同性愛者であった場合、男性の同性愛者であるときよりも回避的な態度を示すにもかかわらず、危険視項目では同性愛者クライアントへの得点が有意に低いという結果を示して、「同性愛者だからといって危険視してはいけない」という考えが働いていたのではないかと指摘しており、同性愛者に関する質問項目においては社会的望ましさの次元でバイアスが生じる可能性を示唆している。

本研究では、これまであまり議論されてこなかったセクハラを規定する具体的な要因について検討し、被害者が加害者の性的対象となりうるか否かはセクハラを規定する有力な要因にはなり得ないことを指摘することができた。一方で、これまで述べてきた社会的望ましさによるバイアスの問題や、調査においては回答者自身の性的指向に立ち入っていないという課題が残されており、今後の研究においては、これらのことを加味して調査していくことが求められるであろう。

文献

肥田野直, 1971, 「人格検査に及ぼす社会的望ましさの影響について」『現代心理学の課

題』東京大学出版会：340-347.

牟田和恵, 2004, 「「縮減」される意味と問題：セクシュアル・ハラスメントと法・制度」

『フォーラム現代社会学』3：29-41.

品川由佳・兒玉憲一, 2005, 「男性同性愛者に対する男性臨床心理士のクリニカル・バイアスの予備的研究」『日本エイズ学会誌』7：43-48.

和田実, 1996, 「青年の同性愛に対する態度：性および性役割同一性による差異」『社会心理学研究』12(1)：9-19.

女性加害者のセクシュアル・ハラスメントへの 不快感の分析

沼田 詩暖

1. Introduction

1.1 序論

セクシュアル・ハラスメントについての言及は法的・社会的な文脈でかなり昔から行われており、近年でも議論がなされ続けている分野である。とくに近年は#Metoo 運動の流れもあり、再び注目を集めている。

こうして度々議論の対象となっているセクシュアル・ハラスメントは、その名の通り性的な嫌がらせを指すが、男性から女性に行われるものだといったイメージが強い。しかし、京都大学のセクハラ定義にも「セクシュアル・ハラスメントの内容には、異性に対するものだけではなく、同性に対するものも含まれます。被害を受ける者の性的指向（人の恋愛・性愛がいずれの性別を対象とするか）や性自認（性別に関する自己意識）にかかわらず、相手を不快にさせる性的な言動であれば対象となり得ます。」と書かれるようになったように、「性的な」といったときには、女性から男性に行われること、あるいは女性から女性、男性から男性といった多様なありかたも想定されうるだろう。また、男女雇用機会均等法は平成 18 年に、男女双方における差別を禁止するように改正されている。ただ、このように男女ともにセクシュアル・ハラスメントの被害を受ける可能性があるにもかかわらず、そうした多様なありかたについての議論は少ない。特に女性から男性へのセクシュアル・ハラスメントは関連する適切な論文が見当たらなかった。

また、厚労省が令和 2 年度に発表した「職場のセクハラに関する実態調査」では、過去三年間にセクハラを受けたことのある女性の割合が 12.8%であるのに対し、男性の割合が 7.9%であるとされており、男性にも一定数の被害者はいると考えられる。しかし、この調査の報告書ではデータの分析自体は女性の受けたセクハラに対してのみ行われており、男性のデータについては採取しただけでありあまり触れられていない。こうした

扱われ方が示すように、男性がセクハラ被害者になるということに対する社会的なコンセンサスがなく、そういった分析もあまり行われていない（問題化されていない）ことにより、自分の受けたことがセクハラだと認識できない場合も多いのではないかと考えられる。こうした男性セクハラの問題には、2 パターンの問題が関係しているだろう。まず男性から男性へのセクハラは、ホモソーシャルな関係として看過されてしまいやすいのではないかと考えられる。もう一つ、女性から男性へのセクハラは、そもそもセクハラとして認知されないのではないかと考えられる。

今回は、後者の傾向について調べるため、授業で採取したデータを用いて女性加害者のセクシュアル・ハラスメントについての分析を行いたい。この調査では「あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか」といった質問の仕方をしており、また女性が加害者である場合のビネットが存在する。そのため、こうした女性が加害者であるビネットについて分析することで、「セクハラと感じるか」といった社会的なコンセンサスを超えた、女性の行うどの程度の行為が不快だと感じられるのか、またその傾向は男性と比べた時にどうであると言えるのかがわかるのではないかと考えられる。それによって、今まであまり手が付けられていなかった女性加害者のセクハラについての傾向がとらえられるのではないかと考えられる。

1.2 仮説

上記で述べたように、そもそも女性の行為がセクハラだという社会的な合意が形成されていないため、そうした行為がハラスメントであり、嫌がっていいといった考えがなされず、不快感は男性がした場合より低くなるのではないかと想定される。

2. Method

2.1 データをどのように処理したか（例えば、「とても不快」に5、「不快」に4といった数値を与えた、といったこと）

この分析では、本レポート集冒頭で紹介されているデータを利用している。データは6択の選択肢の中で回答されている不快感を「1 とても不快である」に6、「2 不快である」に5、「3 どちらかといえば不快である」に4、「4 どちらかといえば不快でない」に3、「5 不快ではない」に2、「1 まったく不快ではない」に1と、不快感が大きくなると数字が大きくなるように数値化処理を行った。

また、質問文から①立場の違い（加害者が「教授」か「先輩」か「友人」か）②加害行為の違い（「夕食に誘われたのを断ると無視」か「容姿をけなされる」か「異性の好みについて聞かれた」か）③オンライン・オフラインの違い（「LINE」（SNS アプリ）か「廊下」か）④親しさの違い（「親しい」か「あまり親しくない」か）⑤加害者の性別（「男性」か「女性」か）をそれぞれ変数として抽出して分析を行った。

3. Result

今回は R ソフトを用い、上記の変数を用いて回帰分析を行った。²

なお表中の*であるが、*** $p < 0.001$ 、** $p < 0.01$ 、* $p < 0.05$ を示している。

表 1 加害者の性別と回答者の性別についての回帰分析の結果

	Model1	Model2
切片	4.40 *** (0.21)	4.39 *** (0.29)
回答者の性別:女	-0.01 (0.21)	-0.04 (0.29)
回答者の性別:男	-0.25 (0.05)	-0.19 (0.42)
加害者の性別	0.17 *** (0.05)	0.19 (0.42)
回答者の性別(女):加害者の性別		0.07 (0.42)
回答者の性別(男):加害者の性別		-0.15 (0.43)
決定係数	0.01	0.01
調整済み決定係数	0.01	0.01
N	4039	4039

まずは加害者の性別と回答者の性別についての回帰分析を行った。結果を上表 1 に示す。加害者の性別は、男を 1、女を 0 としたダミー変数に変換されている。主効果に関しては、加害者の性別における効果が有意であるため、男性が加害者であるときの方が、女性が加害者の時に比べてより不快だと感じられていると言える。具体的には、男性が加害者の方が同じ質問に対して不快度が 0.17 高くなる。しかし回答者の性別の主

² 回答者の性別には「その他」の欄があったが、サンプル数が非常に少ないため回答者の性別による分析には「男性」と「女性」しか用いることができていない。

効果においては、男性が回答者の場合女性が回答者の場合と比較して 0.24 不快感が低くなるが有意ではないため、質問項目にあるセクハラ行為に対する不快感は回答者の性別によってさほど変わらないと言える。また、加害者の性別と回答者の性別の間の交互作用効果は有意ではないため、男性も女性も加害者の性別と不快感については同じような認識を持っていると考えられる。

表 2 立場による違いと加害者の性別の交互作用効果

	Model1	Model2
切片	4.62 *** (0.05)	4.62 *** (0.05)
加害者の立場(先輩)	-0.41 (0.06)	-0.38 (0.08)
加害者の立場(友人)	-0.59 (0.05)	-0.62 (0.08)
加害者の性別	0.17 *** (0.05)	0.17 (0.08)
加害者の立場(先輩):加害者の性別		-0.07 (0.12)
加害者の立場(友人):加害者の性別		0.07 (0.11)
決定係数	0.03	0.03
調整済み決定係数	0.03	0.03
N	4039	4039

表 2 より、立場による違いと性別の交互作用効果も有意ではないため、加害者が男性でも女性でも加害者の立場によって不快感はさほど変わらないと言える。

表3 行為による違いと加害者の性別の交互作用効果

	Model1	Model2
切片	3.08 *** (0.04)	2.91 *** (0.05)
加害行為(無視)	1.55 *** (0.05)	1.83 *** (0.07)
加害行為(容姿をけなす)	1.99 *** (0.05)	2.21 *** (0.06)
加害者の性別	0.20 *** (0.04)	0.55 *** (0.07)
加害行為(無視):加害者の性別		-0.58 *** (0.10)
加害行為(容姿をけなす):加害者の性別		-0.47 *** (0.09)
決定係数	0.33	0.33
調整済み決定係数	0.33	0.33
N	4039	4039

加害行為と加害者の性別の交互作用効果は有意である。

具体的には、無視の時には加害者の性別が男である効果は-0.03 であり、容姿をけなす場合には 0.08 であり、異性の好みを聞く時は 0.55 である。これより加害者が男性であることによる不快感の効果が一番小さくなるのは無視であると言える。

表4 オンライン・オフラインによる違いと加害者の性別の交互作用効果

	Model1	Model2
切片	4.36 *** (0.04)	4.34 *** (0.05)
加害が行われた場所	-0.14 ** (0.05)	-0.11 (0.07)
加害者の性別	0.17 *** (0.05)	0.21 ** (0.06)
加害が行われた場所:加害者の性別		-0.07 (0.10)
決定係数	0.01	0.01
調整済み決定係数	0.00	0.00
N	4039	4039

オンライン・オフラインと加害者の性別の交互作用効果を調べるにあたって、加害が廊下で行われた場合を1、LINE 上で行われた場合を0 とするダミー変数を用いている。表4 より、オンライン・オフラインによる違いと加害者の性別の交互作用効果は有意に

なっていない。これより加害者の性別によってオンライン・オフラインでの不快度の傾向は変化しないと言える。

表 5 親しさによる違いと性別の交互作用効果

	Model1	Model2
切片	4.20 *** (0.04)	4.23 *** (0.05)
加害者との親しさ	0.16 *** (0.05)	0.11 (0.06)
加害者の性別	0.16 *** (0.05)	0.11 (0.07)
加害者との親しさ: 加害者の性別		0.11 (0.10)
決定係数	0.01	0.01
調整済み決定係数	0.01	0.01
N	4039	4039

表 5 では親しくない場合を 1 とする変数を用いて親しさと性別の交互作用効果を検討しているが、有意になっていないためそうした効果はみられなかった。そのため加害者の性別によって親しい人と親しくない人のどちらに強い不快感を抱くかは変化しないと言える。

4. Discussion

4.1 結果のまとめ

以上より、仮説のとおり加害者の性別が男である場合の不快度は上がるが、回答者の性別によって不快度はさほど変化しなかったと言える。そして男女ともに加害者の性別によるセクハラ行為に対する不快感も変化しないと言える。また、加害者の立場、関係性、オンライン上での加害かオフラインでの加害かについての不快度は加害者の性別を問わなかったが、加害行為については無視が一番男女での不快度の効果が同じくらいになっていた。

4.2 考察と展望

以上の結果より、大学生においては男性の方がセクハラ行為に対する意識・感度が低い（不快だと感じない）というわけではないと言えるだろう。全体的に男性の不快度が

高くなる中で無視は女性と男性の効果が同じくらいになっていたのも注目すべき点である。無視されるというのは必ずしも性的な文脈でなくても腹の立つ行為であるため、女性の行為はセクシュアルハラスメント（性的な意図がある）ではなく、「人間として」不快感を感じる、といったようにとらえられているのではないかと考えられる。総括すると、女性の行為は（特に文面上では）「性的な意図がある」といった枠組みでとらえられにくいのではないかと考えられる。

こうしたことからセクハラと思わしき行為でも、女性が加害者の場合は一般的にそもそあまり不快だと感じられないと言える。しかし男性がそうした加害に対して敏感でないわけでもない。そのため、男性は何らかの加害があった場合に、それを性的関係より生じたものではなく単に嫌がらせを受けていると認識しているため、セクハラ認知度が低いのではないかと考えられる。こうしたことは、幼少期からの教育（女兒には不審者に気をつけろと言うが男児にはあまりそうしたリスクを考えないなど）が関連しているのではないかと考えられる。そのため男性側も性的な視線を向けられたら、それを不快だと感じてよいといった合意が社会に形成されれば、女性加害者のセクハラといったことも注目を集めるのではないかと考えられる。

今回は大学生のみを対象として調査を行ったが、実際に働くようになるとよりハラスメントの実感が高まるのではないかと考えられる。そのため勤労世代に広くこのような調査を行うと、より調査の精度が高まり、政策形成などにも活用できるものとなるだろう。

〈参考文献〉

- 厚生労働省, 2020, 『職場のセクハラにおける実態調査について 令和2年度報告書』, (2022 年 1 月取得, <https://www.mhlw.go.jp/content/11200000/000775817.pdf>).
- 京都大学, 2020, 『京都大学におけるハラスメントの防止と対応について』, (2022 年 1 月 15 日取得, https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/inline-files/2104-harassment-booklet_j-a109f699c0396b62af400994288d40b1.pdf).
- 厚生労働省, 2022, 『男女雇用機会均等法の変遷』, (2022 年 1 月 15 日取得, <https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11902000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Koyoukintouseisakuka/0000087683.pdf>).

第3章

私的親密度とハラスメントによる不快感

セクハラの実定のされやすさと場所の関係

足達 莉佳子

1. はじめに

セクシュアル・ハラスメント、セクハラとは、相手方の意に反する不快な性的な言動と定義される。(堀口 2003) しかしその被害は多様であり、また、「不快」であるか否かは基本的に受け手が不快に感じるかどうかによって判断されるものなので、明確で客観的な線引きは難しい。セクハラに対する法的定義や対策に関する研究は多く見られるが(山田 2003, 小野 1998)、為された言動に対する受け手側の「セクハラである」という評価はどのような判断軸によって決定されるのかについての研究は不十分である。個人の言動がセクハラであるか否か評価を受けるにあたり、その傾向に影響する要素を特定することで、言語化の難しい偏見や男女の不平等が解消される可能性があるだろう。

本稿では「セクハラ」と評価されやすさに影響する要素として、行為が行われる「場所」に注目した。そして、行為が行われる場所が、第3者の目に留まりやすい公共の場よりも、行為者と受け手の2人しかいない場であるほうが「不快である」、つまり「セクハラ」と認識されやすい、という仮説を立てた。多様な状況下の中で「公共の場(廊下)」で行われる場合、「二人の場(LINE)」で行われる場合のそれぞれの評価を比較することにした。

また、行為が行われる「場所」が「不快である」と認識されることには、「行為者と受け手の親しさ」も多少影響するのではないかと考えたので、「場所」と「行為者と受け手の親しさ」についての交互作用効果も分析、検討した。以下で、方法、結果を論じる。

2. 方法

上記の仮説を検証するため、以下の方法を用いた。

行為者の属性(ゼミの友人・ゼミの先輩・教授)、性別(男性・女性)、恋愛対象(異性

愛者・同性愛者)、受け手との親密度(親しい・あまり親しくない)、行為の場所(廊下・LINE)、被害内容(異性の好みを聞く・容姿をけなす・食事を断られ無視する)をそれぞれ変数とした。

京都大学の学部生・院生を対象にアンケートを配布し、個々の質問上の多様な状況に対する評価を、「1、とても不快／2、不快／3、どちらかといえば不快／4、どちらかといえば不快ではない／5、不快ではない／6、まったく不快ではない」の6段階で回答させた。

各質問への回答について、「とても不快である」に5、「不快である」には4、「どちらかといえば不快」には3、「どちらかといえば不快ではない」には2、「不快ではない」には1、「まったく不快ではない」0とそれぞれ数値を与えた。

分析の手順としては、アンケートの中で、「廊下で」か「LINEで」かで、公共の場で行われた場合、行為者と受け手の二人の場で行われた場合に分類し、比較を行った。そしてその結果の平均値に有意な差が見られるかを検証するため、平均値の差の検定を行った。次に、交互作用効果があるかどうかを調べるため、「場所」と「行為者と受け手の親しさ」において、回帰分析を行った。

3. 結果

今回の調査において、「公共の場」か「二人だけの空間」、つまり廊下の場合とLINEの場合のそれぞれについて、下の図1を用いて平均値の比較を行った。

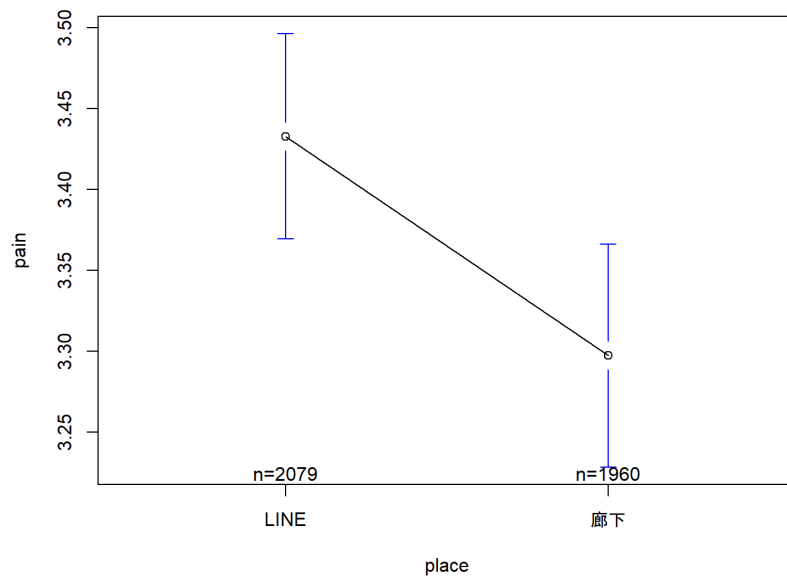


図 4 LINE と廊下での不快度の平均値の比較

概観すると、行為が LINE 上で行われた場合の方が、廊下で行われた場合よりも不快度の平均値が高い。

次に、これら「場所」による平均値の差の検定を行った結果は以下のようになった。

$t = 2.8344$, $p\text{-value} = 0.004614$

P 値=0.004614 であるので、1%水準では有意差があると言える。行為が LINE 上で行われる場合の方が、廊下で行われる場合よりも「不快である」と認識がされやすいと言える。つまり、行為が行為者と受け手の二人だけの場で行われる方が、公共の場で行われる場合に比べると、「不快である」、「セクハラである」と認識されやすい。

次に、「場所」と「行為者と受け手の親しさ」についての回帰分析の結果は下の表 1 のようになった。

表 1 「場所」と「行為者と受け手の親しさ」の回帰分析

	Model 1	Model 2
(Intercept)	3.34 *** (0.04)	3.54 *** (0.05)
place 廊下	-0.12 * (0.05)	-0.49 *** (0.07)

closeness 親しくない	0.15 **	-0.19 **
	(0.05)	(0.07)
place 廊下:closeness 親しくない		0.69 ***
		(0.10)

R ²	0.00	0.02
Adj. R ²	0.00	0.02
Num. obs.	4039	4039
=====		
*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05		

Model 1 は、「場所」と「親しさ」の主効果のみのモデル、Model 2 は「場所」と「親しさ」の主効果と交互作用効果を加えたモデルである。表 1 から、「場所」と「行為者と受け手の親しさ」の交互作用効果は有意であるとわかる。また、Model 1 と Model 2 を比較すると、調整済み決定係数が 0.00 から 0.02 に上がっているため、モデル 2 の方がフィッティングが良いと考えられる。

親しくない時、場所が廊下であることの効果は、表 1 より $0.69 - 0.49 = 0.2$ であり、親しい時の廊下の効果は -0.49 である。

行為者と受け手が親しいときのほうが場所の効果が大きく、不快感に差がつきやすい。また、行為が廊下で行われた場合の方が、LINE 上で行われた場合に比べると、不快感は下がる傾向にある。

行為者と受け手が親しくないときの方が場所の効果は小さく、不快感に差が生じにくい。また、行為が廊下で行われた場合の方が、LINE 上で行われた場合に比べると、不快感は上がる傾向にある。

4. 考察

平均値の比較の結果より、仮説の通り、行為が行為者と受け手の二人だけの場で行われる方が、公共の場で行われる場合よりも「不快」と認識されやすく、つまり「セクハラ」と認識されやすいことが分かった。しかしその一方で、行為が行われる「場所」と「行為者と受け手の親しさ」には不快感に対して交互作用効果が見られ、行為者と受け

手が親しい方が「場所」の効果は大きくなることが分かった。また、行為者と受け手が親しいとき、行為が公共の場で行われる方が、二人だけの場での場合に比べ不快感が下がる傾向にあると分かった。また、反対に、行為者と受け手が親しくないとき、行為が公共の場で行われる方が、二人だけの場での場合に比べ不快感が上がる傾向にあると分かった。

「行為者と受け手の親しさ」によって、「場所」の効果の大小が変化するという結果について、行為者と受け手が親しい方が、公共の場と二人だけの場において、行為者と受け手の振る舞い方や関わり方が変わりやすくなることが原因と考えられる。親しい付き合いの両者には、冗談を含むような軽く砕けた関係性や振る舞い方や、真面目で重苦しい振る舞い方など、関わり方の幅が広くなりやすいであろう。反対に、行為者と受け手が親しくないとき、行為者と受け手の両者の関わり方は、公共の場であろうと二人だけの場であろうと変化に乏しくなりやすい。

次に、「行為者と受け手の親しさ」によって「場所」の効果が異なり、反対となることについても、二人が親密であるときに生じる、軽く砕けた気を使わない関係性が存在しているか否かによると考えられる。また、その気を使わない関係性や雰囲気は、対面の時に感じやすいまたは生じやすいものであるもので、今回の調査では LINE の場合と廊下の場合で大きく異なったと考えられる。

今回の調査では、「セクハラ」の認定について、行為者と受け手の二人だけの場の方がされやすいことを示した。「セクハラ」の対策には、こうした二人だけの場を減らすような制度や環境が形成されることが有効であると示すことができた。一方で、行為者が受け手に対して行う言動の「セクハラである」という認識のされやすさを、LINE の場合と廊下での場合を比較し、「公共の場」であるか「二人だけの場」であるかで分類した。しかし、LINE と廊下の比較だけで「場が公共的であるか否か」の効果を分析するのは限度があり、LINE と廊下の例では、行為者と受け手が対面しているか否かの分析の視点も必要であると感じた。「場」の「セクハラ」の認定に対する効果についての研究では、より多くの分析の視点が必要であり、より多くの「場」についての比較検討が重要になると考えた。今後の社会学研究のさらなる進展に繋げたい。

文献

堀口悦子, 2003, 「セクシュアルハラスメントについて」『法哲学年報』2003:32-42.

山田秀雄, 2003, 『男は女のなぜそれをセクハラと呼ぶか』 角川書店.

小野和子, 1998, 『京大・矢野事件：キャンパス・セクハラ裁判の問うたもの』 インパクト出版会.

加害者と被害者の親密度が ハラスメントによる不快感に及ぼす影響

田中 大哉

1. はじめに

近年、「～ハラスメント」という言葉を耳にする機会が増えてきた。日本においては1980年代ごろから「セクシャルハラスメント」というものが社会一般で認識されるようになってきた。これは主に職場において男性上司から女性部下に対して行われる不快な性的言動のことを指している。1989年には「セクシャルハラスメント」は新語・流行語大賞を受賞し、90年代にはセクハラは立派な違法行為として様々な規制が設けられるようになっていった。そしてさらに「パワハラ」、「マタハラ」など新しいハラスメントも生み出されていった。ここで問題なのはセクハラという言葉が認識されるようになってから大分時間は経ったものの、依然としてどこからがセクハラであるのかという明確な基準は存在しないことだ。というのもセクハラというものがあまりにも被害者の主観によるものだからだ。「被害者が不快と感じたのであればそれはハラスメントである」という認識が現在の日本における一般的な考え方のように感じる。

本稿では、上でも述べたように明確な基準がないと思われるセクハラというものに対して、どのような関係性でどんな行為をしたら相手はどのくらい不快に感じるのかについてある程度の指針を与えるべく取り組んでいく。

私は、「被害者がどのくらい不快に感じるかどうかは二人の親密度に大きく左右される」という仮説をたてた。その理由としては、私自身普段の生活の中で人と会話をする際はその人との関係性に応じて発言の内容を変えているため、ほかにも関係性によって発言内容を意識的に変えている人は多く存在すると思ったからだ。なぜ発言内容に気を付けているかというと、同じ内容の発言であっても親しい間柄では冗談として流されるものも、そうでない間柄の場合には不快に感じさせてしまうことがあると思っているからだ。なのでセクハラと感じられる基準も親しさによって変わってくると思ったのだ。さらに、私は男女で親しいと感じる基準が異なるのではと考えたため、回答者の性別にも着目していく。というのも一般的に女の子は本当に仲の良い数人グループで行動する

ことが多いと感じるため、男の子に比べて親しいと判断する範囲が狭くなると思ったからだ。

2. 方法

「被害者と【親しいor あまり親しくない】AがBをした」という文章について、自分が被害者の立場であった場合にどの程度不快に感じるかどうかを6段階（とても不快である、不快である、どちらかといえば不快、どちらかといえば不快ではない、不快ではない、まっ

たく不快ではない）で回答してもらい、それらを不快度が高い順に5点、4点、3点、2点、1点、0点と点数化し、その平均値の比較やt検定を行った。また、回答者の性別によって分類し同じ比較を行った。

3. 結果

回答者の性別にかかわらず被害者と加害者が親しい場合とあまり親しくない場合の不快度の比較を行った結果が以下の表1と図1である。

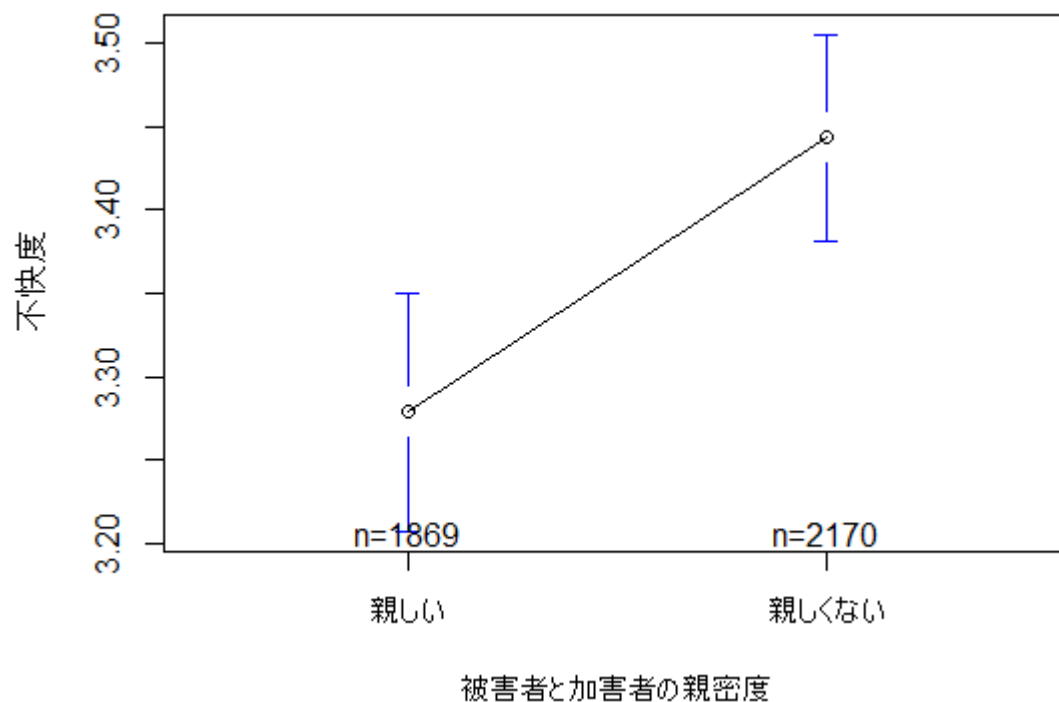


図1 親密度によって分類したときの平均値

図1より不快度と親密度には相関関係があると言える。また表1のt値の絶対値が約3.4であり、p値が限りなく0に近いことから親しい場合と親しくない場合には有意差があると言える。つまり、同じ行為をするにしても相手がどの程度不快に感じるかどうかは二人の間柄に左右されると言えるだろう。

次に、同じ比較をさらに回答者の性別によって分類して行った。回答者が男の場合が以下の表2と図2で、回答者が女な場合が以下の表3と図3である。

表1 親密度によって分類した場合のt検定の結果

親しい間柄の場合の不快度の平均値	3.278759
親しくない間柄の場合の不快度の平均値	3.443318
t 値	-3.4245
p 値	0.0006225

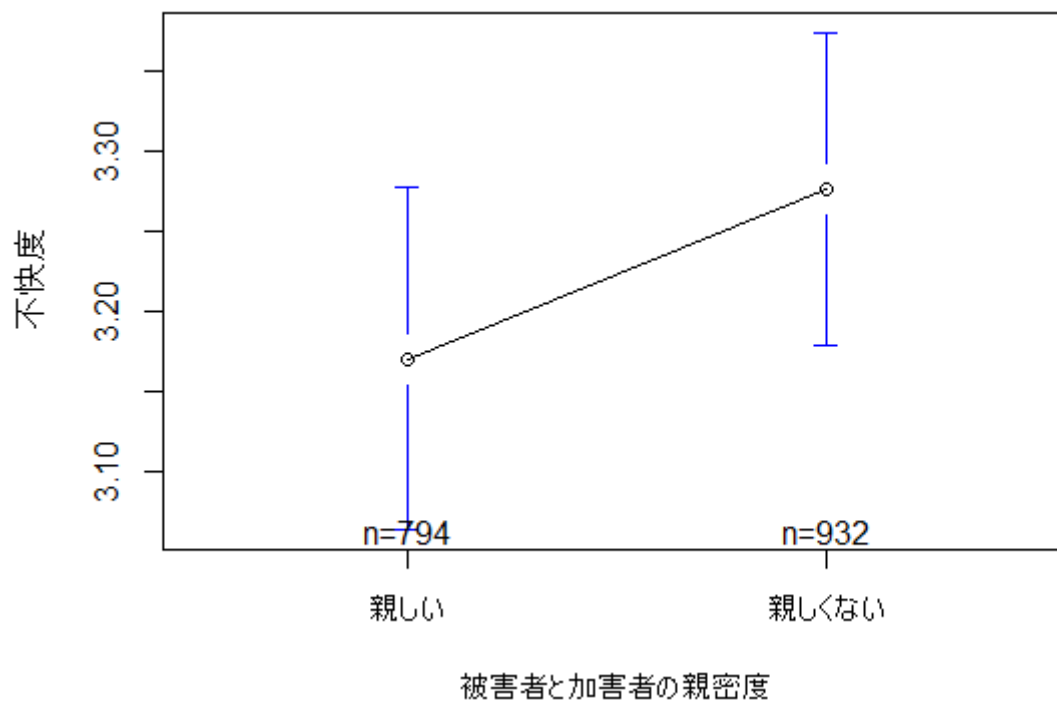


図2 親密度によって分類したときの平均値 (男)

表2 親密度によって分類した場合の t 検定の結果 (男)

親しい間柄の場合の不快度の平均値	3.170025
親しくない間柄の場合の不快度の平均値	3.275751
t 値	-1.4372
p 値	0.1509

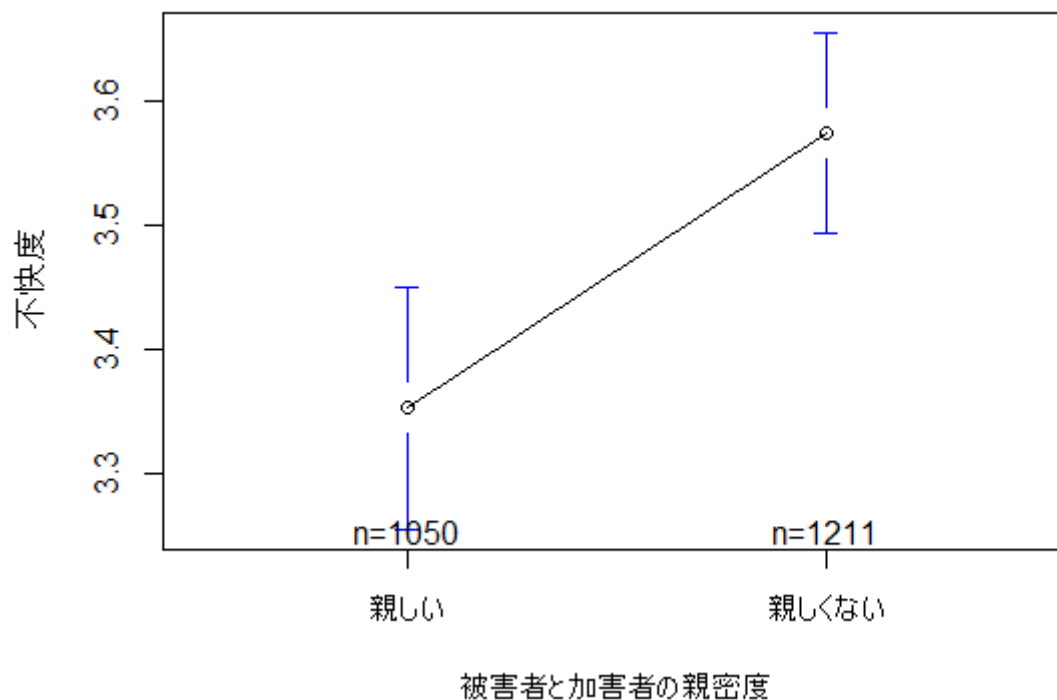


図3 親密度によって分類したときの平均値（女）

表3 親密度によって分類した場合の t 検定の結果（女）

親しい間柄の場合の不快度の平均値	3.353333
親しくない間柄の場合の不快度の平均値	3.573906
t 値	-3.4399
p 値	0.0005931

図2より回答者を男だけに絞った場合は、回答者を性別で絞らなかった場合に比べて親密度による不快度に差は大きく出なかった。さらに男に限って言えばそもそもの不快度が低い傾向が見て取れる。このことは表2からもわかる。表1と表2の平均値を比べると表2の方が全体的に0.15～0.2低い。さらに表2のt値とp値をみると親密度による有意差はないという結果になった。反対に図3と表3をみるとわかるように回答者を女だけに絞った場合は親密度によって不快度に顕著な差が出た。t値とp値をみてもこれは有意差があると判断できる。さらに回答者が男の時に比べて回答者が女の時は全体的に不快度が高いという結果になった。

4. 考察

まず、私のたてた仮説である「被害者がどのぐらい不快に感じるかどうかは二人の親密度に大きく左右される」というものに対しては「概ね正しい」と言える結果が得られた。ただ今回の質問文には「～され、それを断ったら無視されるようになった」という類のものもいくつか見られ、それに関しては親密度による差があまりなかったように感じる（むしろ親しい人に無視される方が不快だという意見も耳にした）。そのため、セクハラ発言や行動のみに絞って調査してみた場合、今回の結果よりももっと大きな有意差が両者には現れるのではないだろうかと思う。

そして今回の調査で面白い結果となったのは回答者を男女で分類した場合だ。女性の方が親しいか親しくないかの区別がはっきりしているとは思っていたものの男女でこんなに顕著に違いがでるとは思っていなかった。やはり女性は男性に比べて相手との親密度をより気にしているのではないだろうか。また、はじめににも書いたように女性は本当に仲の良い人のみを親しい人と捉える傾向が強いと考えられるため、男性に比べ両者に大きな差が出たとも考えられる。

今回の調査から言えることは、結局のところセクハラの基準というものは当人同士の関係性によって変動していくものであると考えるべきだということだ。つまり、これを言ったらだめやこんなことをしたらだめといった線引きを作ることは非常に困難であるのだ。自分がセクハラの加害者にならないためには、日々相手との関係性を意識しながらコミュニケーションをとっていくことが非常に大切であるように感じる。今後の調査の課題としては、いろいろな関係性に着目して個々に同じような調査を実行していき、今回の調査ではわからなかった関係性に応じたセクハラのある程度の線引きを明確にしていくことだろう。

【参考文献】

水谷英夫, 2014, 『予防・解決 職場のパワハラセクハラメンタルヘルスマタハラ・SOGI ハラ・LGBT 雇用上の責任と防止措置義務・被害対応と対処法ー』日本加除出版株式会社.

当事者同士の関係性による セクハラ認定のされやすさの違い

奈良 美佳

1. はじめに

ハラスメントは昨今話題になる大きな社会問題である。その中の1つであるセクハラが問題視され、セクハラは人権問題であるという政府の啓発が行われた結果、平成 19 年から平成 26 年のうちにセクハラの年間相談件数は約 2 割減少した。(男女共同参画局 2015) しかしセクハラに明確な基準がないことがセクハラ問題に対処する上での難点である。そこで本レポートでは大学生・大学院生を対象にセクハラに関する意識調査を行い、得られた 311 個の回答をもとに、当事者同士の親密さに注目して当事者同士の関係性によるセクハラ認定のされやすさの違いを明確にしたい。

一般的に親密でない関係の方が、親しい関係よりもプライベートな領域まで踏み込まないため、不快感を感じる度合いは高くなり、セクハラ認定がなされやすいことが予想される。したがって以下 2 では、同じ行為を親しい・親しくない関係性の人からされた場合の不快感の違いを検討していく。

2. データと方法

2.1 使用するデータ

大学生・大学院生を対象にアンケートに回答してもらい、得られた 311 個のデータをもとに分析する。アンケートの質問項目は以下の通り。

1. 親しいゼミの先輩(女で同性愛者)から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた
2. 親しいゼミの友人(女でストレート)から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが断ると無視されるようになった
3. あまり親しくないゼミの先輩(男でストレート)から LINE で異性の好みについて聞かれた
4. 親しいゼミの友人(男で同性愛者)から LINE で容姿をけなされた

5. あまり親しくないゼミの友人(女でストレート)から LINE で異性の好みについて聞かれた
6. 親しいゼミの先輩(男で同性愛者)から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた
7. 親しいゼミの教授(女で同性愛者)から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた
8. あまり親しくないゼミの先輩(女で同性愛者)から LINE で異性の好みについて聞かれた
9. あまり親しくないゼミの友人(男で同性愛者)から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが断ると無視されるようになった
10. あまり親しくないゼミの先輩(女でストレート)から LINE で夕食に誘われたが断ると無視されるようになった
11. あまり親しくないゼミの教授(男でストレート)から LINE で容姿をけなされた
12. あまり親しくないゼミの先輩(男でストレート)から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが断ると無視されるようになった
13. あまり親しくないゼミの教授(女でストレート)から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた

以上 13 項目の質問に対し感じた不快感を「とても不快である」、「不快である」、「どちらかといえば不快」、「どちらかといえば不快ではない」、「不快ではない」、「まったく不快ではない」の 6 段階で評価してもらった。

2.2 分析方法

まず得られた回答を「とても不快である」5、「不快である」4、「どちらかといえば不快」3、「どちらかといえば不快ではない」2、「不快ではない」1、「まったく不快ではない」0、というように点数化した。

次に質問内容の各要素(行為者の属性や行為が行われた状況など)ごとに変数を作り、上の不快感の指数ももとにして、親しい・親しくない関係性の人から行為を受けたときの不快感の平均値を計算し(表 1) グラフにした。(図 1)

最後に二つの平均値の差が意味のあるものなのかを検討するために t 検定を行った。

(表 2)

3. 分析結果

まず、関係性による不快感の平均値が表 1 である。

表 7

関係性	不快感の平均値
親しい	3.278759
親しくない	3.443318

また、この数値をもとにグラフを作成した。(図 1) 白抜き丸が不快感の平均値を示し、青い線が平均値の 95%信頼区間を示す。下の方にある n はそれぞれに該当するケース数を示している。これらを見ると、親しくない人からの行為は親しい人からの行為に比べて不快感が高いことが読み取れる。また、ここで得られた数値はどちらも「不快である」と「どちらかといえば不快」の間である。

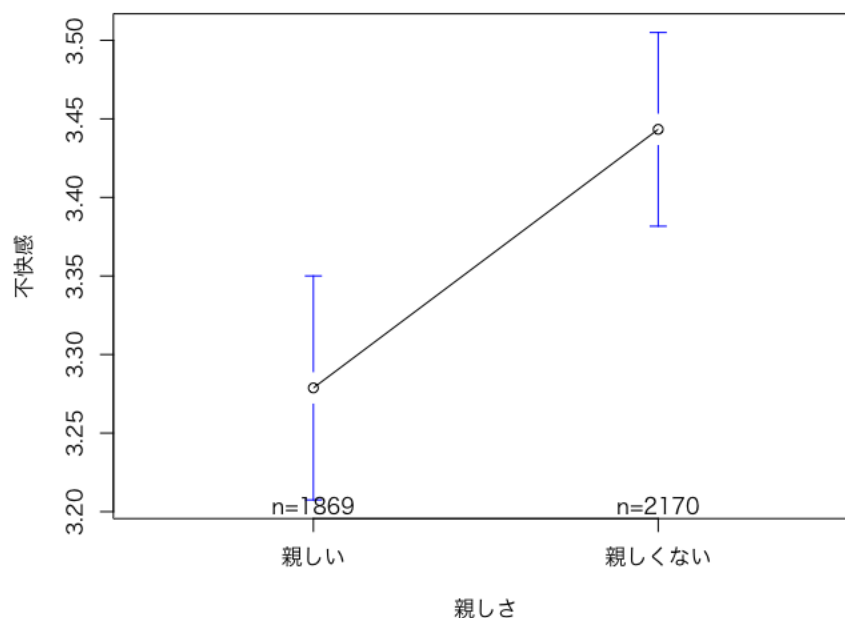


図 5

続いて平均値の差の検定であるが、t 検定を行うと t 値、p 値は共に表 2 のようになった。この数値より、親しくない人からの行為の方が、親しい人からの行為に比べ有意

に平均不快感が高いといえる。

表 8

t 値	p 値
-3.4245	0.0006225

4. 考察

本レポートでは13個のシーン別に、回答者がどれくらいの不快感を感じるかを調査した。仮説では、同じ行為であっても親しくない人からの行為の方が、親しい人からの行為に平均不快感が高く、セクハラ認定がなされやすいと想定していた。実際分析をすると同じ結果が得られたので、仮説は合理性があると言えよう。この理由としては、仮説の通り当事者同士の関係性が近いとお互いの気を許す範囲も広がることが考えられる。

今回は当事者同士の関係性によるセクハラ認定のされやすさの違いを明確にしたが、今後の課題としては、今回分析しなかった行為の内容や場面も含めて検討することで曖昧なセクハラ行為の境界線をはっきりさせることである。

【参考文献】

内閣府男女共同参画局，2015，『男女共同参画白書 平成27年版』。

親しさの程度がセクハラの不快感に及ぼす影響

出口 桐圭

1. はじめに

1.1 背景

日本では、平成元年に福岡で初めて裁判が行われたのを機に、セクシュアル・ハラスメント（以下「セクハラ」という。）という言葉が広く社会に浸透した。それから 30 年以上経った今でも、セクハラ被害は後を絶たず、問題の根本的な解決には至っていないのが現状である。厚生労働省のデータによれば、男女雇用機会均等法に関して雇用環境・均等部で取り扱った相談（令和元年度）は、「セクシュアル・ハラスメント」が最も多く 7,323 件（37.4%）となっている。しかし、その問題が広く認知されたことで、現在では社会全般だけでなく、個々の様々な場面に応じたセクハラ対策がとられるようになったのも事実である。

また、以前に比べて制度が整った分、被害者が行為者を裁判で訴えるケースも増えており、被害者・行為者双方にとって大きな損失を生む問題になっている。そのようなことにならないためにも、防止対策が特に重要であり、そのための具体策を考える必要がある。

1.2 セクハラに関する先行研究

しかし、実際のところ、セクハラに明確な定義がないことが、予防を困難にしていると考えられる。セクハラは、必ずしも性的言動であるとは限らないからだ。

例えば、牟田（2004）では、セクハラとは、一過性の性的な行為や言動だけでなく、それに付随して生じてくる学習や就労の環境・条件に影響する、継続的なプロセスとして捉えていかなければならないと述べている。また、成瀬・川畑（2016）では、セクハラ概念が統一されていなければ予防策を講じるための実態把握が難しくなり、日本はその概念が曖昧であると述べている。

1.3 本研究の意義と仮説

したがって、セクハラにつながる不快感の要因を明らかにすることで、予防策が講じ

やすくなると考える。不快感には個人差があり、また、行為者側がたとえ親しさを表すつもりでも、その言動が本人の意図に関係なく、相手を不快な思いにさせる場合がある。

そこで本稿では、特に相手との親しさの程度がセクハラの不快感に及ぼす影響に着目する。セクハラと見なされやすいのは、相手が本来そのような言動をするほど、自分と親しい間柄ではない場合だと考えるからだ。アンケートでの「不快感」が直接的にセクハラの不快感には結びつかないとしても、例えば異性の好みを聞かれた相手が親しい間柄なら、そうでない場合に比べて、「セクハラ」として捉える可能性は低くなり、それにとまって不快感も低くなるのではないかと考えた。

3. 分析枠組み、分析方法（データ）

本稿の分析では、以下の質問項目に対する回答を使用した。また、これらの質問に対する回答に、とても不快である―1、不快である―2、どちらかといえば不快である―3、どちらかといえば不快ではない―4、不快ではない―5、全く不快ではない―6、までの6点尺度を割り振った。

表1 分析に使用する質問項目

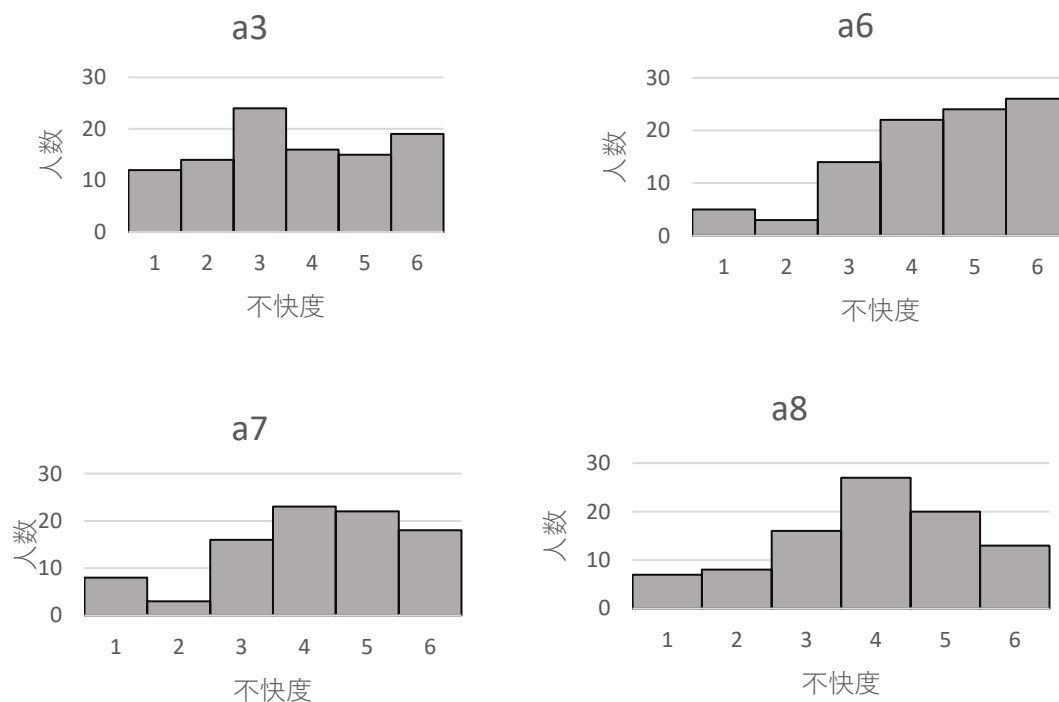
a3	あまり親しくないゼミの先輩（男でストレート）から LINE で異性の好みについて聞かれた。
a6	親しいゼミの先輩（男で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。
a7	親しいゼミの教授（女で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。
a8	あまり親しくないゼミの先輩（女で同性愛者）から LINE で異性の好みについて聞かれた。
b8	あまり親しくないゼミの教授（女でストレート）から LINE で異性の好みについて聞かれた。
b10	親しいゼミの先輩（女でストレート）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた
c2	親しいゼミの教授（男でストレート）から LINE で異性の好みについて聞かれた。

c12 あまり親しくないゼミの教授（男でストレート）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。

セクハラと考えられる言動として、ここでは「異性の好みを聞かれた」という環境型ハラスメントに絞った。対価型ハラスメントと「容姿をけなされる」ことはそれ自体不快感を与えやすいといえるが、異性の好みについて聞かれることは、言動だけでは明らかに不快感を与えるとは言えず、感じ方が相手によって最も左右されやすいと考えたからだ。また、相手は被害者と立場の違い、「先輩」と「教授」の項目を選んでいる。

5. 分析結果

まずは、各シチュエーションにおける不快度の分布を概観する。



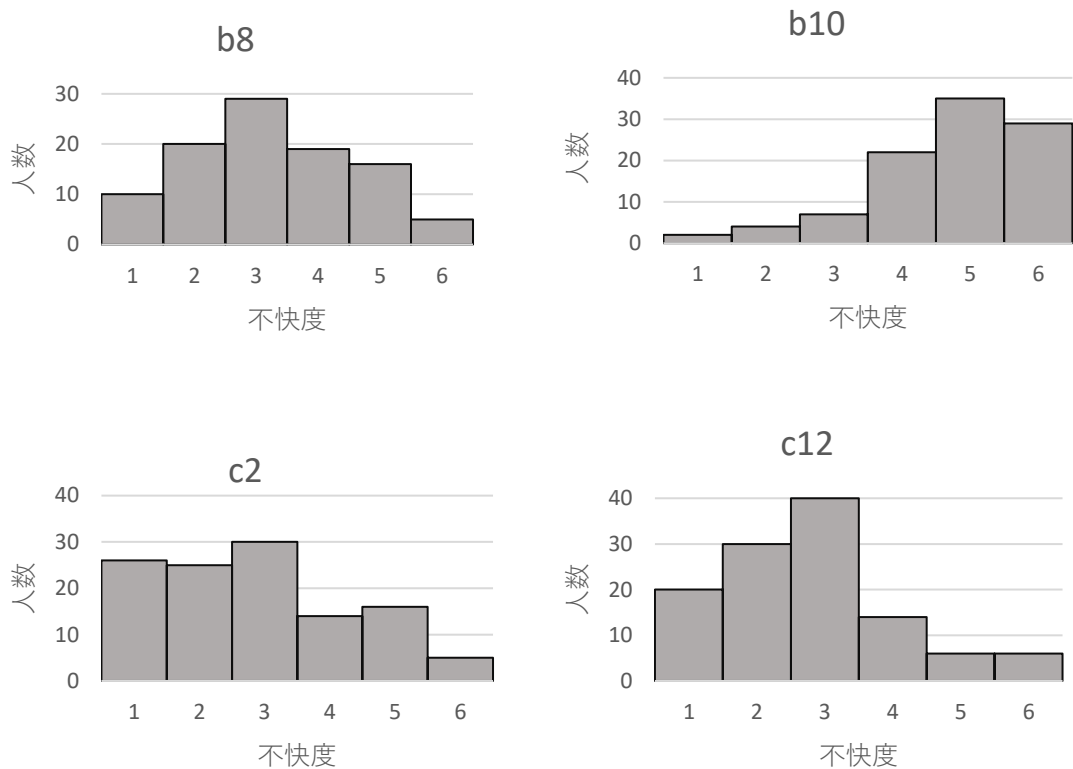


図1 セクハラ不快度のヒストグラム

図1より、親しい先輩が相手の場合（a6, b10）は、不快度が低いといえる。また、b8とc12は、どちらも相手は「親しくない教授」だが、b8の方が、不快感が低いと答えた人の割合が高い。一方で、a7とc2、c12に関しては、不快と感じる人の割合が高い。

次に、各シチュエーションの平均不快度を計算し、棒グラフに表したのが図2である。

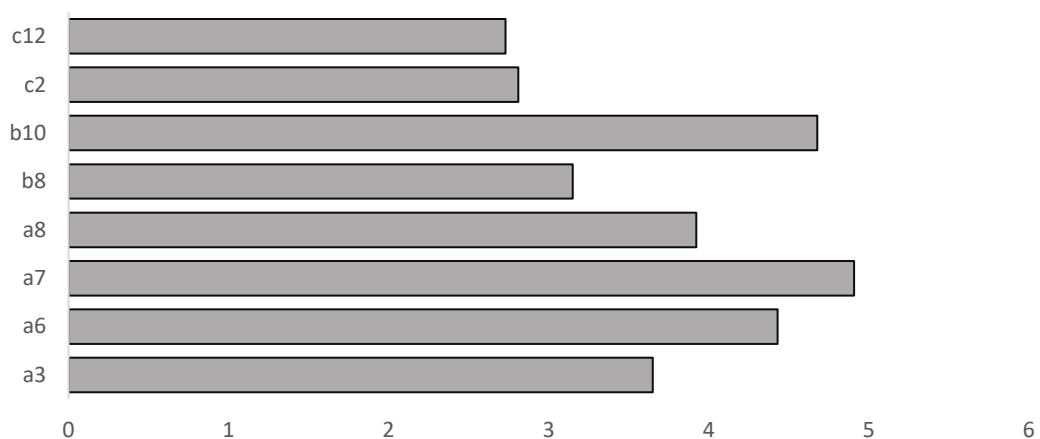


図2 各シチュエーションの平均不快度

図2を見ると、問b10、a7、a6は数値が若干他より高く、つまり平均不快度は低い。その中でも最も不快度が低いのはa7のシチュエーションである。一方で、c12、c2、b8は数値が他よりも低く、つまり平均不快度が高いといえる。最も不快度が高いのは、c12の場合である。平均不快度の低い順に並べると、親しい教授<親しい先輩<親しい先輩<親しくない先輩<親しくない先輩<親しくない教授<親しい教授<親しくない教授、となった。

6. 議論

平均不快度のグラフからは、おおむね親しい相手のほうが不快度は低く、また、社会的立場の距離が開くほど、不快度が高くなるといえ、仮説はある程度支持されたといえる。しかし、平均不快度を確かめただけでは、各シチュエーションにおける他の設定（性別、オンライン、性的指向など）の影響の度を測れないため、結論としては不十分であると言わざるを得ない。

しかしながら、a7が平均不快度が最も低かったことから、たとえ相手が教授であっても、何らかの不快感を感じさせない関わり方ができることは確かだといえる。

また、興味深かったのは、ヒストグラムの形が二峰形になるものが案外少なかったことだ。不快感個人の性格や性別の違いによって、大きく分かれるのではと予想していたが、この結果からは、不快感にはある程度すべての人に共通の傾向があると考えられる。

2 つ目は、b 8 と c 12 の不快度の違いである。どちらも相手は「親しくない教授」であるにもかかわらず、c 12 は不快と答えた人の割合がかなり高いのに対し、b 8 は不快な人とそうでない人に分かれた。この二つのシチュエーションの違いは、b 8 「女でストレート」・ c 12 「男でストレート」と、b 8 「LINE」・ c 12 「廊下」であった。従って、回答者と相手の性別によって不快感は左右される、オンラインでのコミュニケーションの方が不快感を与えない、などの仮説が考えられる。

本稿では、親しさの程度がセクハラの不快感に及ぼす影響について考察した。その結果、少なくとも相手との親しさは不快感を測るうえで重要な基準となっている事が確認されたといえるだろう。しかし、先ほど挙げたような未解決の部分も多くある。そのため、本検討をさらに深めるためには、「親しさ」と他の要因とを比較し、どちらがより不快度に影響を与えているのかを明らかにすることや、親しさとどの要素がそろえば、不快感が低くなるかを考察することも興味深いと思われる。

[参考文献]

- 内閣府男女共同参画局, 2021, 『セクシュアル・ハラスメント対策の強化について-メディア・行政間での事案発生を受けての緊急対策-』, (2021 年 12 月 25 日取得, https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/index.html#kadai).
- 厚生労働省, 2019, 『都道府県労働局雇用環境・均等部(室)での法施行状況 -男女雇用機会均等法、パートタイム労働法、育児・介護休業法に関する相談、是正指導、紛争解決の援助の状況について-』, (2022 年 1 月 5 日取得, <https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000645828.pdf>).
- 牟田和恵, 2004, 「「縮減」される意味と問題 : セクシュアル・ハラスメントと法・制度」『フォーラム現代社会学』3(0): 29-41.
- 成瀬麻夕・川畑智子, 2016, 「日本の大学におけるハラスメント関連資料から見えた特徴」『現代社会学研究』29: 43-61.

セクハラ認定に関わる人間関係と行為場所の 相互作用

横澤 翠子

1. はじめに

パワハラ、オワハラ、セクハラ。これらの言葉が共通して意味するハラスメントという言葉は、優越的な地位にある者がその力を利用して立場の弱いものに対して暴力や嫌がらせを行う行為を指す。職場や学校など、上下関係と切り離せない組織においては、これらは最も身近な人権問題の一つである。中でも性的なハラスメントを意味するセクハラは、政府による男女雇用機会均等法や、男女共同参画社会基本計画に基づきその予防と根絶が法整備の強化をもって推進されているが、被害は依然として多い。芸能人やアスリート、政治家のセクハラ言動は再三メディアで取り上げられ、SDGs の高まりにも助長されて重要な社会課題として世間の注目を集め続けている。

セクハラの予防・根絶が難しいことの背景には、特定の行為を「セクハラだ」「不快だ」と感じる程度は個人ごとに異なり、加害者と被害者の認識がずれ得ることがある。「不快」であるか否かは、基本的には受け手が判断することであるため、明確な定義を欠いたセクハラを根絶するのは難しい。

例えば、体を触るといったようなあからさまな接触行為であれば大多数が「セクハラだ」と認識するかもしれないが、食事に誘う、交際相手がいるか尋ねる、といった行為であれば、不快に思わない受け手も存在することが予想される。

また、行為自体の他に、加害者と被害者の権力差も不快と感じさせる要因となろう。加害者が被害者に及ぼすことのできる社会的影響が強いほど、被害者はその行為を、自らが無抵抗であることを前提としており、セクハラだと感じやすいように思われる。しかし、一方で太郎丸（2020）によれば、権力に差がある大学の教授と准教授では新聞記事の掲載数を比較したところセクハラの加害者になりやすさは明確な差はなく、年齢別の傾向もあまりみられなかったという。したがって権力差に限らず両者の親しさなど主観的な要素も加味する必要があるかもしれない。

さらには行為がどのような場所で行われたか、二人きりの空間なのか、大勢がいる公共の場なのか、といった物理的要因も考えうる。例えば、他に誰もいない場所で異性の好みを聞かれる場合と、複数人の会食の場で異性の好みを聞かれるのでは、同じ内容で

も前者の方がセクハラだとみなされやすいのではないかと推察される。しかし、この点については両者が日常的にどのような場面で接するかにより、当人の感じ方が異なるため、分類が難しい。したがって、加害者と被害者の関係性と場所要因は複合的な考察が必要である。

以上から、受け手が特定の行為を「セクハラだ」と感じる背景には様々な要因が複合的に絡んでいると考えられるが、中でも、行為が行われる場所、そして加害者と受け手の関係性の両方に注目すべきであると考ええる。その理由は、加害者側に悪意がなく、受け手の勘違いにより告発されるセクハラを減らすことに役立つからである。そのような場合お互いの言い分が食い違うため解決が困難な事案に発展することが予想でき、セクハラを社会から根絶することをいっそう難しくするだろう。しかし加害者となりうる立場の者が、受け手との関係性に基づいて発言を行う場所に気をつけることができれば、受け手が勘違いすることは減ると考えられる。

翻って、具体的には、特定の行為が受け手にセクハラとみなされるかどうかは、行為の種類以上に、行為者と受け手がどれほど親しい間柄にあるかと、その行為が行われた場所によるのではないかと予想する。

そこで、以下の二つの仮説を元に、セクハラだとみなされやすい行為を分析する。

- ① 「加害者が親しい相手であれば、行為の種類にかかわらず、それが対面で行われる限りにおいて、セクハラだとみなされにくい。」
- ② 「加害者が親しくない相手である場合には、行為の種類にも、場所にもかかわらず、セクハラだとみなされやすい。」

本稿の構成としては、第二節で分析の方針と使用するデータを記し、第三節で分析結果を述べたのち、第四節で結論を考察する。

2. 分析方法

<データ>

分析に使用するデータは、2021 年度社会学実習の授業で実施した「セクハラに関するアンケート A・B・C」である。データの概要については本レポートの与件外であるため割愛する。

このアンケートはビネットによる要因配置型アンケートであり、各ビネットは、加害者の特性・行為の内容・場所などの複数の独立変数を含み、回答者はそれぞれのビネッ

トに対して、不快度を回答する、という形式をとった。

検証にあたり、不快度をセクハラとみなされるか否かを示す従属変数としてもちいた。不快度を示すダミー変数 pain を用意し、元々の表記の「とても不快である」、「不快である」、「どちらかといえば不快」、「どちらかといえば不快ではない」、「不快ではない」、「まったく不快ではない」、をそれぞれ 5～0 とした。

さらにその説明変数として、加害者と受け手の関係性、行為の種類、行為の場所の三つの独立変数を抽出した。

まず、関係性を示すダミー変数 closeness を用意し、「親しい」という言葉が出てくるビネットに「親しい」を対応させ、それ以外のビネットに「親しくない」を対応させた。

次に、セクハラ行為の例としては「無視される」、「容姿を貶される」、「異性の好みを聞かれる」の三種類のうちどれか一つが各ビネットに登場するという形式だったため、ダミー変数 damage を用意して、ビネットに表記される行為に応じて、「無視される」、「容姿を貶される」、「異性の好みを聞かれる」とした。

最後に、行為が行われた場所については、ビネット中には対面をしめす「廊下」と、非対面を示す「LINE」のどちらかが登場する形式だったため、ダミー変数 location を用意し、ビネットに対応させる形で「廊下」あるいは「LINE」とした。

分析にあたっては上記に記した pain、closeness、damage、location の 4 つのダミー変数を用いる。

<分析方針>

仮説を検証する前に、三つの説明変数についてそれぞれ不快度の平均値を比較した。次に、各説明変数がそれぞれ不快度に与える効果を回帰分析により求めた。

次に、仮説に従って加害者と受け手の親しさと、行為の場所三つの説明変数を二つずつ組み合わせ、合計三組の相互作用効果分析を行なった。

3. 結果

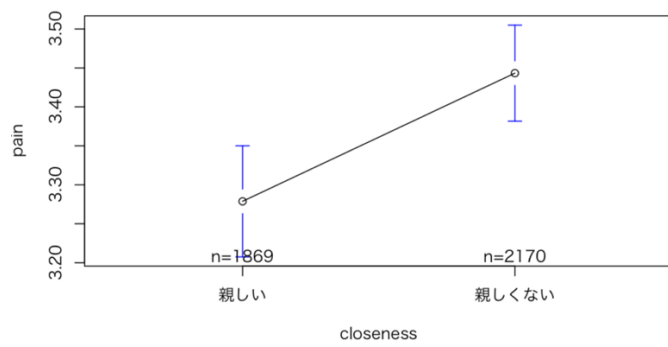


図 1

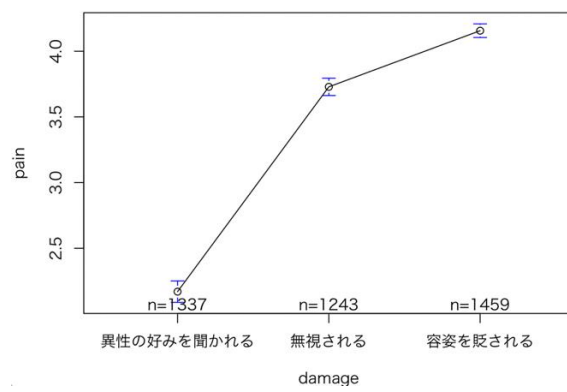


図 2

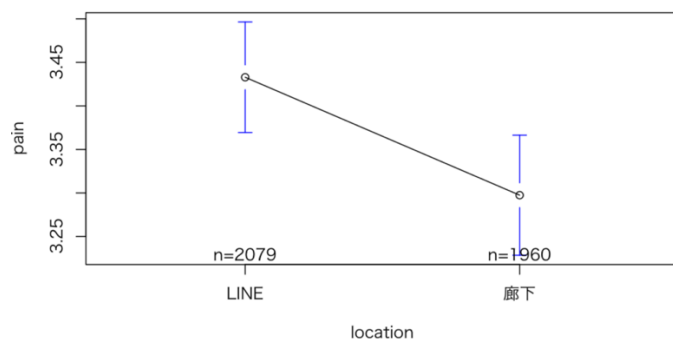


図 3

	主効果のみ	親しさ*場所	場所*行為	親しさ*行為
(Intercept)	2.16 *** (0.04)	2.26 *** (0.05)	2.27 *** (0.05)	1.98 *** (0.06)
closeness親しくない	0.17 *** (0.04)	0.03 (0.06)	0.15 *** (0.04)	0.46 *** (0.07)
location廊下	-0.18 *** (0.04)	-0.33 *** (0.06)	-0.38 *** (0.07)	-0.12 ** (0.04)
damage無視される	1.56 *** (0.05)	1.52 *** (0.05)	1.42 *** (0.07)	1.93 *** (0.07)
damage容姿を貶される	2.00 *** (0.05)	1.99 *** (0.05)	1.85 *** (0.07)	2.12 *** (0.07)
closeness親しくない:location廊下		0.29 *** (0.08)		
location廊下:damage無視される			0.28 ** (0.10)	
location廊下:damage容姿を貶される			0.30 ** (0.09)	
closeness親しくない:damage無視される				-0.68 *** (0.10)
closeness親しくない:damage容姿を貶される				-0.22 * (0.09)
R ²	0.33	0.33	0.33	0.34
Adj. R ²	0.33	0.33	0.33	0.34
Num. obs.	4039	4039	4039	4039
*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05				

図 4

図 1 ～ 3 に、各説明変数の不快度の平均値を示した。図 4 には、縦方向に 4 つの分析の結果を示した。上段の見出しに対応する形で、左から順に主効果のみの分析結果、親しさと場所の相互作用効果の分析結果、場所と行為の種類相互作用効果の分析結果、親しさと場所の相互作用効果の分析結果である。まず前半の平均値の比較及び主効果のみの分析より、

- ・加害者が親しくない相手であるほど、不快度は高まる。
- ・行為場所が LINE、つまり非対面の状況であるほど不快度は高まる。
- ・異性の好みを聞かれる、無視される、容姿を貶される、の順で不快度は高まる。

の三点がわかった。

続いて、三組の相互作用効果の分析結果をまとめる。親しさと場所の相互作用効果を図ると、場所が廊下であるとき、親しい場合に比べて親しくないことの効果は $0.03 + 0.29 = 0.32$ であり、親しくないとき、対面に比べて場所が廊下であることの効果は

$-0.33+0.29=-0.04$ であった。行為場所と加害者・被害者の親しさは、t 検定の結果より、99.9%信頼区間で不快感をあたえる上での有意な相互作用効果をもつ。

場所と行為の種類の相互作用効果を図ると、「場所が廊下である時、異性の好みを聞かれること」に比べ、「場所が廊下である時、無視されること」の効果は $1.42+0.28=1.70$ であり、t 検定の結果、有意であった。同じく「場所が廊下である時、容姿を貶されること」の効果は $1.85+0.30=2.15$ であり、有意であった。反対に、「異性の好みを聞かれる時、場所が廊下であること」に比べ、「無視される時、場所が廊下であること」の効果は、 $(-0.38)+1.42+0.28=1.32$ であり、有意であった。「容姿を貶される時、場所が廊下であること」の効果も、 $(-0.38)+1.85+0.30=1.77$ で有意であった。

親しさと行為の種類の交互作用効果を図ると、「親しくない場合に異性の好みを聞かれること」に比べ、「親しくない場合に、無視されること」の効果は、 $1.93-0.68=1.25$ で有意であった。「親しくない場合に、容姿を貶されること」の効果も、 $2.12-0.22=1.90$ で有意であった。反対に、「異性の好みを聞かれる時、親しくないことの効果」に比べ、「無視される時、親しくないこと」の効果は $0.46-0.68=-0.22$ で有意であった。さらに、「容姿を貶される時、親しくないこと」の効果は $0.46-0.22=0.24$ でやや有意であった。

4. 考察

以上の結果より、設定した組み合わせ全てにおいて相互作用効果は有意であった。親しさと場所の分析からは、対面状況においては親しくない相手が加害者である時ほど不快感は高まり、反対に親しい相手が加害者の場合、対面状況であれ不快だと感じられにくいことがわかった。

場所と行為の種類の分析からは、場所に関わらず異性の好みを聞かれることには不快感は喚起されない傾向があり、特に対面の時は著しく不快とは感じられないといえる。一方で、無視されたり、容姿を貶されることは廊下・LINE どちらの場合も不快ととらえられやすく、とくに対面状況で不快とみなされることもわかった。

親しさと行為の種類の分析からは、親しくない相手が加害者の場合、不快度が高い行為は平均的に不快度が高いとされる順番と一致するといえる。一方で、行為の種類に注目すると、加害者が親しくない相手であるほど異性の好みを聞かれることに比べ、無視は不快とは感じない傾向にある。また、同様の場合において、容姿を貶されることは変わらず不快感を喚起することもわかった。

よって、親しさと場所の相互作用分析より仮説①「加害者が親しい相手であれば、行為の種類にかかわらず、それが対面で行われる限りにおいて、セクハラだとみなされにくい」は支持され、仮説②「加害者が親しくない相手である場合には、行為の種類にも、場所にもかかわらず、セクハラだとみなされやすい」は、部分的に支持される結果となった。具体的には、親しさと行為の種類の相互作用効果の分析より、加害者が親しくないほど、「無視される」ことに対しては不快度が減少するといえる。これは、相手と自分が親しくなければそもそも相手の自分への態度に関心が薄く、無視されることに対してマイナスな感情を抱くことさえないからだと推測できる。

<参考文献>

鈴木恭子， 2018，「労働市場の潜在構造と雇用形態が賃金に与える影響—Finite Mixture Model を用いた潜在クラス分析」『日本労働研究雑誌』 698： 73-89.

太郎丸博， 2020，「メタ分析によるセクハラ大学教授の平均年齢と身分の推定」『京都社会学年報』 28： 15-27.

麦山亮太， 2017，「職業経歴と結婚への移行 —雇用形態・職種・企業規模と地位変化の効果における男女差—」『家族社会学研究』 29(2)： 129-141.

調査票

セクハラ調査 A

この調査は京都大学文学部・社会学実習で実施する調査です。調査結果は教育・研究目的のためにのみ用い、個人情報などが流出することはありません。

Q1 あなたの性別は？

☐男 ☐女 ☐その他

Q2 あなたの学年等は？

☐1 年生 ☐2 年生 ☐3 年生 ☐4 年生

☐大学院生 ☐研究生、聴講生など ☐大学には在籍していない

Q3 あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の6段階で評価してください。

	とても 不快で ある	どちらかと いえば不快 である	どちらかと いえば不快 ではない	不快 ではない	まったく 不快では ない
親しいゼミの先輩（女で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた。	☐	☐	☐	☐	☐
親しいゼミの友人（女でストレート）から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	☐	☐	☐	☐	☐
あまり親しくないゼミの先輩（男でストレート）からLINE で異性の好みについて聞かれた。	☐	☐	☐	☐	☐

親しいゼミの友人（男で同性愛者）から LINE で容姿をけなされた。	○	○	○	○	○	○
あまり親しくないゼミの友人（女でストレート）から LINE で異性の好みについて聞かれた。	○	○	○	○	○	○
親しいゼミの先輩（男で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。	○	○	○	○	○	○
親しいゼミの教授（女で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。	○	○	○	○	○	○
あまり親しくないゼミの先輩（女で同性愛者）から LINE で異性の好みについて聞かれた。	○	○	○	○	○	○
あまり親しくないゼミの友人（男で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	○	○	○	○	○	○
あまり親しくないゼミの先輩（女でストレート）から LINE で夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	○	○	○	○	○	○
あまり親しくないゼミの教授（男でストレート）から LINE で容姿をけなされた。	○	○	○	○	○	○
あまり親しくないゼミの先輩（男でストレート）から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	○	○	○	○	○	○
あまり親しくないゼミの教授（女でストレート）から	○	○	○	○	○	○

廊下で立ち話をしていると
きに容姿をけなされた。

Q4 あなたの通っている大学を教えてください。

☐ 京都大学 ☐ その他(直接入力)

Q5 回答中で答えにくかった点や感想などあれば自由に書いてください。

以上で質問は終わりです。ご協力ありがとうございました。

セクハラ調査 B

この調査は京都大学文学部・社会学実習で実施する調査です。調査結果は教育・研究目的のためにのみ用い、個人情報などが流出することはありません。

Q1 あなたの性別は？

☐ 男 ☐ 女 ☐ その他

Q2 あなたの学年等は？

☐ 1 年生 ☐ 2 年生 ☐ 3 年生 ☐ 4 年生

☐ 大学院生 ☐ 研究生、聴講生など ☐ 大学には在籍していない

Q3 あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。

	とても 不快で ある	不快で ある	どちら かとい えば不 快	どちら かとい えば不 快で はな い	不快 では ない	まった く不快 では ない
あまり親しくないゼミの先輩（女で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが、断る	☐	☐	☐	☐	☐	☐

と無視されるようになった。

あまり親しくないゼミの教授（男で同性愛者）から LINE で夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。

○ ○ ○ ○ ○ ○

親しいゼミの友人（女で同性愛者）から LINE で夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。

○ ○ ○ ○ ○ ○

親しいゼミの友人（女で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた。

○ ○ ○ ○ ○ ○

あまり親しくないゼミの先輩（男で同性愛者）から LINE で容姿をけなされた。

○ ○ ○ ○ ○ ○

親しいゼミの先輩（女でストレート）から LINE で容姿をけなされた。

○ ○ ○ ○ ○ ○

あまり親しくないゼミの友人（男で同性愛者）から LINE で異性の好みについて聞かれた。

○ ○ ○ ○ ○ ○

あまり親しくないゼミの教授（女でストレート）から LINE で異性の好みについて聞かれた。

○ ○ ○ ○ ○ ○

親しいゼミの先輩（男でストレート）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた。

○ ○ ○ ○ ○ ○

親しいゼミの先輩（女でストレート）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。

○ ○ ○ ○ ○ ○

親しいゼミの友人（男でストレート）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。

○ ○ ○ ○ ○ ○

あまり親しくないゼミの友人（女でストレート）から LINE で容姿をけなされた。

☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐

親しいゼミの教授（男でストレート）から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。

☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐

Q4 あなたの通っている大学を教えてください。

☐ 京都大学 ☐ その他(直接入力)

Q5 回答中で答えにくかった点や感想などあれば自由に書いてください。

以上で質問は終わりです。ご協力ありがとうございました。

セクハラ調査 C

この調査は京都大学文学部・社会学実習で実施する調査です。調査結果は教育・研究目的のためにのみ用い、個人情報などが流出することはありません。

Q1 あなたの性別は？

☐ 男 ☐ 女 ☐ その他

Q2 あなたの学年等は？

☐ 1 年生 ☐ 2 年生 ☐ 3 年生 ☐ 4 年生

☐ 大学院生 ☐ 研究生、聴講生など ☐ 大学には在籍していない

Q3 あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。

	とても 不快で ある	不快で ある	どち らかと いえば 不快	どちらかと いえば不快 ではな い	不快 では ない	まったく 不快では ない
あまり親しくないゼミの教授（女で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	○	○	○	○	○	○
親しいゼミの教授（男でストレート）から LINE で異性の好みについて聞かれた。	○	○	○	○	○	○
親しいゼミの教授（女でストレート）から LINE で夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	○	○	○	○	○	○
あまり親しくないゼミの友人（男でストレート）から LINE で夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	○	○	○	○	○	○
親しいゼミの教授（男で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた。	○	○	○	○	○	○
あまり親しくないゼミの先輩（女でストレート）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた。	○	○	○	○	○	○
あまり親しくないゼミの教授（女で同性愛者）から LINE で容姿をけなされた。	○	○	○	○	○	○
親しいゼミの友人（女で同性愛者）から LINE で異性の好みについて聞かれた。	○	○	○	○	○	○
あまり親しくないゼミの友人（男でストレート）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた。	○	○	○	○	○	○

あまり親しくないゼミの友人（女で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。

☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐

親しいゼミの先輩（男で同性愛者）から LINE で夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。

☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐

あまり親しくないゼミの教授（男でストレート）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。

☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐

親しいゼミの教授（女でストレート）から LINE で容姿をけなされた。

☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐

Q4 あなたの通っている大学を教えてください。

☐京都大学 ☐その他(直接入力)

Q5 回答中で答えにくかった点や感想などあれば自由に書いてください。

以上で質問は終わりです。ご協力ありがとうございました。

単純集計表

以下の表の数値の単位は人。

調査票の種類

A 票	B 票	C 票	計
95	100	116	311

問 1 性別

男	女	その他	計
133	174	4	311

問 2 学年

1 年生	19
2 年生	61
3 年生	118
4 年生	51
大学院生	54
研究生、聴講生など	8
大学には在籍していない	0
計	311

問 3 大学

京都大	197
同志社	7
立命館	7
大阪大	6
早稲田	4
その他	60
無回答	30
計	311

問 4 次のようなことを体験すると感じる不快程度（A 票）

	とても 不快で ある	不快で ある	どちら かとい えば不 快	どちら かとい えば不 快では ない	不快で はない	まったく 不快では ない	計
親しいゼミの先輩（女で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた。	22	38	23	2	5	5	95
親しいゼミの友人（女でストレート）から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	25	37	19	5	5	4	95
あまり親しくないゼミの先輩（男でストレート）から LINE で異性の好みについて聞かれた。	12	14	23	15	14	17	95
親しいゼミの友人（男で同性愛者）から LINE で容姿をけなされた。	25	34	27	5	2	2	95
あまり親しくないゼミの友人（女でストレート）から LINE で異性の好みについて聞かれた。	7	6	15	23	23	21	95
親しいゼミの先輩（男で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。	5	3	14	22	24	27	95
親しいゼミの教授（女で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。	8	3	16	23	27	18	95
あまり親しくないゼミの先輩（女で同性愛者）から LINE で異性の好みについて聞かれた。	8	8	17	29	20	13	95
あまり親しくないゼミの友人（男で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが、断る	21	30	21	11	10	2	95

と無視されるようになった。

あまり親しくないゼミの先輩（女でストレート）から LINE で夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。

あまり親しくないゼミの教授（男でストレート）から LINE で容姿をけなされた。

あまり親しくないゼミの先輩（男でストレート）から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。

あまり親しくないゼミの教授（女でストレート）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた。

問 4 次のようなことを体験すると感じる不快程度（B 票）

	とても 不快で ある	不快で ある	どちら かとい えば不 快	どちら かとい えば不 快では ない	不快 ではな い	まったく 不快で はない	計
あまり親しくないゼミの先輩（女で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	26	38	24	4	7	1	100
あまり親しくないゼミの教授（男で同性愛者）から LINE で夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	37	36	17	4	4	1	99
親しいゼミの友人（女で同性愛者）から LINE で夕食	30	38	24	5	0	3	100

に誘われたが、断ると無視されるようになった。							
親しいゼミの友人（女で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた。	41	33	21	4	1	0	100
あまり親しくないゼミの先輩（男で同性愛者）から LINE で容姿をけなされた。	64	26	7	3	0	0	100
親しいゼミの先輩（女でストレート）から LINE で容姿をけなされた。	42	37	16	4	1	0	100
あまり親しくないゼミの友人（男で同性愛者）から LINE で異性の好みについて聞かれた。	13	13	23	23	19	9	100
あまり親しくないゼミの教授（女でストレート）から LINE で異性の好みについて聞かれた。	10	20	29	19	16	5	99
親しいゼミの先輩（男でストレート）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた。	51	29	13	6	1	0	100
親しいゼミの先輩（女でストレート）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。	3	4	8	17	37	30	99
親しいゼミの友人（男でストレート）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。	5	6	13	23	35	18	100
あまり親しくないゼミの友人（女でストレート）から LINE で容姿をけなされた。	47	38	11	3	1	0	100
親しいゼミの教授（男でストレート）から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	41	42	10	5	1	1	100

問 4 次のようなことを体験すると感じる不快程度 (c 票)

	とても 不快で ある	不快で ある	どちら かとい えば不 快	どちら かとい えば不 快では ない	不快 ではな い	まったく 不快では ない	計
あまり親しくないゼミの教授（女で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	34	50	25	6	0	1	116
親しいゼミの教授（男でストレート）から LINE で異性の好みについて聞かれた。	26	25	30	14	16	5	116
親しいゼミの教授（女でストレート）から LINE で夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	37	50	20	5	3	1	116
あまり親しくないゼミの友人（男でストレート）から LINE で夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	27	44	28	13	3	1	116
親しいゼミの教授（男で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた。	55	37	18	5	0	1	116
あまり親しくないゼミの先輩（女でストレート）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた。	60	38	15	1	1	1	116
あまり親しくないゼミの教授（女で同性愛者）から LINE で容姿をけなされた。	62	37	15	0	1	1	116
親しいゼミの友人（女で同性愛者）から LINE で異性の好みについて聞かれた。	8	9	12	25	42	20	116

あまり親しくないゼミの友人（男でストレート）から廊下で立ち話をしているときに容姿をけなされた。	59	39	13	2	1	2	116
あまり親しくないゼミの友人（女で同性愛者）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。	2	8	26	34	33	13	116
親しいゼミの先輩（男で同性愛者）から LINE で夕食に誘われたが、断ると無視されるようになった。	28	50	29	6	0	3	116
あまり親しくないゼミの教授（男でストレート）から廊下で立ち話をしているときに異性の好みについて聞かれた。	19	30	41	14	6	6	116
親しいゼミの教授（女でストレート）から LINE で容姿をけなされた。	51	38	20	5	0	1	115

どんな要因がハラスメントを不快にするのか

京都大学文学部社会学研究室 2021 年度社会学実習 報告書

2022 年 3 月発行

編集・発行：太郎丸 博

京都大学文学部社会学研究室

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
